

箱崎 6

—箱崎遺跡群第10次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集

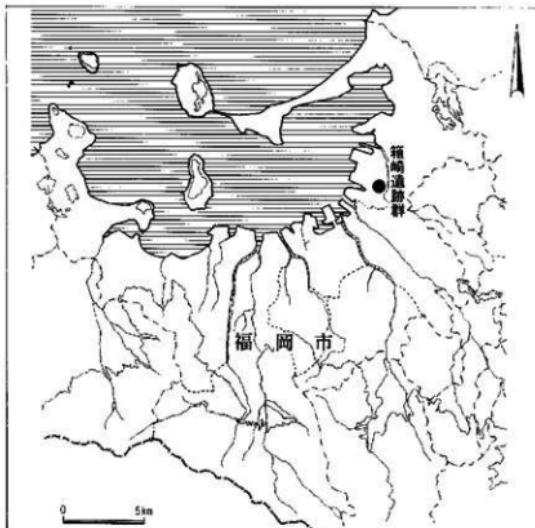


1998

福岡市教育委員会

はこざき
箱崎 6

—箱崎遺跡群第10次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集



調査番号 9646
調査略号 HKZ-10

1998
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします箱崎遺跡群は、筥崎宮を中心に発達したところで、「博多」と並ぶ、中世の国際貿易都市といえます。この調査では、多数の輸入陶磁器や鋳造関係の遺物など貴重な発見が相次ぎました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田英俊

例　　言

- 本書は、福岡市東区箱崎3丁目地内の道路建設に伴い、福岡市教育委員会が1996（平成8）年11月11日から1997（平成9）年3月31日にかけて発掘調査を実施した箱崎（はこざき）遺跡群第10次調査の報告書である。
- 遺構の呼称は記号化し、建物→S B、溝→S D、井戸→S E、土坑→S K、その他→S X、ピット→S Pとした。遺構番号はピット以外を種類に関係なく連番とした。ピットは別に番号を付けた。
- 本書に使用した遺構実測図は長家伸、瀬戸啓治、藤野雅基、中野美穂子、西山めぐみ、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は田中克子、平川敬治、橋本幸樹、甲斐田嘉子、森部順子、田上が作成した。また、製図には田中、木村良子、丸井節子、田上があたった。
- 本書に使用した写真は田上が撮影した。
- 本書に使用した標高は海拔高である。
- 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し $6^{\circ}20'$ 西偏する。
- 出土した陶磁器の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984）による。
- 出土した動物骨について鹿児島大学の西中川駿氏に正稿を頂いた。
- 本書の執筆はIVを除いて田上が、編集は田上が行なった。
- 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

調査番号	9646		遺跡略号	HKZ-10	
調査地地籍	東区箱崎3丁目地内		分布地図番号	箱崎 34	
開発面積	16,250m ²	調査対象面積	1,850m ²	調査面積	1,020m ²
調査期間	1996年（平成8年）11月11日～1997年（平成9年）3月31日				

目 次

I はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	1
II 調査の記録	5
1. 調査の経過	5
2. 調査の概要	5
3. 発見された遺構と遺物	14
(1) 建物	14
(2) 溝	14
(3) 井戸	18
(4) 土坑	27
(5) その他の遺構	47
(6) 包含層	49
(7) 抽出した遺物	51
III まとめ	63
IV 福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体	71

挿 図 目 次

Fig. 1 箱崎遺跡群の位置	2
Fig. 2 箱崎遺跡群調査地点位置図	4
Fig. 3 調査区分位置図	6
Fig. 4 調査区域図	7
Fig. 5 遺構分布図 1	8
Fig. 6 遺構分布図 2	9
Fig. 7 遺構分布図 3	10
Fig. 8 SB51	14
Fig. 9 溝断面図	15
Fig. 10 清出土遺物	17
Fig. 11 SET3	18
Fig. 12 SE73出土遺物	18
Fig. 13 SE77	19
Fig. 14 SK77出土遺物	19
Fig. 15 SE107	20
Fig. 16 SE107出土遺物	20
Fig. 17 SE108	21
Fig. 18 SE108出土遺物	21
Fig. 19 SE109	22
Fig. 20 SE109出土遺物	22
Fig. 21 SE239	22
Fig. 22 SE239出土遺物	22
Fig. 23 SE260・263	23
Fig. 24 SE260出土遺物	23
Fig. 25 SE156	23
Fig. 26 SE156出土遺物	23
Fig. 27 SE180	24
Fig. 28 SE180出土遺物	24
Fig. 29 SE196・202・203	24
Fig. 30 SE196・202出土遺物	25
Fig. 31 SE197・204	25
Fig. 32 SE197・204出土遺物	25
Fig. 33 SE198・205	26
Fig. 34 SE205出土遺物	26
Fig. 35 SE235	26
Fig. 36 SE235出土遺物	26
Fig. 37 SK01	27
Fig. 38 SK01出土土師器法量グラフ	28
Fig. 39 SK01出土遺物 1	28
Fig. 40 SK01出土遺物 2	29
Fig. 41 SK02	30
Fig. 42 SK02出土土師器法量グラフ	31
Fig. 43 SK02出土遺物 1	31
Fig. 44 SK02出土遺物 2	33
Fig. 45 SK04	34
Fig. 46 SK04出土土師器法量グラフ	34
Fig. 47 SK04出土遺物	35
Fig. 48 SK05	35
Fig. 49 SK05出土遺物	36
Fig. 50 SK06	36

Fig. 51	SK06出土土師器法量グラフ	37
Fig. 52	SK06出土遺物	37
Fig. 53	SK08	37
Fig. 54	SK08出土土師器法量グラフ	38
Fig. 55	SK08出土遺物	39
Fig. 56	SK09	40
Fig. 57	SK09出土土師器法量グラフ	40
Fig. 58	SK09出土遺物	40
Fig. 59	SK17	41
Fig. 60	SK17出土土師器法量グラフ	41
Fig. 61	SK17出土遺物	41
Fig. 62	SK18	42
Fig. 63	SK18出土土師器法量グラフ	42
Fig. 64	SK18出土遺物	42
Fig. 65	SK20	43
Fig. 66	SK20出土土師器法量グラフ	44
Fig. 67	SK20出土遺物	44
Fig. 68	SK30	45
Fig. 69	SK30出土遺物	45
Fig. 70	SK87	45
Fig. 71	SK87出土遺物	45
Fig. 72	SK240	46
Fig. 73	SK240出土土師器法量グラフ	46
Fig. 74	SK240出土遺物	46
Fig. 75	SK190	47
Fig. 76	SX200	48
Fig. 77	SX200 出土遺物	49
Fig. 78	発掘区東端南壁土層	49
Fig. 79	包含層出土遺物	50
Fig. 80	抽出した遺物 1	52
Fig. 81	抽出した遺物 2	53
Fig. 82	墨書き磁器	53
Fig. 83	生産関連遺物	55
Fig. 84	SD158銅錢出土位置	58
Fig. 85	SD158銅錢出土狀況	58
Fig. 86	SD158出土銅錢拓影 1	59
Fig. 87	SD158出土銅錢拓影 2	60
Fig. 88	SD158出土銅錢拓影 3	61
Fig. 89	出土銭拓影	62

図版目次

PL. 1	調査区全景	6
PL. 2	I 区全景	11
PL. 3	II 区全景	11
PL. 4	III 区全景	12
PL. 5	IV 区全景	12
PL. 6	V 区全景	13
PL. 7	VI 区全景	13
PL. 8	SB51	14
PL. 9	SD23	16
PL. 10	SD74	16
PL. 11	SD82・84	16
PL. 12	SD158	16
PL. 13	SD50出土遺物	16
PL. 14	SE73	18
PL. 15	SE77	19
PL. 16	SE107・108・109・239・ 260・263	19
PL. 17	SE107	20
PL. 18	SE108	21
PL. 19	SE109	22
PL. 20	SE109出土遺物	22
PL. 21	SE239	22
PL. 22	SE156	23
PL. 23	SE180	24
PL. 24	SE196・202・203	24
PL. 25	SE197・204	25
PL. 26	SE198・205	26
PL. 27	SE205出土遺物	26
PL. 28	SE235	26
PL. 29	SK01	27
PL. 30	SK01出土遺物	29
PL. 31	SK02	30
PL. 32	SK02出土遺物	32
PL. 33	SK04	34
PL. 34	SK04出土遺物	34
PL. 35	SK05	35
PL. 36	SK05出土遺物	36
PL. 37	SK06	37
PL. 38	SK08出土遺物	39
PL. 39	SK09	40
PL. 40	SK17	41
PL. 41	SK18	42
PL. 42	SK20	43
PL. 43	SK20出土遺物	44
PL. 44	SK30	45
PL. 45	SK30出土遺物	45
PL. 46	SK240	46
PL. 47	SK190	47
PL. 48	SX200	48
PL. 49	発掘区東端南壁土層	49
PL. 50	包含層出土遺物	50
PL. 51	抽出した遺物	51
PL. 52	墨書き陶磁器	54
PL. 53	生産関連遺物	56
PL. 54	石製品・土製品	57
PL. 55	SD158銅錢出土狀況	58

表目次

Tab. 1	箱崎遺跡群調査一覧	3
Tab. 2	鋳造関連出土遺構一覧	55
Tab. 3	SD158出土銅錢一覧	61
Tab. 4	SD158出土銅錢貨名一覧	62
Tab. 5	出土銭一覧	62
Tab. 6	遺構一覧	64

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

1995年（平成7年）7月24日付文書（上笠第62号）で、土木局芦崎連続立体開発事務所から埋蔵文化財課へ、福岡市東区箱崎3丁目～原田2丁目における都市計画道路箱崎阿志線道路整備事業に関する埋蔵文化財事前調査額が提出された。当該地のうち、箱崎3丁目地内が箱崎遺跡群の範囲にかかるため、埋蔵文化財課では、1995年（平成7年）8月1日と1996年（平成8年）4月23日・5月8日に試掘調査を行ない、1850m²について発掘調査が必要である旨を回答した。その後の協議により発掘調査を実施することとなり、1996年11月11日より1997年3月31日まで調査を行なった。整理作業と報告書の刊行は1997年度（平成9年度）に行なった。

2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 福岡市土木局芦崎連続立体開発事務所

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査統括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝 第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基

調査担当 埋蔵文化財課第1係 浜石哲也 杉山富雄 櫻本義嗣 （試掘調査）

埋蔵文化財課第2係 田上勇一郎 （本調査）

調査補助 漢戸啓治

調査作業 石橋テル子 今別府序子 岡部静江 金子國雄 金子澄子 唐島栄子 境フジ子

酒井康恵 坂田武 杉村百合子 高崎秀巳 高田歎 让美佐江 中野美穂子 永松伊都子
水松トミ子 西山めぐみ 布江孝子 日尾野典子 藤野雅基 森本勇夫 吉住政光

整理補助 田中克子 平川敬治

整理作業 木村良子 丸井節子 甲斐田嘉子 森部順子

また、本調査の開始から報告書刊行にいたるまで次の方々にご指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

西中川駿（鹿児島大学）、中橋孝博（九州大学）、櫻木晋（下関大学）、中山光夫（日本鉱業史研究会会員）

3. 調査地点の立地と環境

箱崎遺跡群は博多湾東岸に形成された南北に長い砂丘上に立地する。この砂丘上には箱崎遺跡群のほかに堅粕遺跡、古塚遺跡、吉塚木町遺跡、吉塚祝町遺跡が知られている。

今回調査した箱崎遺跡群は砂丘の北端にあたり、旧糟屋郡に属する箱崎から旧那珂郡に属する馬出にかけての地域に所在する。中心には923年創建の芦崎宮が鎮座する。西は博多湾に臨み、東を多々良川の支流、宇美川により両されている。北側は多々良川の河口があるが、かつてはここから芦崎宮の東側まで海が深くはいり込み、「箱崎ノ津」と呼ばれる芦崎宮の私港があった。

芦崎宮は921年（延喜21年）、大宰府觀世音寺の巫女に八幡大菩薩の託宣があり、それによって、923年（延長元年）に、穂波郡にあった大分宮を現在の地に遷座・創建したものである。その理由として、

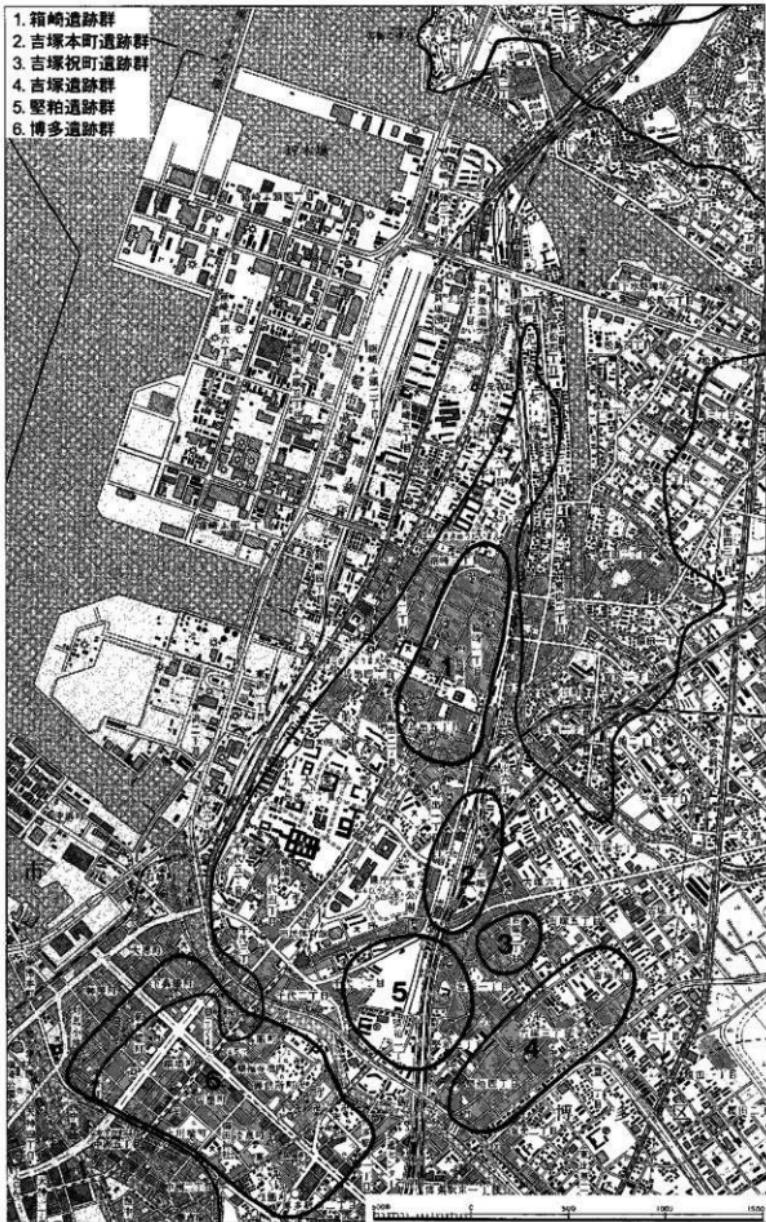


Fig. 1 箱崎遺跡群の位置 (1/25,000)

八幡大菩薩の重要行事の一つ放生会の最適地であること、新羅の来寇を防ぐことなどがあげられている。1140年（保延6年）、筥崎宮・香椎宮などの神人らが大宰府以下屋敷數十家屋を焼き払う事件が発生、筥崎宮は香椎宮とともに大宰府の府領となる。1151年（仁平元年）には大宰府官人による筥崎・博多の大追捕があり、宋人土界の後家をはじめ六百家の資材物を選び取り、筥崎宮にも乱入している。これらは筥崎宮と大宰府、日宋貿易との関係を物語る事件である。1274年（文永1年）、元寇により筥崎宮は消失している。1587年（天正15年）には、豊臣秀吉は島津氏攻略の帰途、筥崎宮を本陣とし、箱崎松原で茶会を催している。

考古学的な調査は1983年の地下鉄2号線（箱崎線）建設に先がけて実施されたのが最初であり、現在まで13次にわたり調査が行なわれている。

これまでの調査で時期的に遡るのは6次調査で出土した石斧で、純文時代晚期から弥生時代初頭に属するものと考えられるが、中世の遺構から出土しているため、この時期から人々が生活していたかどうかは確定性に乏しい。

確実に生活痕跡が認められるのは8次調査で発見された古墳時代初頭の堅穴住居と土坑である。イイダコ塗が多数出土しており、博多湾で漁業を営む集団が生活していたようである。

奈良時代の遺構・遺物は今回の10次調査で上師器の甕が出土しているにとどまる。これは近代の井戸の掘削から出土したもので、明瞭な生活痕跡を示すものではない。

筥崎宮の創建のころの遺構としては、2次調査で検出した10世紀後半の構くらいで、現在のところ不明である。

11世紀後半ごろから遺構・遺物が増加する。多量に出土する輸入陶磁器から、博多とともに箱崎が対外貿易の拠点であったことが裏付けられている。

2次調査地点では1274年の文永の役による火災の後の整地と見られる整地層が発見されている。

14世紀から15世紀の頃、筥崎宮周辺の1次、2次、3次調査地点などでは定型化した集落が形成されはじめ、この頃、筥崎宮の門前町として栄えたようである。

今回の10次調査地点は、箱崎遺跡群の北部の東端にある。標高は3.8m～2.5mで、東に緩やかに傾斜している。道路を隔てた向かい側には6次調査地点が所在する。

Tab. 1 箱崎遺跡群調査一覧

調査次数	調査年	所 在 地	調査原因	文 献
第1次調査	1983年	馬出2丁目、5丁目地内	地下鉄建設	市報193集(1988)
第2次調査	1986年	箱崎1丁目18-32外	福岡県柏原組合序舎建設	県報79集(1987)
第3次調査	1990年	箱崎1丁目2731-1、4	共同住宅建設	市報262集(1991)
第4次調査	1990年	箱崎1丁目2761	筥崎宮放生池掘削	市年報Vol.4(1991)
第5次調査	1991年	箱崎1丁目25、27	共同住宅建設	市報273集(1992)
第6次調査	1994年	箱崎3丁目8-31	共同住宅建設	市報459集(1996)
第7次調査	1994年	箱崎1丁目2711外4筆	共同住宅建設	市報459集(1996)
第8次調査	1996年	箱崎1丁目2549-1外	共同住宅建設	未報告
第9次調査	1996年	箱崎1丁目1935-1	共同住宅建設	市報550集(1998)
第10次調査	1996年	箱崎3丁目地内	道路建設	本書
第11次調査	1997年	箱崎3丁目3264-3	病院建設	未報告
第12次調査	1997年	箱崎1丁目2606-3-1	個人住宅建築	未報告
第13次調査	1997年	馬山5丁目520、521	共同住宅建設	未報告

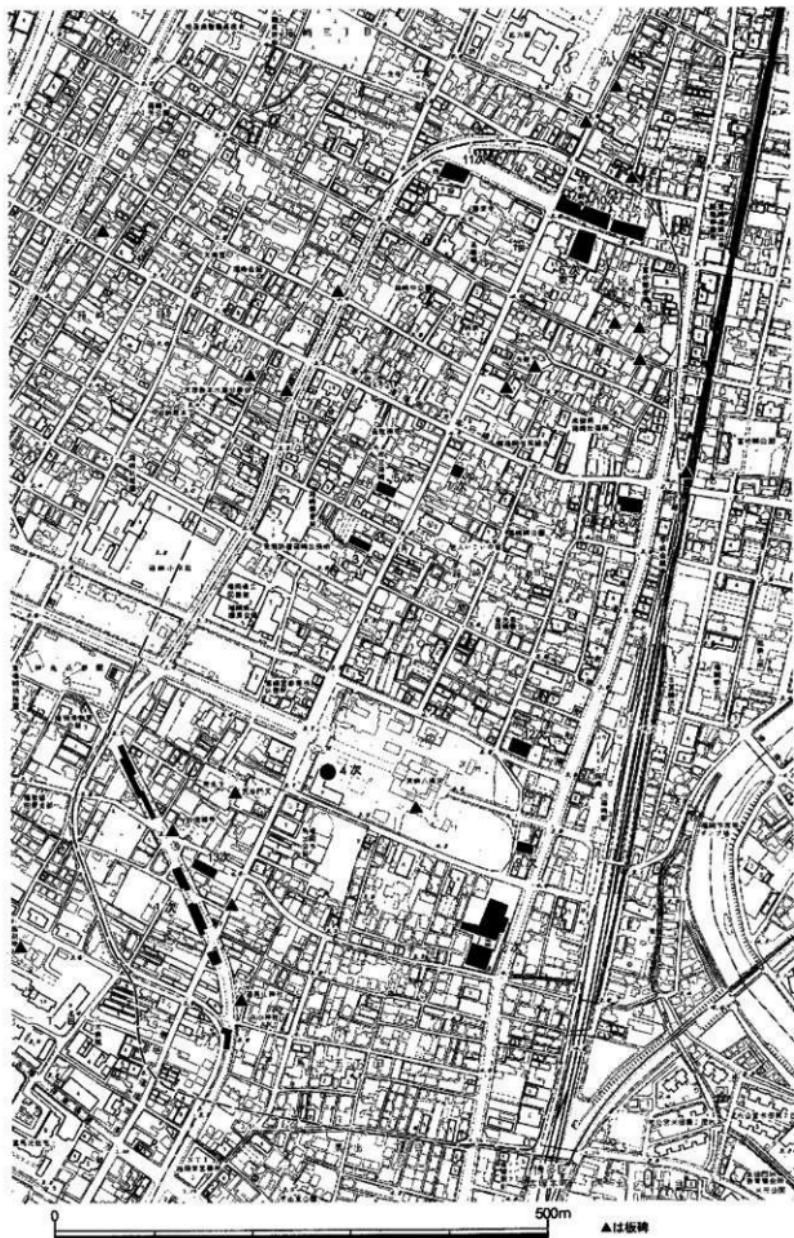


Fig. 2 箱崎遺跡群調査地点位置図 (1/5,000)

II 調査の記録

1. 調査の経過

調査地は20m×100mの細長い道路予定地で、現在使用されている道路と民家の間にある。そのため、道路と民家の間に生活道路の確保が必要となり、未調査区を残したり、生活道路を切り替えたりすることになった。また、調査地内に排土を置く必要があったため、5区画にわけて調査を行なうこととした。各調査区を西からI区・II区…V区と名付けた。調査区全体には予定道路の軸に沿った2m方眼のグリッドを設けることとし、名称を北から南へA・B…J、西から東へ1・2…48とした。グリッドの南北方向の軸は磁北に対して30°37'東に振れている。

1996年11月11日、発掘調査機材を搬入し、11月18日、I区から表土除去に着手した。予想以上の遺構密度の濃さと遺物の量に予定していた期間をオーバーして12月23日に調査を終了し、25日に埋め戻しを完了した。年が明けて、1月7日、II区の表土除去を開始した。II区の西半の北側ではマンションの建設が行われており、そのための資材や器械の置き場の関係から北半が調査できず「L」字型の調査区となつた。1月24日に調査を終了し、1月30日までにII区の埋め戻しと、III区の表土除去を行なつた。III区は遺構確認面まで浅く、また、遺構の密度もあまり濃くなく、順調に調査が進み2月13日に終了し、2月15日までに埋め戻した。この間、2月3日にマンションの建設業者と協議し、2月17日から3月12日まで、未調査になつたII区西半の北側部分の調査ができることになり、VI区と名付け、V区と平行して調査することにした。2月17日から20日までV区とVI区の表土除去を行ない、V区では砂丘の東の落ち際を確認し、VI区ではII区で半分調査した井戸3基の反対側と、さらにそれと切り合う井戸3基を調査した。3月10日までにVI区、16日までにV区の調査を終え、埋め戻した。IV区は3月20・22日に表土除去を行ない、24日より調査を開始した。水道管やガス管が入つておらず、調査が困難であったが、28日には調査を終了、29日に埋め戻しを完了させた。31日には柵を張り直し、発掘機材を撤収し、調査をすべて完了した。

2. 調査の概要

調査地点は東西に長く、場所により状況が異なるが基本的に現在の整地土を除去すると暗褐色砂質土があり、これを下げると黄褐色の砂が現れる。この砂が現れる面で遺構の検出を行なつた。現地表面は東に緩やかに傾斜しているが、砂の面はI-24グリッド周辺の標高2.8mを最高に東西に緩やかに傾斜する。西側のI-1グリッド、東側のI-44グリッドで標高2.6mを測る。また、F-I-45~48グリッドには、この遺構検出面より下に12世紀前半の遺物包含層が形成されている。この包含層を取り除くと、I-47グリッドで、標高0.5mまで下がる。

遺構は建物1棟、溝15条、井戸24基、土坑222基、馬の埋葬土壙1基、馬の骨と人骨が集積した遺構1基、ピット多数を検出した。12世紀から近代までの遺構がある。中世の遺構・遺物は12世紀後半のものがほとんどであり、発掘区の西側に集中する。13世紀代の遺物は数えるほどしか出土していない。中世後期の遺構は、溝といくつかの土坑が見られる程度である。近世・近代になると発掘区中央から東にかけて遺構が増加する。

今回の報告では紙面の関係から近世の遺構にはふれることができず、中世の遺構についても主なものしか掲載することができなかつた。個別に説明できなかつた遺構については遺構全体図と遺構一覧表を参照されたい。

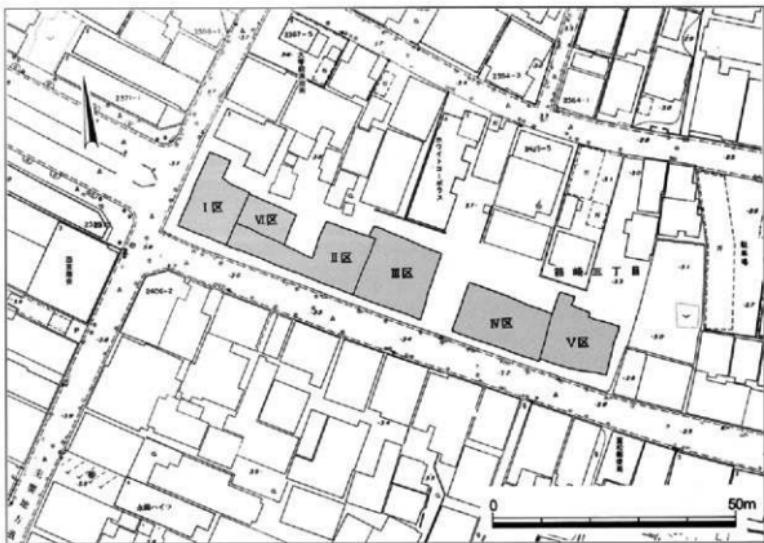
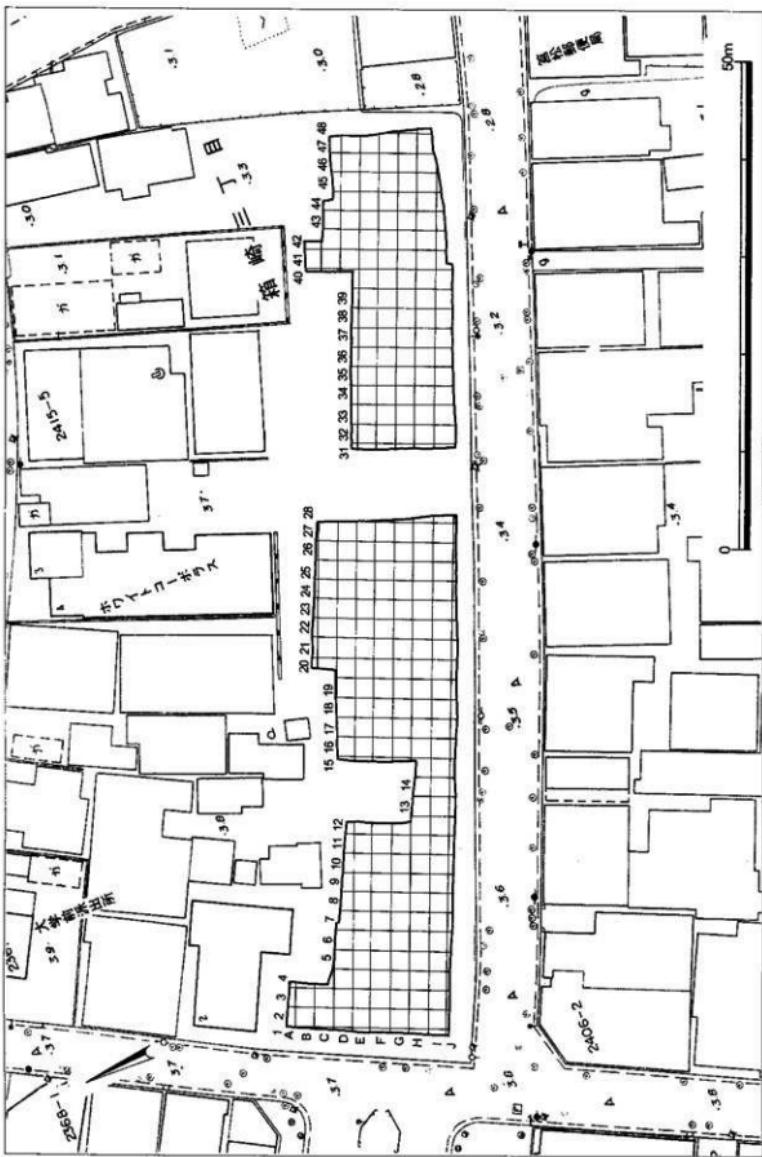


Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)



PL. 1 調査区全景（東から）

Fig. 4 調査区域図 (1/500)



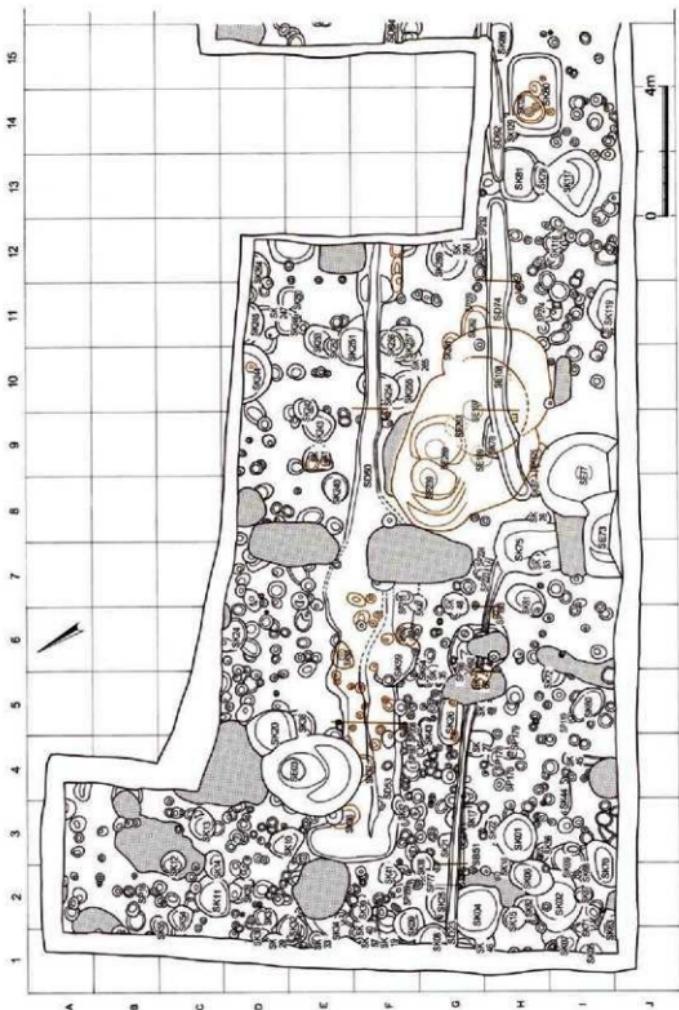


Fig. 5 造構分布図 1 (1/150)



Fig. 6 调横分布图 2 (1/150)

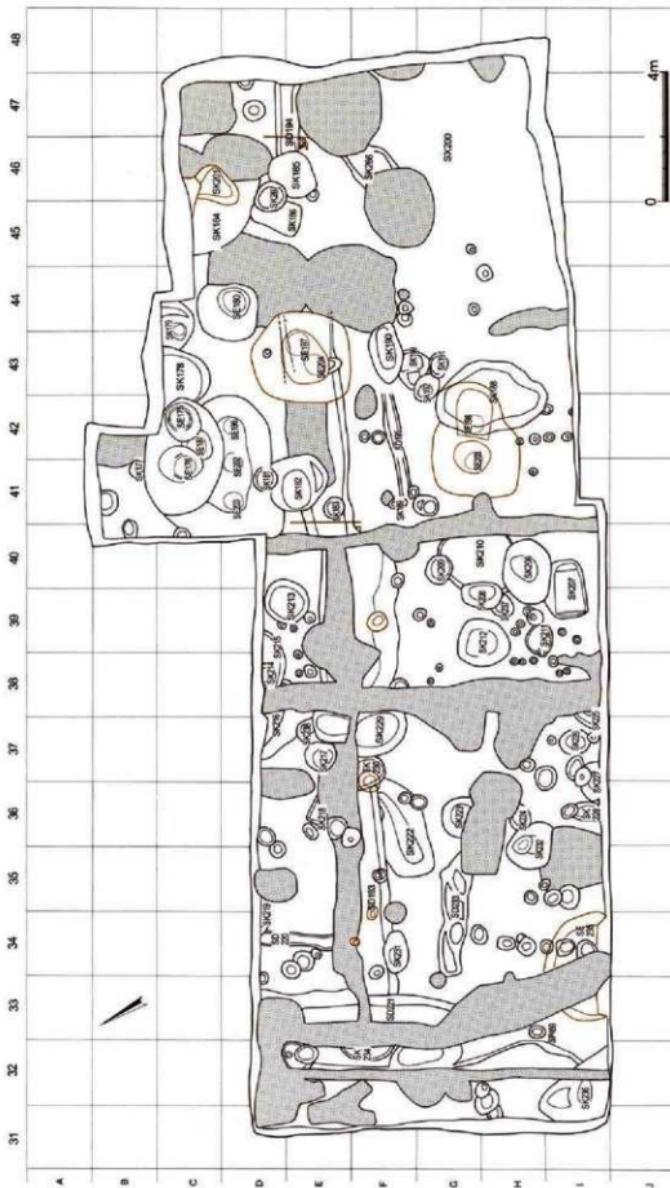


Fig. 7 遺傳分布圖 3 (1/150)



PL. 2 I 区全景（東から）



PL. 3 II 区全景（北から）



PL. 4 III区全景（南から）



PL. 5 IV区全景（東から）



PL. 6 VI区全景（西から）



PL. 7 VI区全景（北から）

3. 発見された遺構と遺物

(1) 建物

本調査では多数のピットを検出したが建物としてまとめることができたのは1棟だけであった。

SB51

F・G-2～4で1×2間分確認した。扁平な礫を礎板とするが、礫のレベルは一定ではない。SD23に切られる。出土遺物がなく、はっきりしないが、12世紀代の建物と考えている。



PL. 8 SB51 (西から)

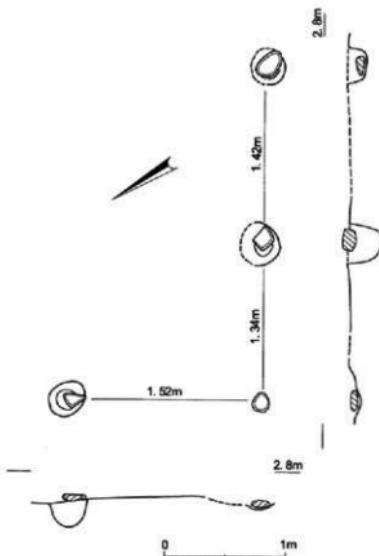


Fig. 8 SB51 (1/40)

(2) 溝

溝は15条確認した。このうち SD23、SD74、SD82と SD50、SD84、SD158、SD193、SD194はそれぞれほぼ一直線になり、2本の平行した溝となる。また、ほぼ現在の地割に沿っている。これらは12～13世紀代の土坑を切り、近世以降の土坑に切られている。

SD23

G-1～6、H-6・7で確認した東西方向の溝で、12m確認した。西側は発掘区外に伸び、東側は SK75と重複して途切れる。SK75との切り合いはつかめなかった。幅は0.3m前後と狭く、深さは0.2mである。SK04、SK08、SK17、SK21、SK25、SK27、SK46、SK49、SK62を切る。9は中国陶器C群の壺である。濃い暗緑色の不透明釉が内面、外面ともにかかる。10は龍泉窯青磁碗V類である。そのほか同安窯系青磁碗、糸切りの土師器壺や蘆の羽口などが出土している。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD50

E・F-3～12で19m確認した東西方向の溝で SD23と平行する。東側は未調査地を隔てて SD84に接続するものと見られる。幅は0.5～1.7m、深さは0.2m前後である。SK251、SK254、SK256を切る。11は口禿の白磁碗である。12は龍泉窯系青磁碗II類である。13は中国陶器B群の壺である。上半2分の1を欠損する。そのほか龍泉窯系青磁碗I類、II類、同安窯系青磁碗、白磁碗、白磁水注、東播系捏鉢、瓦質捕鉢、瓦などが出土している。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD53

F-3～7で確認した溝である。SD50に切られる。幅1.6～2.5m、深さ0.3m前後である。糸切りの土師器壺、青磁碗・皿、白磁碗・皿、瓦などが出土している。はっきりしないが13世紀ごろの溝と考えられる。

SD74

H-8～13で確認した東西方向の溝である。全長9.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.1m前後である。SK78、SK87、SE107、SE108、SE109、SK258、SK262を切る。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁碗、白磁碗、中国陶器C群の捏鉢、土鍋、瓦などが出土している。12世紀後半代の遺物が多いが、切り合いや覆土の状況から16世紀前後の溝と考えられる。

SD82

H-13～28で確認した東西方向の溝である。SD84と平行している。東側は発掘区外に伸びる。途中途切れるが、30m確認した。幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mである。SK81、SK88、SK89、SK129を切り、SK90、SK136に切られる。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗I類、白磁碗・皿、瓦などが出土している。1～3は土師器の皿である。12世紀後半代の遺物が多いが、16世紀前後の溝と考えられる。

SD84

F-15～23で16m確認した東西方向の溝で、SD82と平行して走る。西側は発掘区外に伸びるが SD50に接続すると思われる。ヘラ切りの土師器壺、糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗II類、同安窯

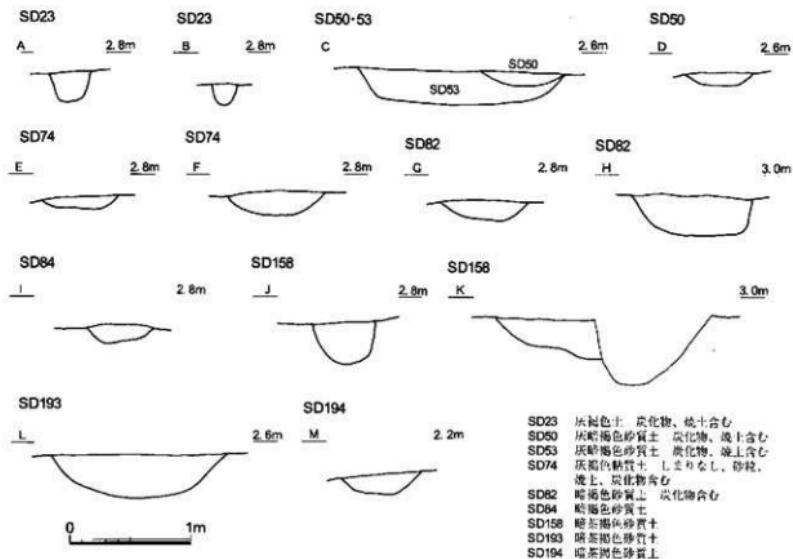
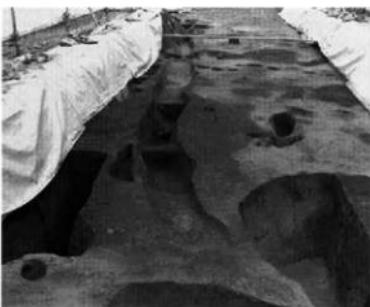


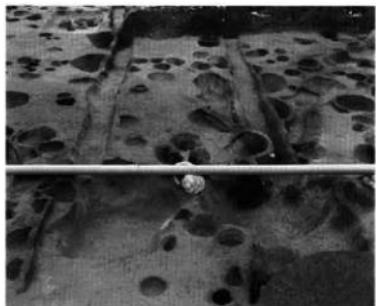
Fig. 9 溝断面図 (1/40)



PL. 9 SD23 (東から)



PL. 10 SD74 (西から)



PL. 11 SD82・84 (東から)



PL. 12 SD158 (西から)

系青磁碗、白磁碗・皿、瓦器碗などが出土している。4は土師器の壺である。12~13世紀の遺物が多いが、16世紀前後の溝であると考えられる。

SD158

F-23~28で10m確認した東西方向の溝である。東側は発掘区外に伸びる。搅乱を受けてはっきりしないが、幅1.0m前後、深さ0.3mである。後述(58ページ)の縁錢が出土している。そのほかに龍泉窯系青磁碗I類、白磁碗、瓦質擂鉢、火舎、瓦、糸切りの土師器の壺などが出土した。5~7は土師器の壺である。白っぽい胎土、薄手の作りで、他の遺構で出土した土師器とは明らかに異なる。搬入品であろう。大内系の土器か。16世紀ごろの溝と考えられる。



PL. 13 SD50出土遺物 (約1/4)

13

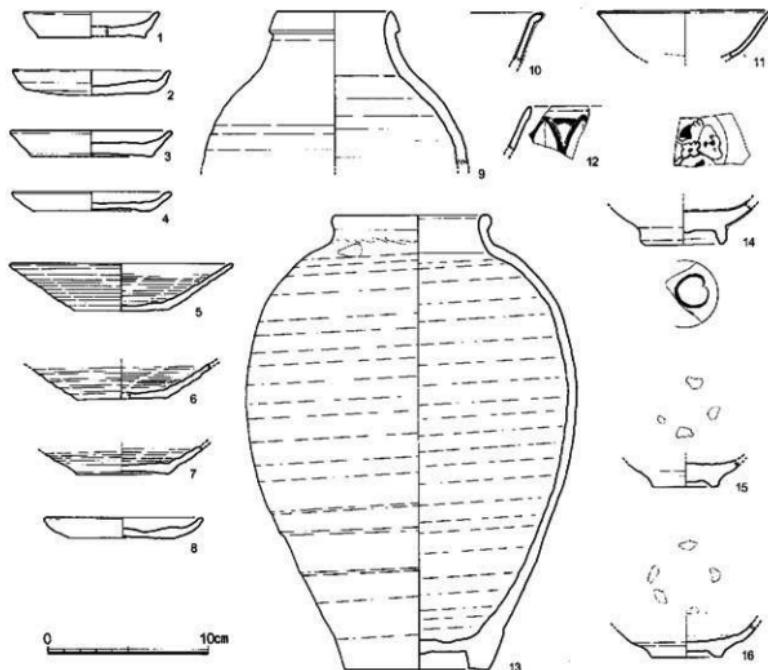


Fig. 10 溝出土遺物 (1/3)

SD193

D～F-33～44で22m確認した東西方向の溝である。攪乱が多く、規模がつかみにくいが、幅1.5～2.3m、深さ0.3～0.4mである。攪乱に切られているが東側はSD194に接続すると思われる。SE197、SE204、SK222を切り、SK182、SK183、SD221、SK229、SK230、SK231に切られる。8は土師器の皿である。14は龍泉窯系青磁碗で見込みに印花文を施す。外底には朱で円を書く。15・16は李朝の粉青沙器である。内面に目跡がある。そのほか龍泉窯系青磁碗II類、同安窯系青磁碗、白磁碗、皿、備前の擂鉢、糸切りの土師器坏・皿、瓦などが出土した。16世紀ごろの溝と考えられる。

SD194

D・E-46・47で2m確認した東西方向の溝で、東側は発掘区外に伸びる。幅0.7m、深さ0.2mである。SK185に切られる。陶器の壺と瓦が出土した。攪乱に切られているが、SD193と同一の16世紀ごろの溝と考えられる。

(3) 井戸

井戸は合計24基検出した。うち、6基が近世から近代にかけての井戸であり SE187をのぞけばすべて瓦組の円形井戸であった。SE187も瓦が抜き取られたものであろう。中世の井戸はⅡ・Ⅵ区とV区に集中して発見された。井筒が確認できなかった SE73を除くとすべて円形の木桶を据えている。

SE73

I・J-7・8で検出した。南側は発掘区外に伸び、北側は擾乱を受けている。SE77を切る。径2.6mほど円形の堀方である。井筒は確認できなかったが、土層より径1mほど円形の井筒であったことがわかる。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系の青磁碗・皿、同安窯系の青磁碗、白磁碗・皿、瓦器碗などが出土している。17は高台付の土師器皿である。18は白磁平底皿である。19は龍泉窯系青磁の小鉢で、外面に鏽連弁文を施す。出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。



PL. 14 SE73 (北から)

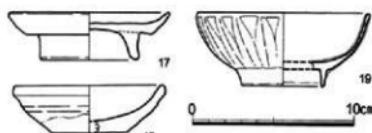
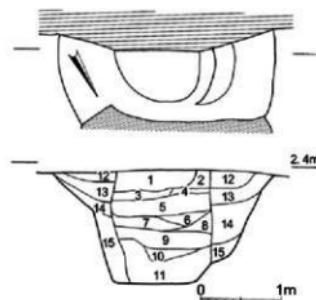


Fig. 12 SE73出土遺物 (1/3)

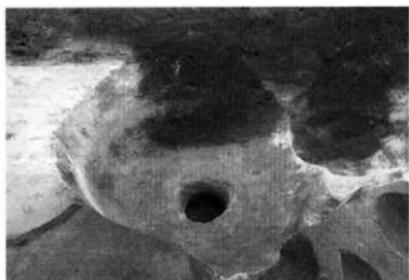


1. 暗褐色砂質土、燒土、炭化物を少量と茶褐色砂、紫大の礫を含む
2. 暗褐色砂質土、黑褐色土含む
3. 塵褐色砂質土、燒土、炭化物少量含む
4. 塘褐色砂質土、燒土、炭化物少量含む
5. 塘褐色砂質土、燒土、炭化物を少量と茶褐色砂を含む
6. 茶褐色砂、燒土、炭化物を少量と黒褐色土を含む
7. 塘褐色砂質土、茶褐色砂含む
8. 茶褐色砂質土、黒褐色土多く混入
9. 塘褐色砂質土、燒土、炭化物少量と灰白色粘土ブロックを含む
10. 塘褐色砂質土、燒土、炭化物少量含む
11. 龍泉窯色砂、黑褐色土含む
12. 龍泉窯色砂質土
13. 塘褐色土と茶褐色砂の互層
14. 紫褐色砂、黒褐色土含む
15. 塗茶褐色砂

Fig. 11 SE73 (1/60)

SE77

H~J-8・9で検出した。南側は発掘区外に伸び、西側は擾乱を受ける。SK87、SK125を切り、SE73に切られる。径3mほどの円形の堀方に径50cmの円形の木桶を据える。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系の青磁碗、同安窯系の青磁碗・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、瓦器碗などが出土している。20は井筒内から出土した高台付の土師器皿である。21は鏽連弁の龍泉窯系の青磁碗である。22は白磁碗IV類の底部で、高台内側に墨書があるが、破片のため判読できない。出土遺物から13世紀前半の井戸と考えられる。



PL. 15 SE77 (北から)

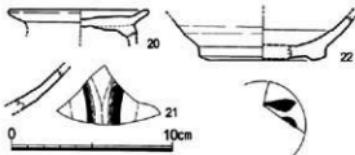


Fig. 14 SE77出土遺物 (1/3)

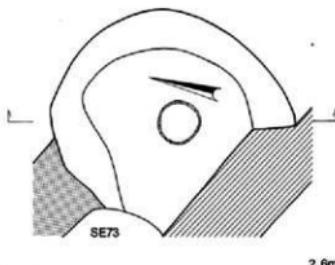


Fig. 13 SE77 (1/60)

SE107・108・109・239・260・263

F~H-8~11で6基の井戸を検出した。この部分はII区とVI区にわけて調査したところである。II区調査時にSE107、SE108、SE109の3基を確認し、切り合ひからSE107が一番新しく、SE109が一番古いということがわかった。この3基は北側に伸びるため、VI区調査で、残りを調査する予定であった。しかしVI区ではその場所に攪乱が広がり、その下から新たにSE239、SE260、SE263の3基の井戸が切り合って検出され、新旧関係が一部不明瞭になってしまった。新たに見つかった3基の切り合ひはSE239が一番新しく、SE263が一番古い。また、SE239はSE109を切っている。さらにII区調査時の土層の状況から、SE260よりSE107のほうが新しいということが確認できる。

SE107はG・H-9・10に位置し、径3mほどの円形の堀方に径60cmの円形の木桶を据える。堀方の北側のプランはSE260、SE263と同時に掘り下げてしまったので不明である。糸切りの土師器壺・



PL. 16 SE107・108・109・239・260・263 (左: 北から・右: 東から)



PL. 17 SE107 (南から)

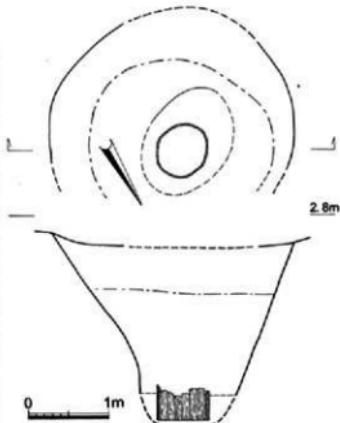


Fig. 15 SE107 (1/60)

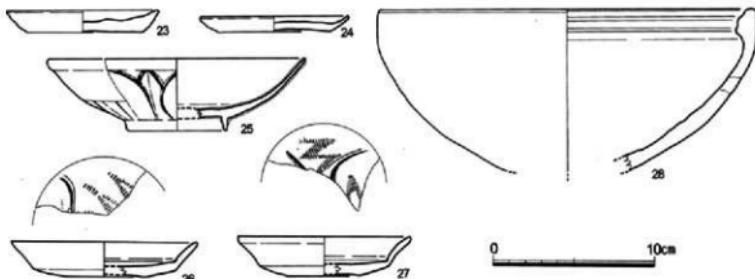
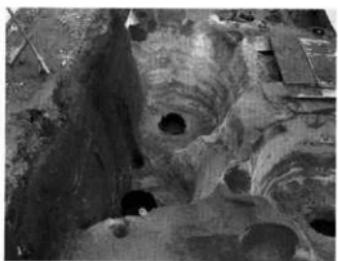
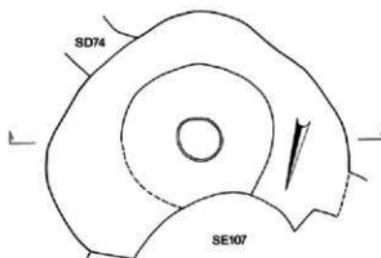


Fig. 16 SE107出土遺物 (1/3)

皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、高麗青磁碗、白磁碗・皿、土鍋、石鍋などが出土している。23は井筒内から、24は堀方から出土した土器の皿である。どちらも底部は糸切りで、24には板状圧痕がみられる。25は龍泉窯系青磁碗で外面に錦連弁文を施す。井筒内出土。26・27は同安窯系青磁皿である。28は中国陶器C群の捏鉢である。内面は使用により摩耗している。出土遺物から13世紀後半の井戸と考えられる。

SE108は G・H-9~11に位置する。径3.5mほどの円形の堀方の中央に径50cmの円形の木桶を据えている。桶の実測前に発掘区壁が崩落したので正確な記録が取れなかった。北側を SE107に、上部の一部を SD74に切られている。糸切りの土器壺・皿、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、白磁碗、東播系の捏鉢、土鍋、瓦器碗、天目碗などが出土した。29は龍泉窯系青磁皿で内面に櫛描で花文を施す。30は東播系須恵器の捏鉢である。出土遺物から12世紀末葉から13世紀初頭の井戸と考えられる。

SE109は G・H-8・9に位置する。SE107、SE108、SE239に切られており、規模は明らかでないが、3~3.6mほどの円形の堀方で、径65cmの円形の木桶を据えている。SE108と同じく、桶の実測



PL. 18 SE108 (上：南から・下：西から)

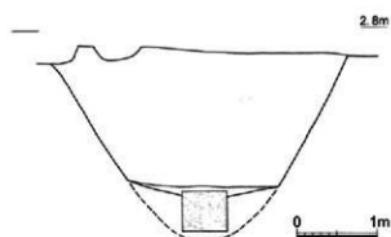


Fig. 17 SE108 (1/60)

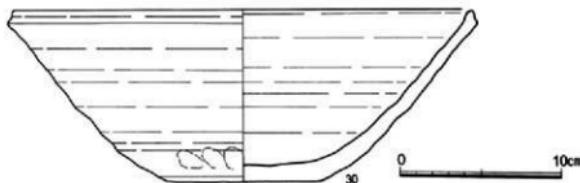


Fig. 18 SE108出土遺物 (1/3)

前に発掘区壁が崩落したため、正確な記録が取れていない。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、高麗青磁碗、白磁碗、東播系須恵器の捏鉢、瓦器枕などが出土している。31は同安窯系青磁皿である。32は井筒内から出土した完形の白磁碗VI類である。見込みは輪状に釉を掻き取る。高台の内側に3文字墨書があり、「一大（花押）」と読める。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE239はF・G-8・9に位置する。SE109、SE260を切る。長軸2.9mの楕円形の堀方に径60cmの円形の木柵を据えている。堀方の西側にはテラスを2段付ける。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、越州窯系青磁碗、白磁碗、白磁皿、土鍋、瓦器枕などが出土している。33は白磁碗の底部で、高台内側に墨書がある。「誌」と読める。34は白磁平底皿である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。



PL. 19 SE109 (西から)

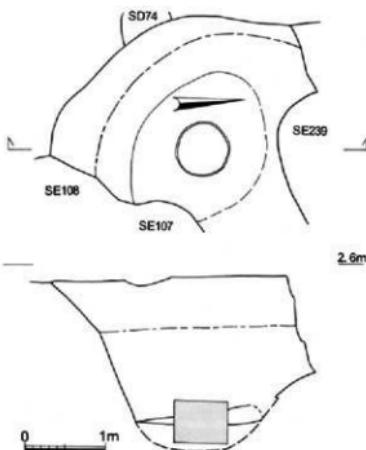


Fig. 19 SE109 (1/60)



PL. 20 SE109出土遺物 (約1/3)

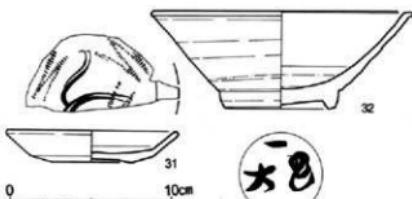
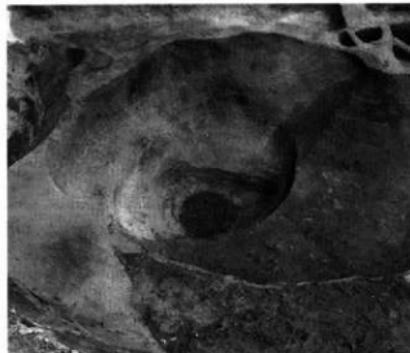


Fig. 20 SE109出土遺物 (1/3)



PL. 21 SE239 (南から)

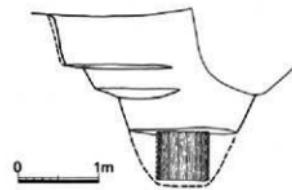
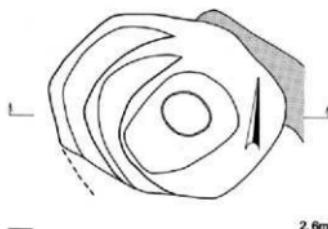


Fig. 21 SE239 (1/60)

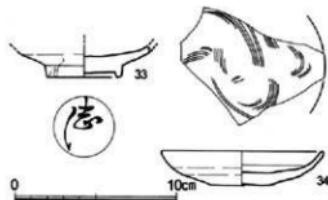


Fig. 22 SE239出土遺物 (1/3)

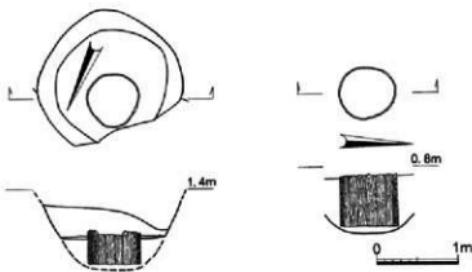


Fig. 23 SE260・263 (1/60)

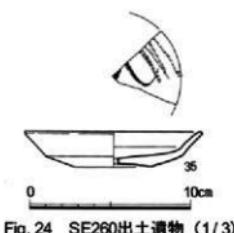


Fig. 24 SE260出土遺物 (1/3)

SE260はF・G-9に位置する。SE263を切る。SE107、SE239に切られており、全容は明らかでない。径60cmの円形の木桶を井筒とする。糸切りの土師器壺・皿、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、土鍋、瓦器楕などが出土した。35は同安窯系青磁皿である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE263はG-9・10に位置する。SE107、SE260に切られ、井筒しか検出できなかった。井筒は径65cmの円形の木桶である。陶器片が出土したのみで時期ははっきりしないが、12世紀の井戸であろう。

SE156

C・D-22~24で検出した。北側は近世の井戸SE135に切られる。径3mほどの円形の堀方に、径70cmの円形の木桶を井筒に据える。糸切りの土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗・皿、青白磁合子身、瓦器楕などが出土した。36は堀方から出土した青白磁合子身である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。



PL. 22 SE156 (北から)



Fig. 26 SE156出土遺物 (1/3)

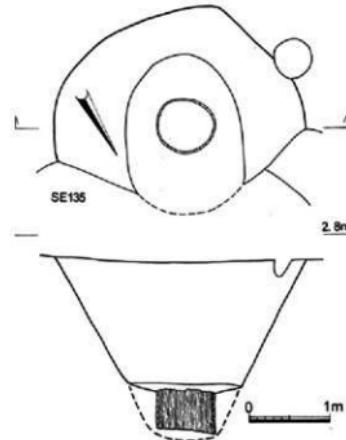
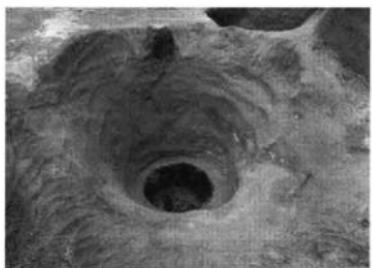


Fig. 25 SE156 (1/60)



PL. 23 SE180 (東から)



Fig. 28 SE180出土遺物 (1/3)

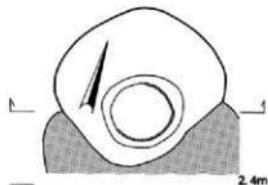


Fig. 27 SE180 (1/60)

SE180

C・D-43・44に位置する。南側は擾乱を受けており、堀方径は不明であるが、推定径2.5mの円形であろう。井筒は西側は残っていないが、径70cmの木桶を据えている。糸切りの土師器壺・皿、青磁碗、白磁碗・皿、土鍋、瓦器椀などが出土した。37は土師器壺である。底部は糸切りで、簾状圧痕がつく。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

SE196・202・203

C・D-40~42に位置する。北側は近代の井戸 SE175・176・187に切られる。長軸4.2m以上の楕円形の堀方に3基の井筒を据えている。東から196・202・203である。井筒はいずれも木桶で、SE196が径50cm、SE202が径60cm、SE203は残りが悪いが径55cmである。糸切りの土師器壺・皿、中国陶器A群の盤、白磁碗、



PL. 24 SE196・202・203 (北から)

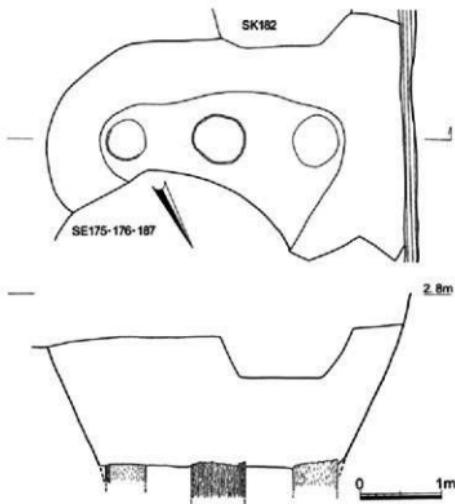


Fig. 29 SE196・202・203 (1/60)

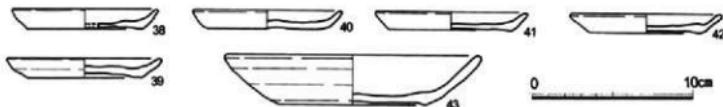


Fig. 30 SE196・202出土遺物 (1/3)

土鍋、瓦器椀などが出土している。38~42は土師器の皿である。38・39がSE196の井筒出土、40~42がSE202の井筒出土である。43はSE202の井筒出土の土師器の壊である。出土遺物から12世紀前半の井戸と考えられる。

SE197・204

D・E-42~44に位置する。東側は擾乱を受ける。3.3mほどの円形の堀方に径60cmと70cmの円形の木桶を2つ据える。東がSE197、西がSE204である。糸切りの土師器壊・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、土鍋、瓦器椀などが出土した。44は堀方から出土した土師器の皿、46はSE197の井筒から出土した土師器の壊、45・47はSE204の井筒から出土した土師器の皿と壊である。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

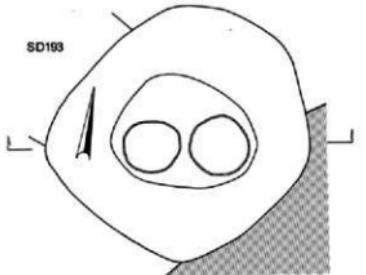
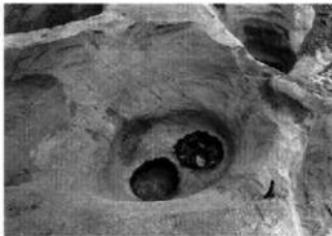


Fig. 31 SE197・204 (1/60)



PL. 25 SE197・204 (南から)

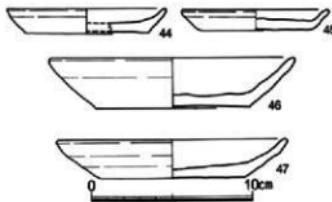


Fig. 32 SE197・204出土遺物 (1/3)

SE198・205

G・H-41~43に位置する。東側はSK188に切られる。東がSE198、西がSE205である。井筒は円形の木桶でSE198が径60cm、SE205が50cmである。SE205の井筒底は礫が充填されていた。48はSE205堀方出土の同安窯系青磁皿で、底部に墨書がある。SE198から糸切りの土師器壊、青磁皿、白磁碗、口禿の白磁など、SE205から糸切りの土師器壊・皿、龍泉窯青磁碗、同安窯青磁皿、白磁碗などが出土した。同時に掘り下げてしまったが、SE198が13世紀後半、SE205が12世紀後半の井戸と考えられる。

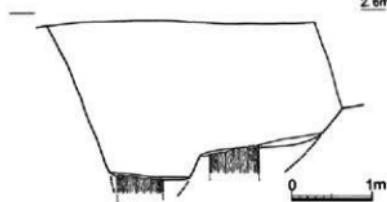


Fig. 33 SE198・205 (1/60)



PL. 26 SE198・205 (南から)



PL. 27 SE205出土遺物
(約1/3)

SE235

1-33・34に位置する。南側は発掘区外に伸びる。配水管が横切るために途中までしか調査できず、井筒は不明である。径3.3mの円形の堀方である。土師器皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗が出土している。49は土師器の皿である。底部は糸切りである。出土遺物から12世紀後半の井戸と考えられる。

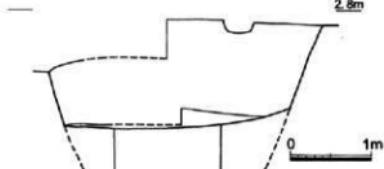
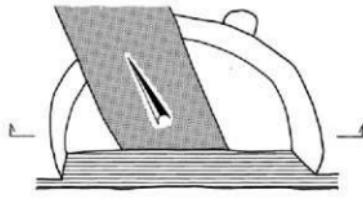
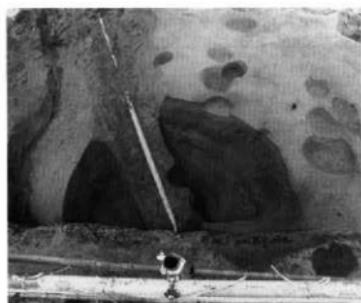


Fig. 35 SE235 (1/60)



PL. 28 SE235 (南から)



PL. 29 SE235出土遺物 (約1/3)

(4) 土坑

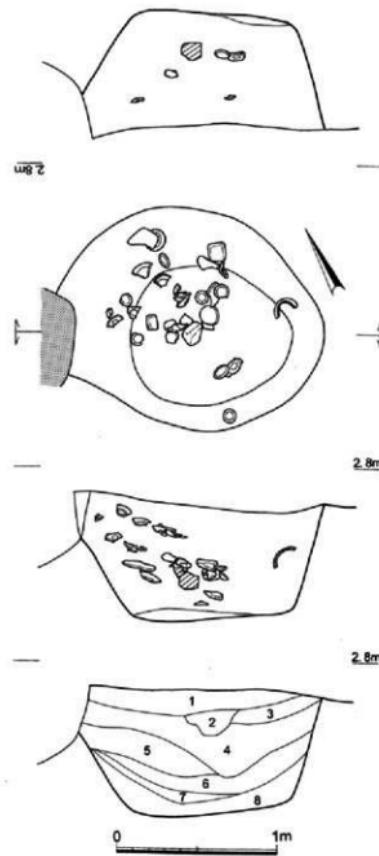
土坑は222基検出した。調査区西側に密に分布する。12世紀から13世紀と近世以降の時期がほとんどである。西側に12世紀から13世紀の土坑が多く、近世以降の土坑は A～J-22より東に限られる。

SK01

H-3に位置する長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.8mの橢円形土坑である。SK06、SK16、SK22を切る。土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・水注、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、土鍋などのはか、鋳型、取瓶といった鋳造関連の遺物が出土している。50～65は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。55・62・65を除いて板状圧痕がつく。口径は8.5cm～10.4cmで平均9.3cm、器高は1.2cm～1.6cmで平均1.3cmである。66～77は土師器の壺で、すべて底部糸切



PL. 29 SK01 (上：南から・下：北から)



1. 暗褐色砂質土 炭化物、焼土ブロック多量含む
2. 暗褐色砂質土 1より暗い 炭化物、焼土含む
3. 灰褐色砂質土 炭化物、焼土含む
4. 黒色土 炭化物、礫灰白色粘土ブロック含む
5. 暗灰褐色砂質土 炭化物、焼土含む
6. 暗茶褐色砂
7. 黒色土 炭化物を多くと灰白色粘土ブロックを含む
8. 暗茶褐色砂

Fig. 37 SK01 (1/30)

りである。74を除いて板状圧痕がつく。口径は14.6cm~16.5cmで平均15.6cm、器高は2.6cm~3.5cmで平均3.2cmである。78は土師器の高台付皿、79は土師器の高台付壺である。80は青白磁合子蓋である。81・82は同安窯系青磁皿で81は外底部の釉を搔き取る。82は底部外面下半分は露胎である。83~86は同安窯系青磁碗で外向下半分は露胎である。86は小ぶりの碗で、青みがかった灰白色の釉がかかる。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

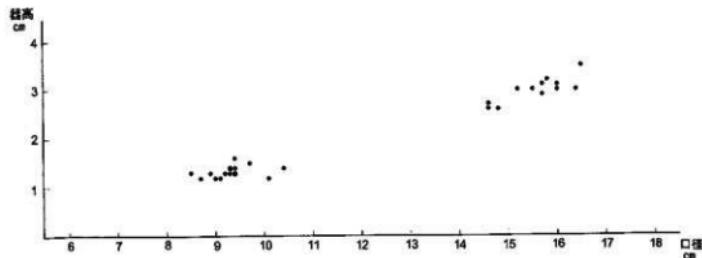


Fig. 38 SK01出土土師器法量グラフ

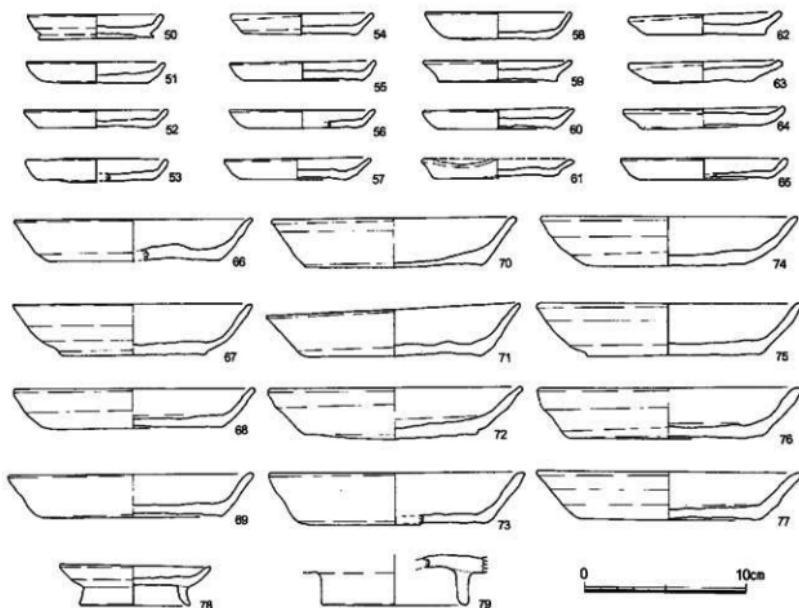


Fig. 39 SK01出土遺物 1 (1/3)

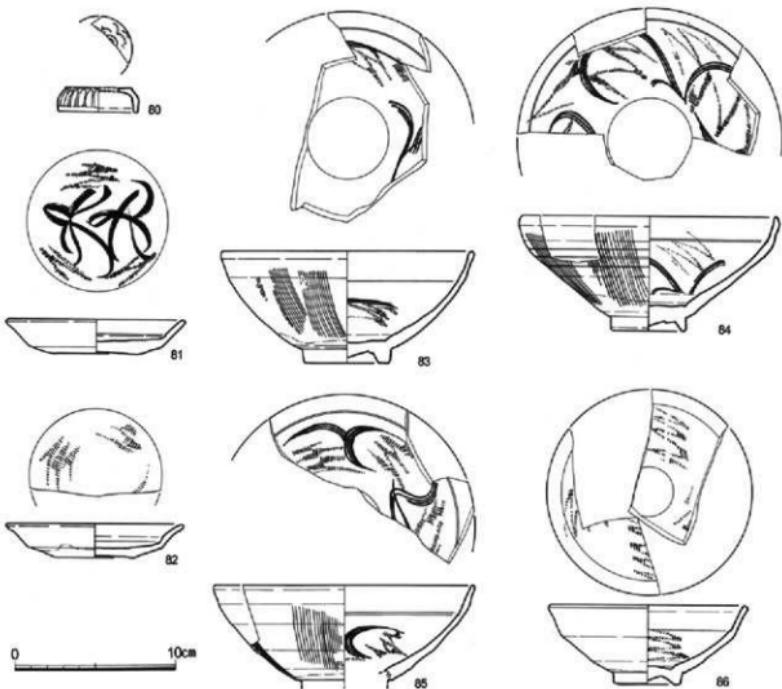
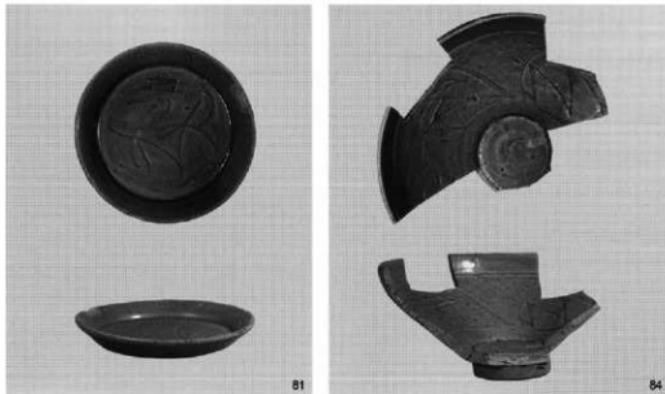


Fig. 40 SK01出土遺物 2 (1/3)



PL. 30 SK01出土遺物 (約1/3)

SK02

H・I-1・2に位置する長軸2.0m、短軸1.4m、深さ0.9mの楕円形土坑である。SK07、SK52、SK68、SK69を切り、SK06、SK67に切られる。多量の完形に近い土器・陶磁器が廃棄されていた。土師

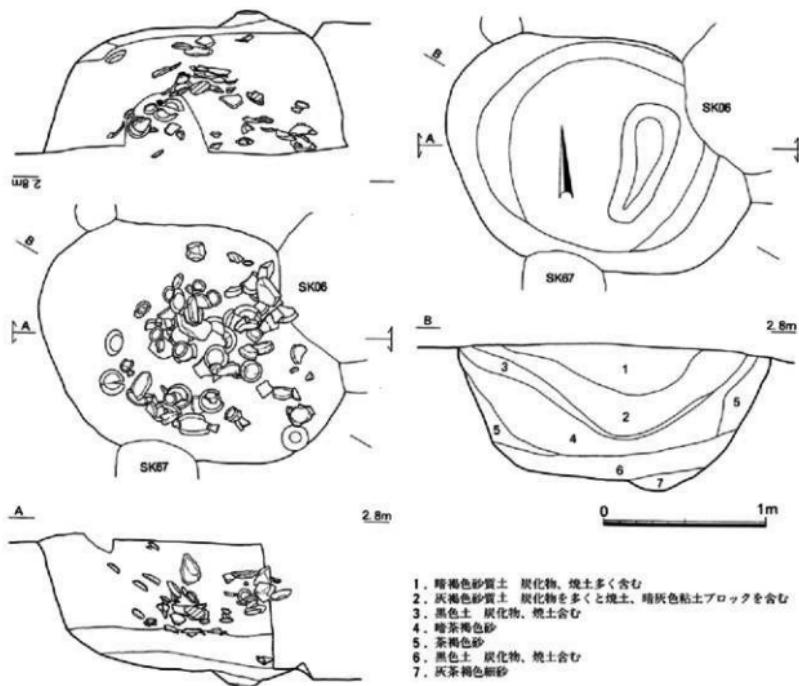
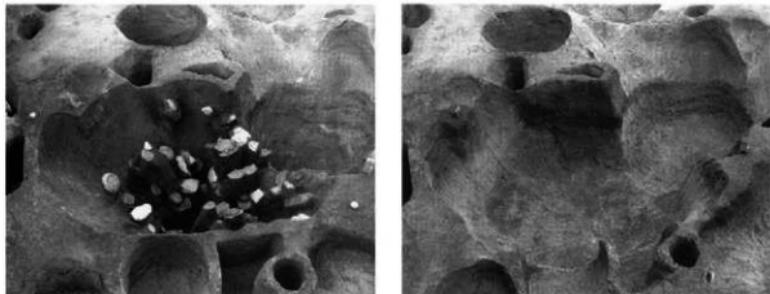


Fig. 41 SK02 (1/30)



PL. 31 SK02 (南から)

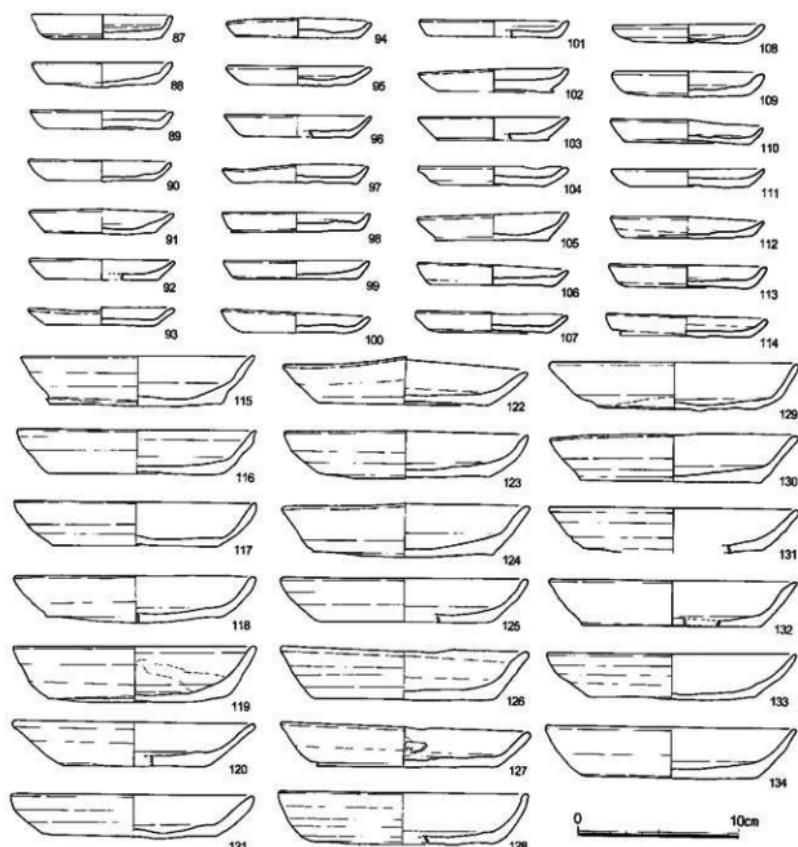
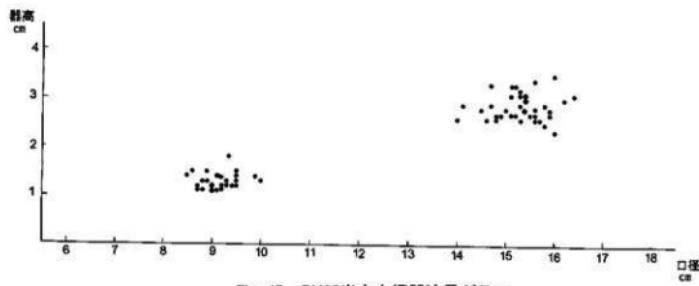
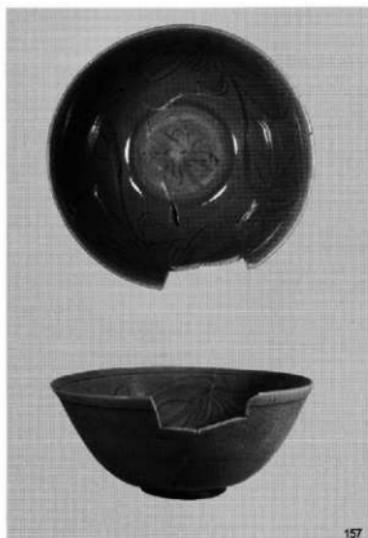


Fig. 43 SK02出土遺物 1 (1/3)

器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗・高台付皿、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、土鍋、砥石などのほか、鋳型、取瓶、炉壁といった铸造関連の遺物が出土している。87~114は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。103を除いて板状圧痕がつく。口径は8.5cm~10.0cmで平均9.8cm、器高は1.1cm~1.8cmで平均1.4cmである。115~149は土師器の坏で、すべて底部糸切りである。115・121・147・149を除いて板状圧痕がつく。121には簾状圧痕がつく。口径は14.0cm~16.2cmで平均15.7cm、器高は2.5cm~3.5cmで平均2.9cmである。150・151は土師器の高台付坏である。152は青白磁合子身である。153は高台付白磁皿である。154・155は白磁碗である。154の高台内側にはかすかに墨書が見られ、「誌」と読める。口縁をわずかに欠く。156・157は龍泉窯系青磁碗である。157は口縁を一部欠くが接合してほぼ完形まで復元できた。158は同安窯系青磁碗である。接合して完形になった。159は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



157



158



159



159

PL. 32 SK02出土遺物 (159: 約1/5・他: 約1/3)

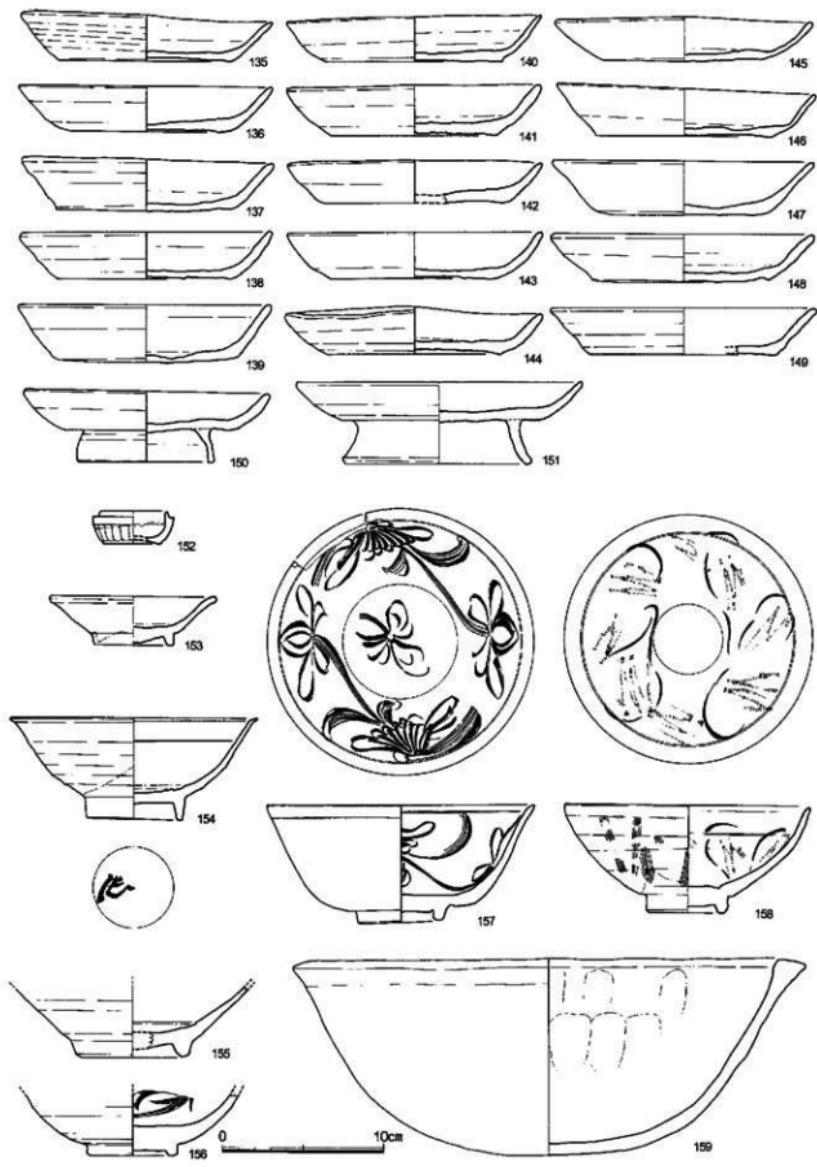
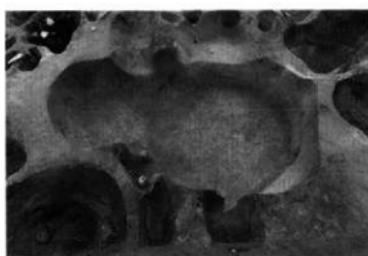


Fig. 44 SK02出土遺物 2 (1/3)

SK04

G・H-1・2に位置する径1.7m、深さ0.7mの円形土坑である。東側上部は擾乱を受ける。SK46を切り、SD23に切られる。土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・皿、中国陶器A群の盤、B群の四耳壺、土鍋などのほか、鋳型、取瓶、炉壁といった鋳造関連の遺物が出土している。160～167は土師器の皿で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径は9.0～10.0cmで平均9.3cm、器高は1.0～1.7cmで平均1.3cmで



PL. 33 SK04 (上：南から・下：西から)

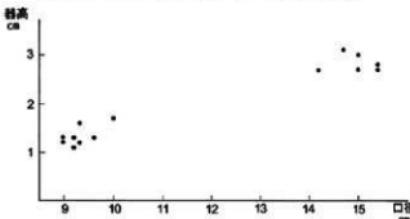


Fig. 46 SK04出土土師器法量グラフ

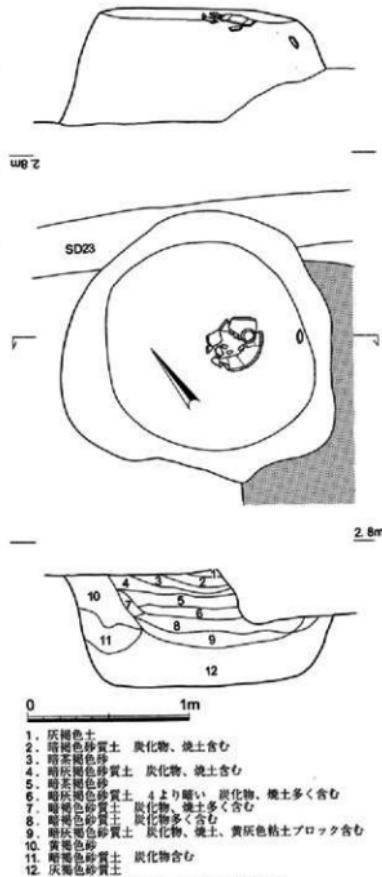


Fig. 45 SK04 (1/30)



PL. 34 SK04出土遺物 (約1/5)

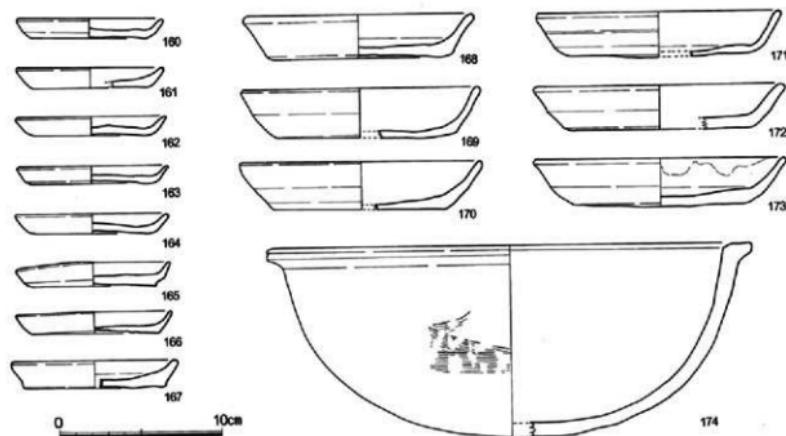


Fig. 47 SK04出土遺物 (1/3)

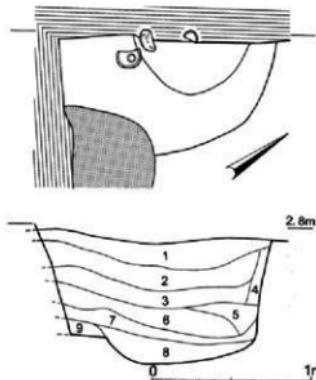
ある。168～173は土師器の坏で、すべて底部糸切りで板状压痕がつく。口径は14.2～15.4cmで平均14.9cm、器高は2.7～3.1cmで平均2.9cmである。174は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遣構と考えられる。

SK05

I・J-1に位置する。西側と南側は発掘区外に伸び、規模不明であるが円形土坑であろう。深さ0.8mを測る。糸切りの土師器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗・皿、土鍋などが出土した。175



PL. 35 SK05 (東から)



1. 前褐色砂質土 砂粒粗い、炭化物を多くと燒土を含む
2. 暗灰褐色砂質土 炭化物、暗黃白色粘土ブロックを多くと、燒土を含む
3. 前褐色砂質土 炭化物を多くと燒土を含む
4. 前褐色砂質土 砂粒粗い
5. 暗灰褐色砂質土 2より細い、炭化物、暗黃白色粘土ブロックを含む
6. 前褐色砂質土 炭化物、燒土、茶褐色砂質土
7. 暗灰褐色砂質土 5より細い、炭化物、燒土、灰褐色粘土ブロックを含む
8. 前褐色砂質土 炭化物、燒土、灰褐色粘土ブロックを含む
9. 暗灰褐色

Fig. 48 SK05 (1/30)

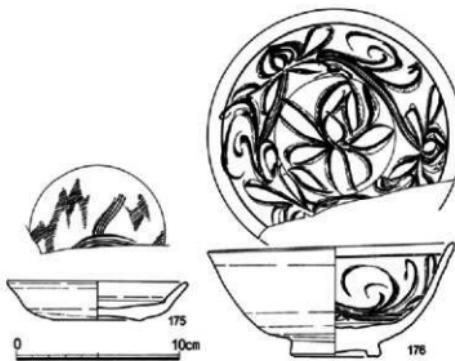
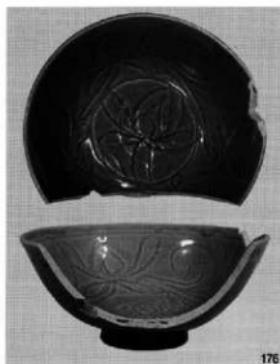


Fig. 49 SK05出土遺物 (1/3)



PL. 36 SK05出土遺物 (約1/3)

は同安窯系青磁皿である。底部下半露胎である。176は龍泉窯系青磁碗である。内面に深い片切彫りで蓮花文を描く。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SK06

H・I-2・3に位置する。北側上部に搅乱を受けるが、残存部で長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.9mの楕円形土坑である。SK02、SK16、SK56を切り、SK01に切られる。土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗、中国陶器A群の盤、東播系須恵器の捏鉢、瓦器椀、砥石などのほか、鋳型、取瓶、輪の羽口、炉壁といった鋳造関連の遺物が出土している。177～189は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。186

を除いて板状圧痕がつく。口径は8.2～10.6cmで平均9.1cm、器高は0.9～1.4cmで平均1.2cmである。190～193は土師器の壺で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。190・191と192・193の大小2種類ある。小さい方の口径は14.4～14.6cm、器高は3.0cmである。大きい方の口径は15.6～15.7cm、器高は2.6～2.8cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

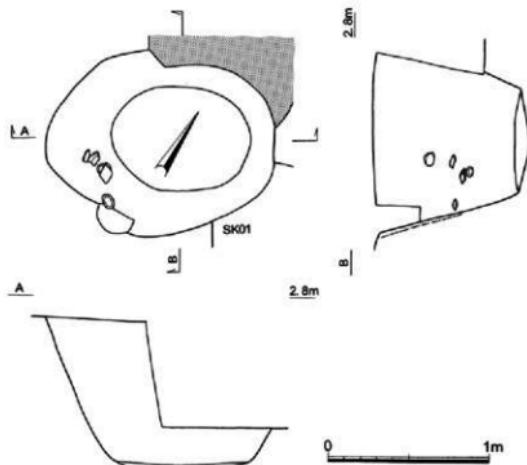


Fig. 50 SK06 (1/30)



PL. 37 SK06 (北から)

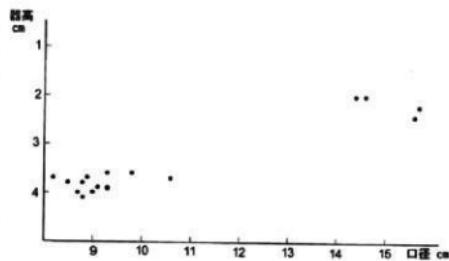


Fig. 51 SK06出土土器器法量グラフ

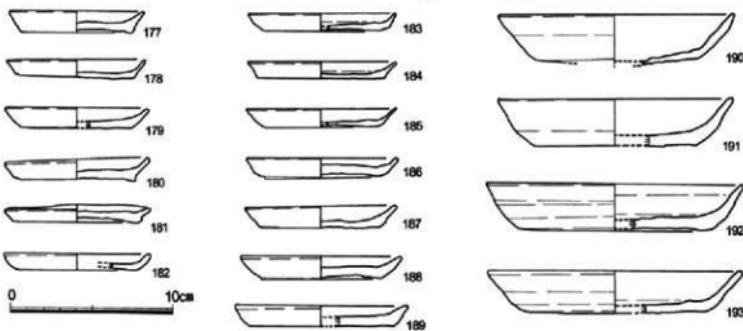


Fig. 52 SK06出土遺物 (1/3)

SK08

F・G-1・2に位置する。西側は発掘区外に伸びるが径1.1m程度の円形土坑になろう。深さは0.7mである。SK09を切り、SD23に切られる。土器壺・皿、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、白磁碗、白磁子蓋、中国陶器A群の盤、B群の四耳壺、C群の捏鉢、瓦器椀、砥石などのほか、銷

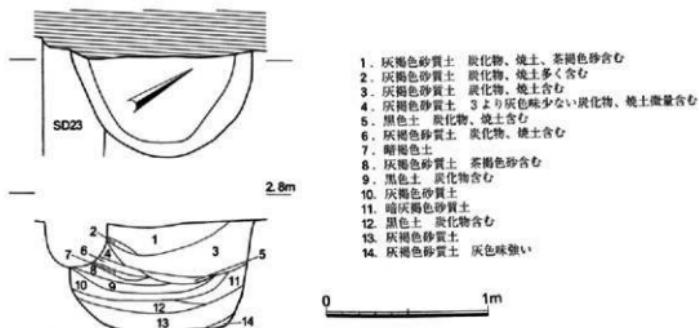


Fig. 53 SK08 (1/30)

型、取瓶、壺等といった鋳造関連の遺物が出土している。194～196は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。196を除いて板状圧痕がつく。口径は9.2～9.6cmで平均9.4cm、器高は1.2～1.4cmで平均1.3cmである。197～205は土師器の壺で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径は14.8～17.0cmで平均15.7cm、器高は2.5～3.5cmで平均2.9cmである。大きさにばらつきがある。206は土師器の高台付壺である。207は白磁合子蓋である。208は龍泉窯系青磁皿である。209～213は同安窯系青磁碗で外面下半は露胎である。209は無文である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

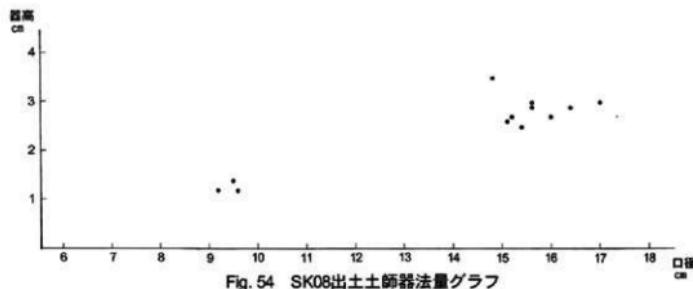
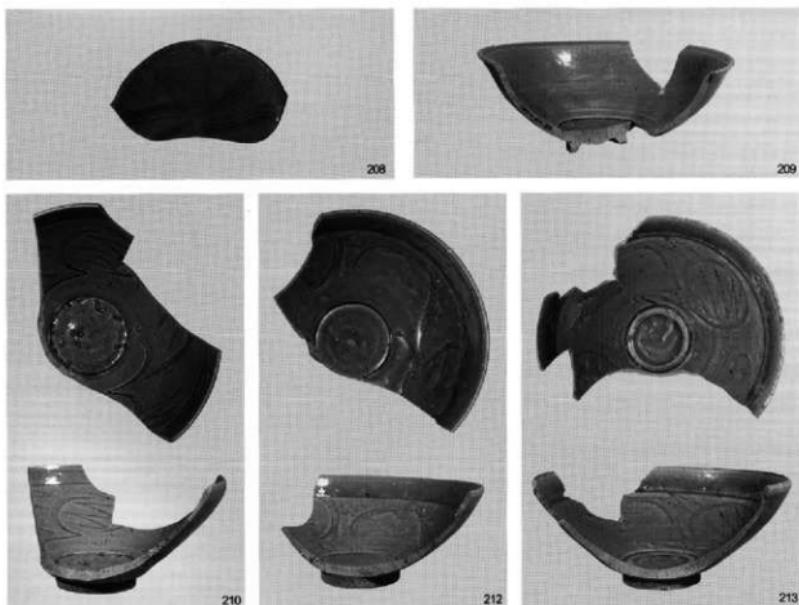


Fig. 54 SK08出土土師器法量グラフ



PL. 38 SK08出土遺物 (約1/3)

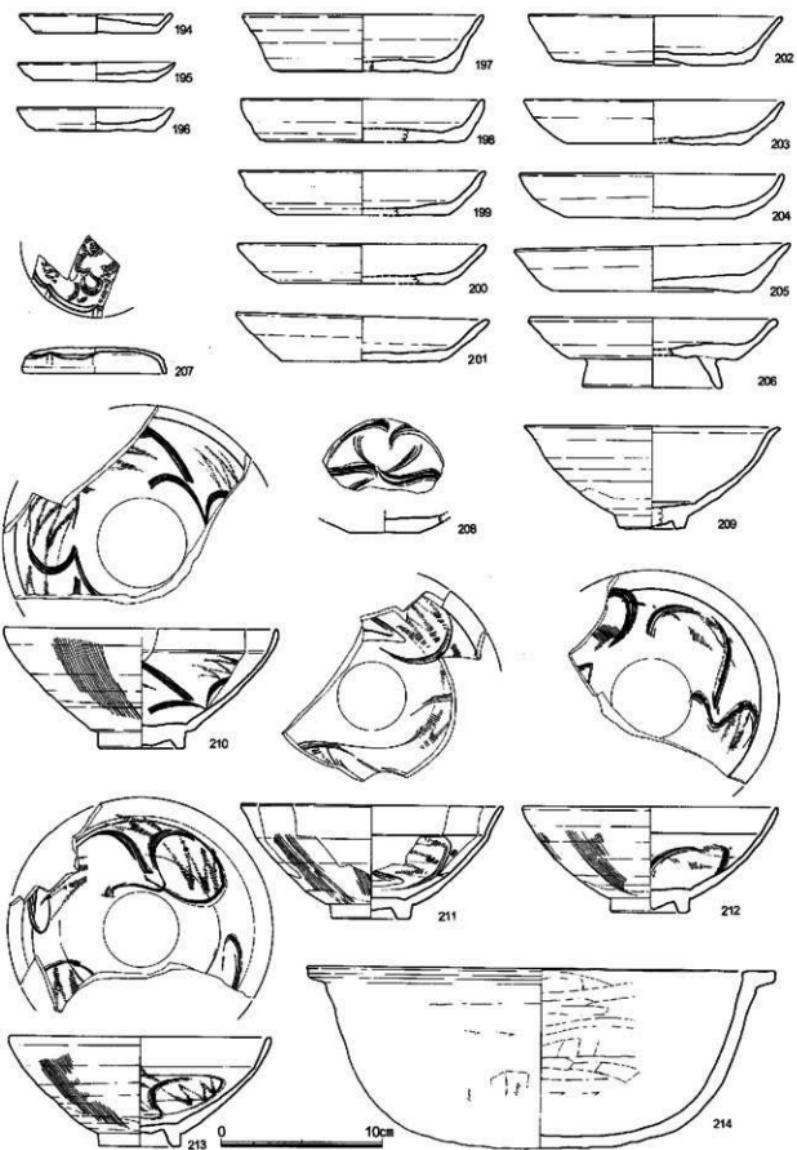
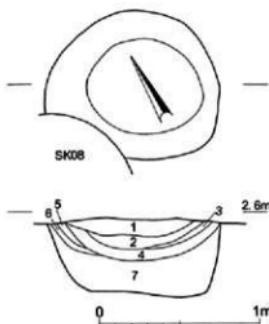


Fig. 55 SK08出土遺物 (1 / 3)

SK09

F・G-1・2に位置する長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.5mの橢円形土坑である。SK08に切られる。土師器壺・皿、龍泉窯系青磁碗、白磁碗・皿、中国陶器C群の捏鉢、瓦器椀、土鍋などが出土している。215～222は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。221を除いて板状圧痕がつく。口径は8.7～10.0cmで平均9.1cm、器高は0.7～1.4cmで平均1.1cmである。223～226は土師器の壺で、すべて底部糸切りで板状圧痕がつく。口径14.2cm、器高2.5cmと小ぶりの223を除くと、口径は16.0～16.3cmで平均16.2cm、器高は3.0～3.4cmで平均3.2cmとなる。227は龍泉窯系青磁皿である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



1. 暗灰褐色砂質土 岩化物含む
2. 灰褐色砂質土 岩化物少量含む
3. 暗茶褐色砂質土
4. 暗黄褐色砂
5. 灰褐色砂質土
6. 暗黃褐色砂
7. 暗灰褐色砂質土 岩化物多く含む

Fig. 56 SK09 (1/30)

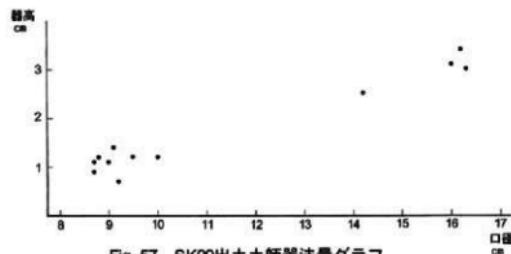


Fig. 57 SK09出土土師器法量グラフ

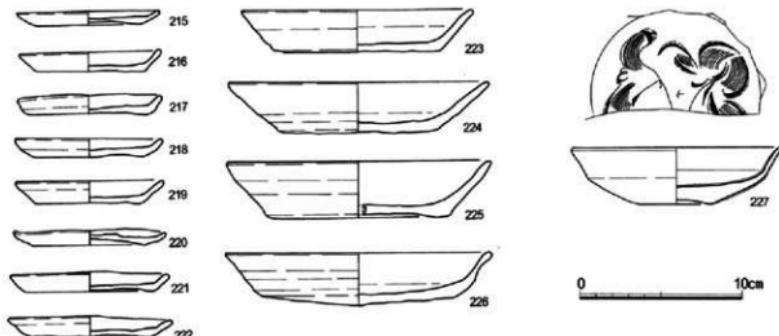


Fig. 58 SK09出土遺物 (1/3)

SK17

G-3に位置する長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.4mの楕円形土坑である。SD23に切られる。南側に土師器壺・皿がまとめて廃棄されていた。そのほか同安窯系青磁碗、白磁碗などが出土している。228-233は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。233を除いて板状圧痕がつく。煤が付着しており、灯明皿として使用されていたようである。口径は8.2~9.1cmで平均8.7cm、器高は0.9~1.3cmで平均1.2cmである。234は土師器の壺で、底部糸切りである。口径は15.0cm、器高は3.7cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 40 SK17 (東から)

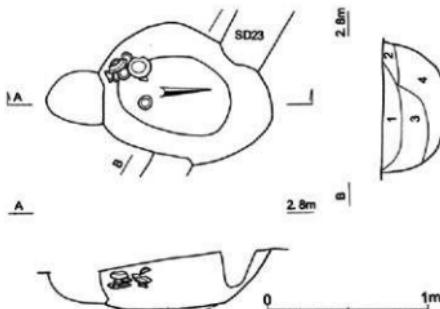


Fig. 59 SK17 (1/30)

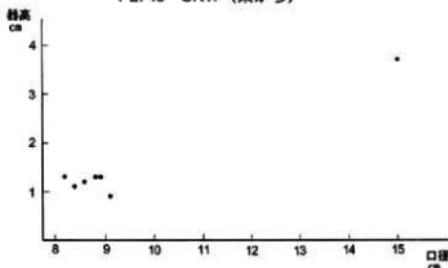


Fig. 60 SK17出土土師器法量グラフ

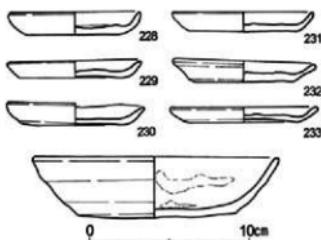


Fig. 61 SK17出土遺物 (1/30)

SK18

F・G-2・3に位置する径0.8m、深さ0.6mの円形土坑である。土師器壺・皿、同安窯系青磁碗・皿、白磁碗、中国陶器C群の捏鉢、瓦器椀、土鍋などのほか、鋳型、取瓶、輪の羽口といった鋳造関連の遺物が出土している。235~237は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。236を除いて板状圧痕がつく。口径は9.3~10.2cmで平均9.8cm、器高は1.3~1.6cmで平均1.4cmである。238~242は土師器の壺で、すべて底部糸切りである。238~242を除いて板状圧痕がつく。口径は15.0~15.8cmで平均15.4cm、器高は2.5~3.3cmで平均2.9cmである。243は龍泉窯系青磁碗である。244は土鍋である。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 41 SK18 (東から)

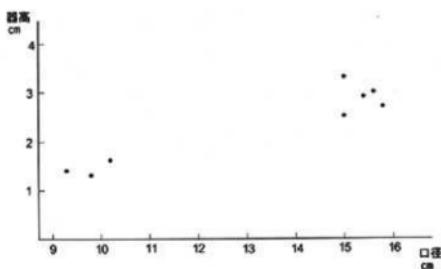
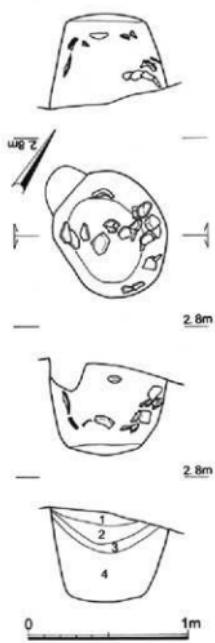


Fig. 63 SK18出土土篩器法量グラフ



1. 深褐色砂質土 炭化物、灰
結色含む
2. 暗褐色砂質土 炭化物含む
3. 暗褐色砂質土 灰褐色土含む
4. 暗褐色土

Fig. 62 SK18 (1/30)

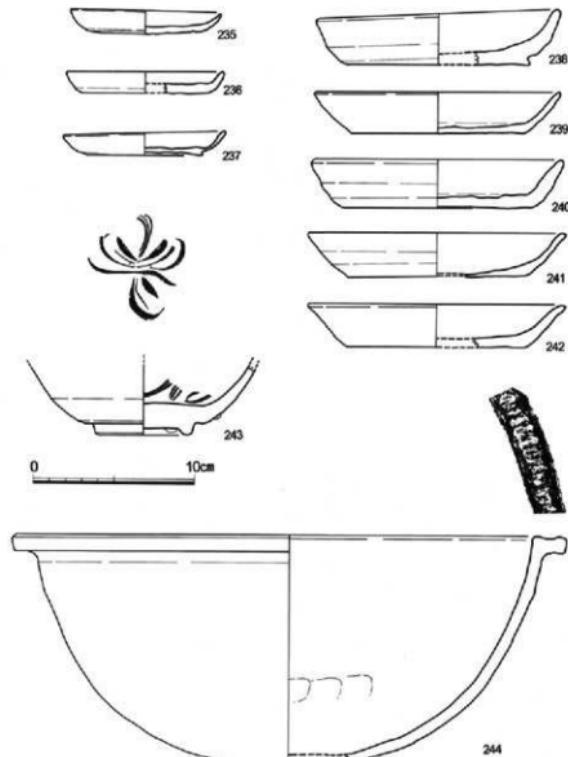


Fig. 64 SK18出土遺物 (1/3)

SK20

D・E-1・2に位置する円形土坑で北側上部に擾乱を受け、西側はSE03に切られている。径1.5m、深さ0.9mを測る。土器器坏・皿、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、越州窯系青磁碗、白磁碗・皿、中国陶器A群の盤、C群の捏鉢、東播系須恵器の捏鉢、土鍋などのほか、鋳型、輪の羽口といった鋳造関連の遺物が出土している。245～259は土器器の皿である。すべて底部糸切りで、259を除いて板状圧痕がつく。口径は7.7～10.0cmで平均9.0cm、器高は1.1～1.7cmで平均1.4cmである。260～271は土器器の坏で、すべて底部糸切りである。263・265を除いて板状圧痕がつく。口径は12.4～13.6cmで平均13.1cm、器高は2.0～3.1cmで平均2.5cmである。他の遺構出土の土器器にくらべ、口径がかなり縮小する。272は土器器の高台付坏である。273は龍泉窯系青磁碗である。体部外面に錦辻弁を施す。274は東播系須恵器の捏鉢である。接合して完形になった。出土遺物から13世紀前半の遺構と考えられる。



PL. 42 SK20 (西から)

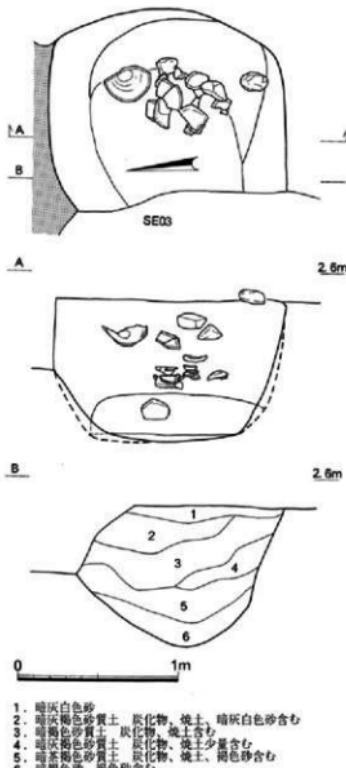


Fig. 65 SK20 (1/30)

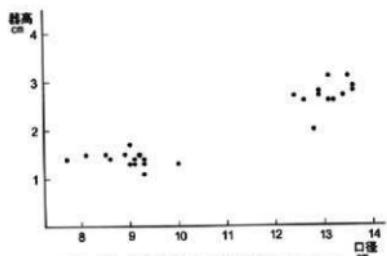
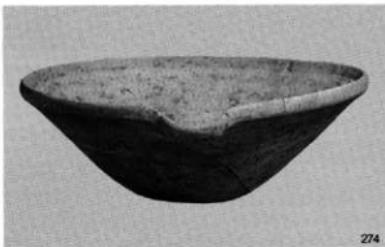


Fig. 66 SK20出土土師器法量グラフ



PL. 43 SK20出土遺物 (約1/4)

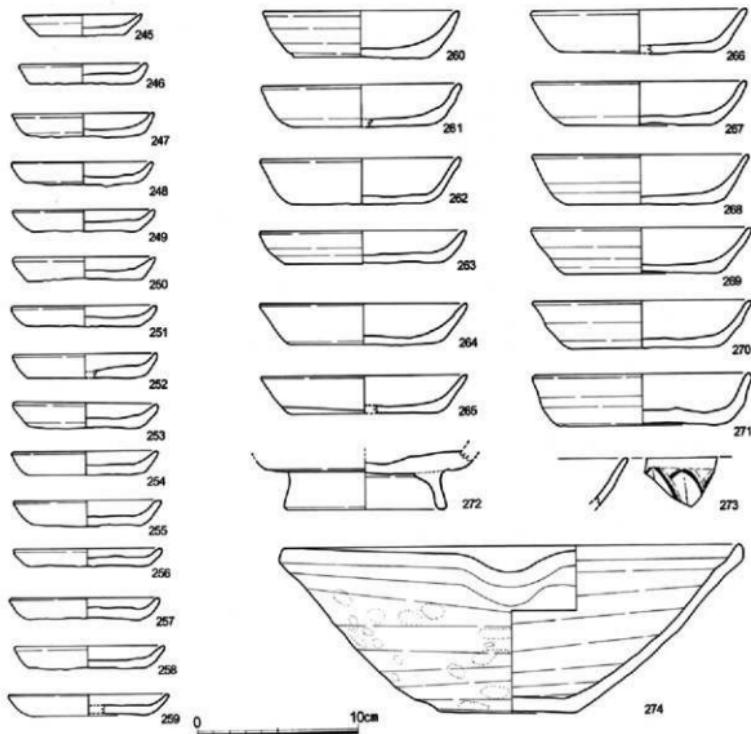
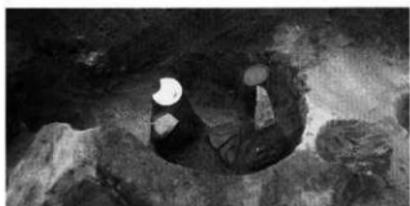


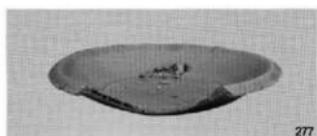
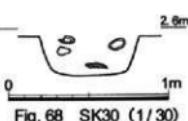
Fig. 67 SK20出土遺物 (1/3)

SK30

D-1・2に位置する土坑で西側は発掘区外に伸びるが、形状は径0.7m程度の円形となろう。深さは0.3mである。SK31を切り、SK29に切られる。土師器壺・皿、青磁碗、白磁碗・皿が出土している。275は土師器の皿で、底部糸切りである。口径は9.6cm、器高は1.3cmである。276は土師器の壺で、底部糸切りである。板状圧痕がつく。口径は17.8cm、器高は3.1cmで大ぶりの壺である。277は白磁平底皿で軸を搔き取った外底に墨書があり、「誌」と読める。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 44 SK30 (東から)



PL. 45 SK30出土遺物 (約1/2)

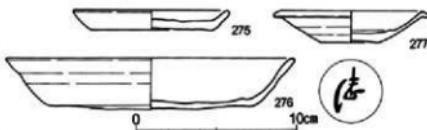


Fig. 69 SK30出土遺物 (1/3)

SK87

H-8・9に位置する土坑である。SD74、SE77に切られるが、径0.8m、深さ0.5mの円形土坑となろう。土師器壺、白磁碗・皿、中国陶器A群の盤、瓦器碗が出土している。278～281は土師器の皿で、すべて底部糸切りである。280・281に板状圧痕がつく。口径は9.2～10.0cmで平均9.6cm、器高は1.0～1.5cmで平均1.2cmである。282は白磁碗O-II類である。283は白磁碗II類である。見込みは輪状に軸を搔き取る。出土遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。

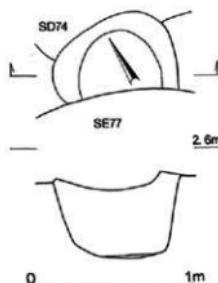


Fig. 70 SK87 (1/30)

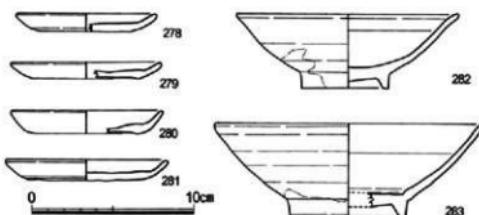


Fig. 71 SK87出土遺物 (1/3)

SK240

E-8・9に位置する径0.9m、深さ0.7mの円形土坑である。壁はオーバーハング気味に立ち上がる。土器器坏・皿、瓦器椀、取瓶が出土した。284・285は土器器の皿で、すべて底部糸切りである。284には板状压痕がつく。口径は9.2cm、器高は1.0~1.3cmである。286~292は土器器の坏で、すべて底部糸切りで、板状压痕がつく。口径は14.4~15.4cmで平均14.9cm、器高は2.7~3.1cmで平均2.9cmである。出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。



PL. 46 SK240 (南から)

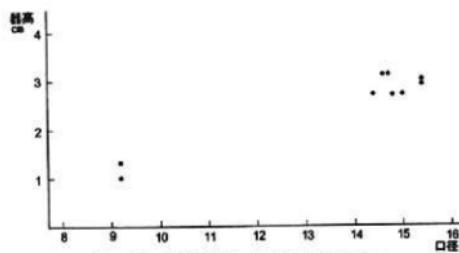


Fig. 73 SK240出土土器器法量グラフ

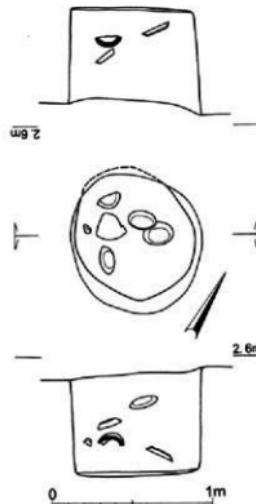


Fig. 72 SK240 (1/30)

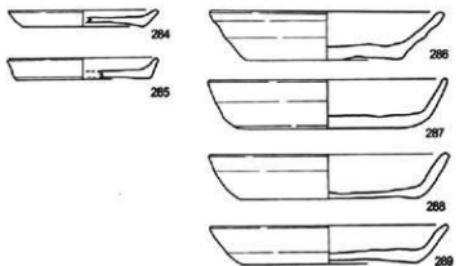


Fig. 74 SK240出土遺物 (1/3)

(5) 他の遺構

発掘区の東端で骨が出土する遺構を2基調査した。出土した動物骨については71~74ページを参照されたい。

SK190

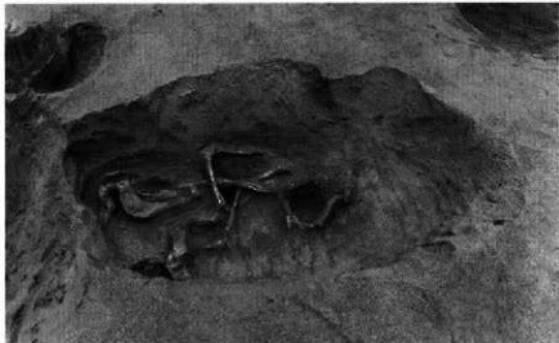
F~H-43~44で検出した馬の埋葬土壙である。東側は擾乱を受ける。長軸は残存部で1.8m、短軸は1.0m、深さ0.5mの楕円形の壠方に、馬が頭部を東に向けて埋葬されていた。出土遺物は土師器の小片とイイダコ壺の破片のみで時期ははっきりしないが、12世紀以降の遺構と考えられる。

SX200

F~H-46~48で検出した骨の集積遺構である。後述する遺構検出面の下の包含層を除去したところで検出した。標高は0.8m~1.2mである。ほとんどが馬の骨であるが、中に1割ほど人骨が混じっていた。人骨を見ていたい中橋孝博氏によると最低3体分あり、2体は成人で内1体は女性、1体は子供ということである。

馬の骨は頭部を除き、ほぼ揃うのに対して、人骨はほんの一部分しかなく、どういった状況で馬の骨に混じったのか不明である。

骨に混じって白磁碗と四耳壺、瓦器椀が出土した。293は白磁碗VI類で内面に櫛描を施す。294は陶器の四耳壺である。オリーブ色の透明釉が内面までかかる。12世紀前半の遺構と考えられる。



PL. 47 SK190 (北から)

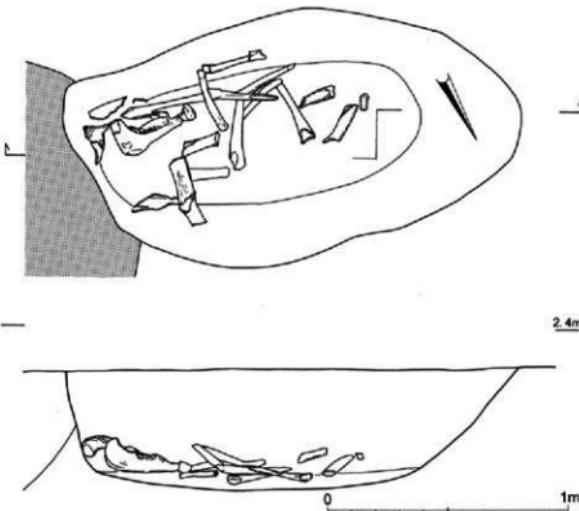


Fig. 75 SK190 (1/20)

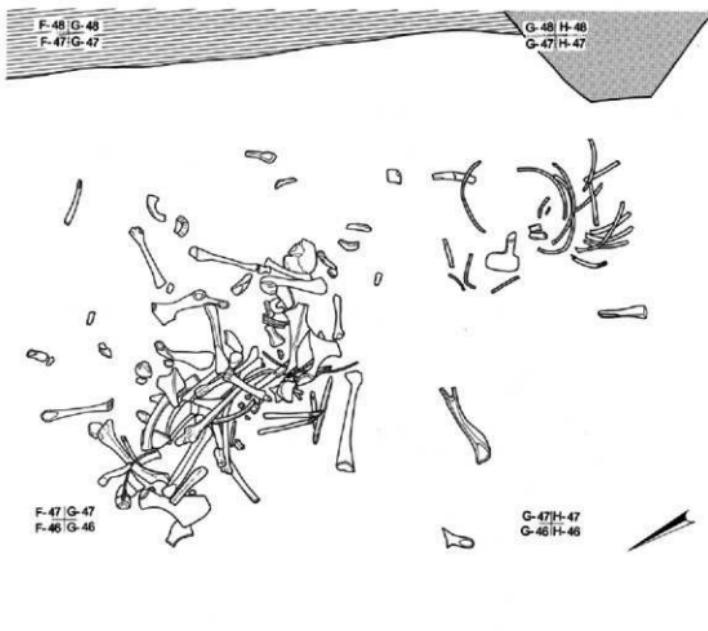


Fig. 76 SX200 (1/20)



PL. 48 SX200 (西から)

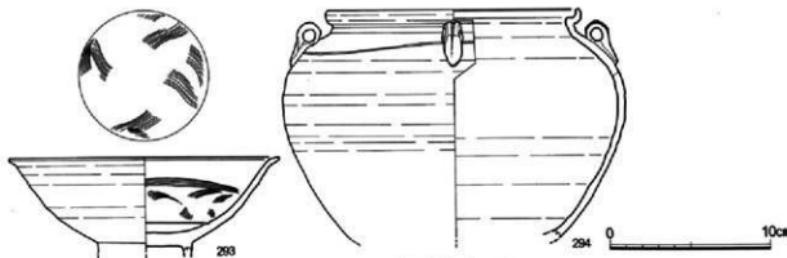


Fig. 77 SX200出土遺物 (1/3)

(6) 包含層

F~I-45~48では、遺構検出面より下の砂層から遺物が出土した。この部分の砂層は暗黄褐色～暗茶褐色の砂で、12世紀前半までの遺物と SX200を検出した。遺物を含まなくなる黄褐色砂の上面は H-45から東に急激に下がり、発掘区東端では標高0.5mとなる。

295~301は土師器の壊である。298は底部ヘラ切りで、それ以外は糸切りである。板状圧痕は296・298以外にみられる。302・303は越州窯系青磁である。302は全面施釉で、高台内側に目跡が残る。303は全面施釉で、見込みと疊付に目跡が残る。304~308は白磁碗である。304はIV類、305はVI類、306はII類。体部内面を6本の白堆線で区画する。307・308はIX類。見込みは輪状に釉を搔き取る。309・310は瓦器椀である。311は高麗陶器である。暗茶色の胎土で表面は黒灰色を呈する。よく焼きしまつている。



PL. 49 発掘区東端南壁土層 (北から)

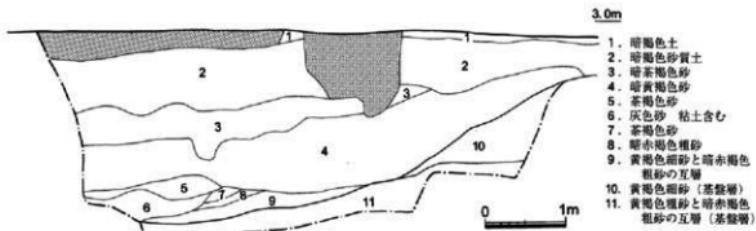


Fig. 78 発掘区東端南壁土層 (1/60)

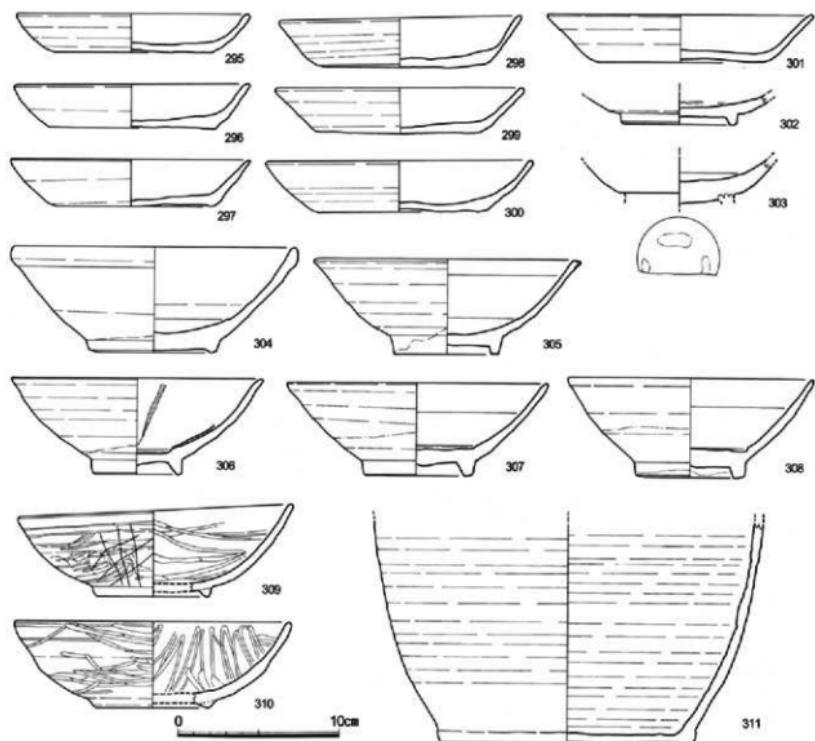
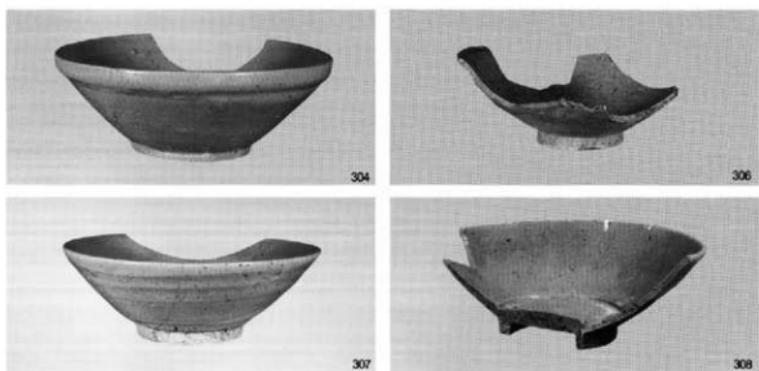


Fig. 79 包含層出土遺物 (1/3)



PL. 50 包含層出土遺物 (約1/3)

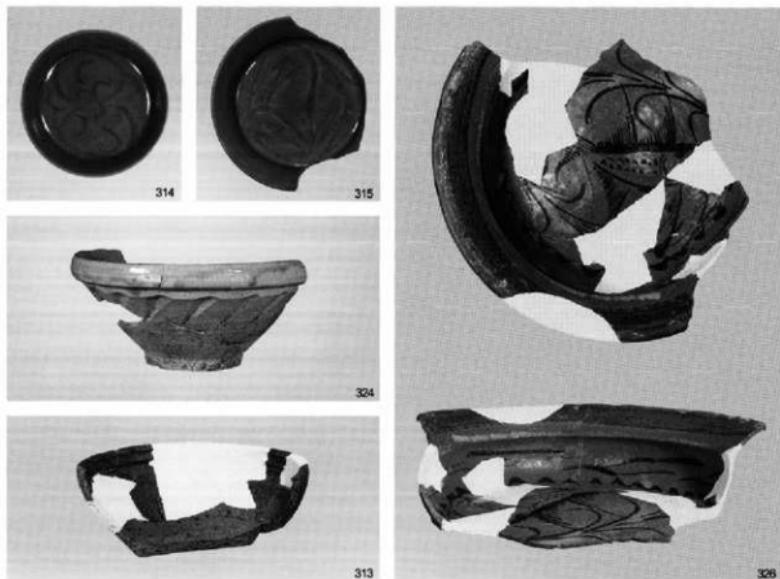
(7) 抽出した遺物

ここでは、これまでにふれられなかった遺物を報告する。

土器・陶磁器

312は中国陶器B群の四耳壺である。接合しないが同一個体であろう。明茶褐色の不透明釉がかかること。SK110出土。313は中国陶器C群の捏鉢である。内面は摩耗している。SK258・259出土。314は試掘時に出土した完形の龍泉窯系青磁皿である。315は同安窯系青磁皿である。SP178出土。316・317は白磁平底皿II類である。黄色みがかかった不透明釉が薄くかかる。316は近代の井戸 SE03堀方出土。317は SK35出土。318は白磁平底皿II類である。G-2グリッドの遺構検出時出土。319は白磁平底皿IV類である。口縁部を外反させ、斜めに削る。体部内面は白堆線で区割りする。SK58出土。320は白磁高台付皿II類である。見込みは輪状に釉を搔き取る。SK28出土。321は口縁玉緑の白磁高台付皿I類である。SP187出土。322は瓦器碗である。SK101出土。323・324は白磁碗IV類である。どちらも SP 223・224出土。324は体部外面にヘラで刻みを入れる。325は綠釉陶器である。外面線刻による施文のち、明緑色の透明釉をかける。磁州窯系か。SK86出土。326は中国陶器A群I類の盤で、内面に魚藻文を描く。SP223・224出土。

中世以前の遺物も若干出土している。327は8世紀ごろの土師器の甕である。内面は口縁ヨコハケ、体部ヘラケズリ、外面は口縁ヨコナデ、体部タテハケを施す。近代の井戸 SE03出土。328は6世紀末～7世紀初頭の須恵器の坏身である。SE239出土。329～330は古墳時代の土師器である。V区の砂層より出土した。周囲も掘り広げてみたが、他に出土遺物はなかった。329は5世紀前半の高坏である。



PL. 51 抽出した遺物 (313・326: 約1/5・他: 約1/3)

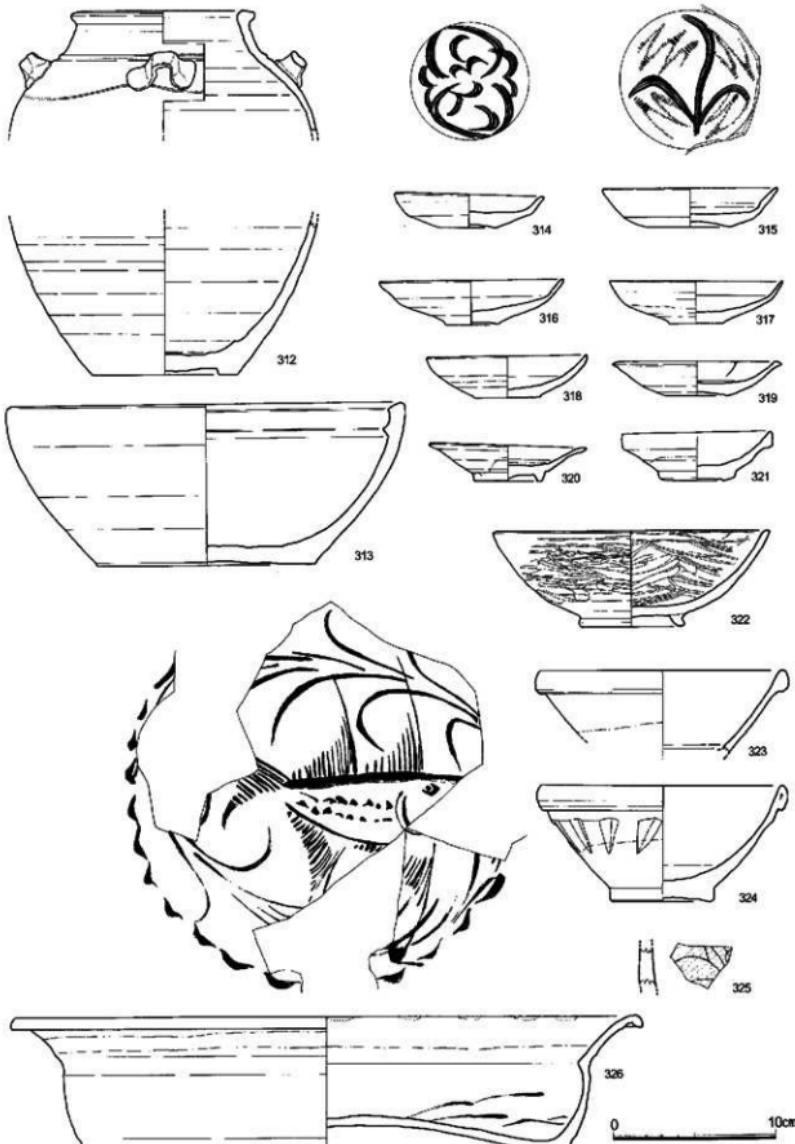


Fig. 80 抽出した遺物 1 (1/3)

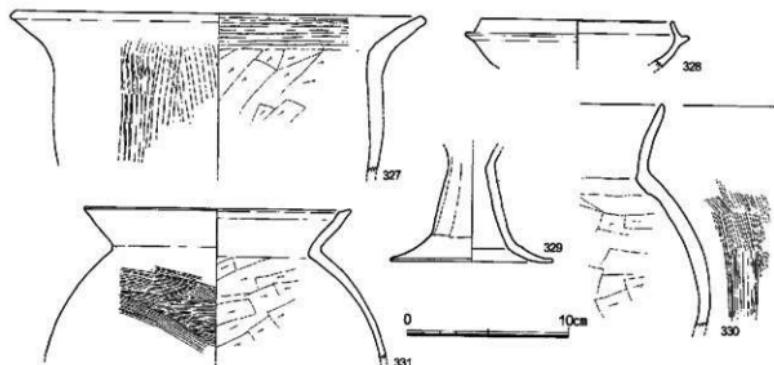


Fig. 81 抽出した遺物 2 (1/3)

る。脚部は板上工具による縦方向のナデ、裾部はヨコナデ、内面は横方向のヘラケズリを施す。330は5世紀後半の土師器の甕である。外面は口縁部ヨコナデ、体部タテハケ、内面は口縁部板上工具によるナデ、体部ヘラケズリを施す。331は4世紀末～5世紀初頭の七輪器の甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、内面はヘラケズリを施す。

墨書き土器

9点の墨書き土器が出土した。青磁碗1点、青磁皿1点、白磁碗7点である。青磁には記号が、白磁には文字が書かれている。332・333以外については既に出土遺構のところで実測図を掲載している。14は15世紀代の龍泉窯系青磁で、高台内側に朱で円が書かれている。SD193出土。48は同安窯系青磁皿で、釉が掻き取られている底部に、円の中に風車のような記号を記す。SE205堀方出土。32は白磁碗VI類で高台内側に「一大(花押)」と三文字が三角形の位置に書かれている。SE109井筒出土。22は白磁碗IV類で、SE77出土。高台内側にははっきりと墨書きがみえるが、破片のため文字の一部分しか残っておらず、判読できない。33・154・277・332・333の5点には書体が異なるが、「誌」という字が書かれている。中国人名か。33は白磁碗皿類で、高台内側に書かれている。SE239出土。154は白磁碗VI類で、高台内側の端に、かすかに文字がみえる。SK02出土。277は白磁平底皿IV類で、釉が掻き取られた底部に書かれている。SK30出土。332・333は白磁碗皿類で、高台内側に書かれている。G-16に位置する SP236出土。以上5点が出土した4つの遺構は発掘区西側に位置する。

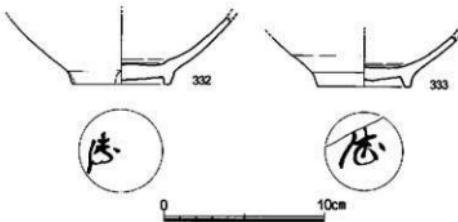
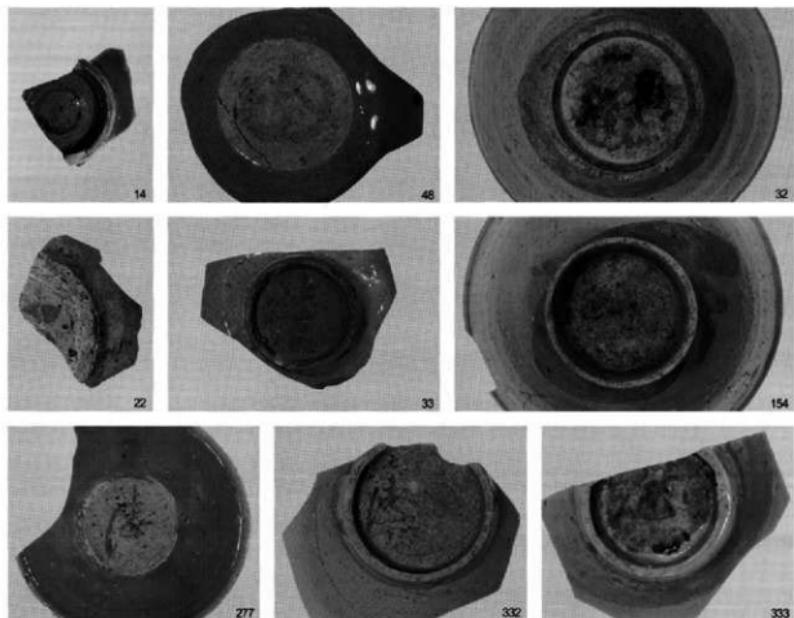


Fig. 82 墨書き陶磁器 (1/3)



PL. 52 墨書陶磁器 (約1/2)

生産関連遺物

今回の調査ではかなりまとまった量の鋳造関連遺物が出土した。鋳造関連の遺構は確認できなかつたが、銅製品を鋳造する工房が近くにあったものと考えられる。破片が多く、図示できなかつたので、一覧表に出土遺構を示す (Tab. 2)。発掘区の西側に集中して出土している。12世紀後半の遺構に土築器、陶磁器とともに廃棄されているものが多い。334・335は土製鋳型である。334は青銅製鍋の外型である。口縁部分に段がつく。胎土には粗砂、スサを含み、内面に真土を貼る。底部中心に径1.8cmの軸孔がある。鋳上がりの鍋の法量は口径21.2cm、器高8.1cmになる。この鋳型が出土した SK83は径0.7mの円形土坑で、鋳型のみが割れた状態で出土した。他の遺構との切り合い関係から13世紀後半以降の遺構であるが、何らかの状況で、12世紀後半頃の鋳型が後世の遺構に廃棄された可能性を考えておきたい。博多跡跡群84次調査では12世紀後半を下ることないと報告されている時期の銅製の鍋が出土している。この鍋と鋳型を実際に重ねてみたが、鋳型の方が若干口径が大きかった。しかし、器高や底からの立ち上がりのカーブはよく一致した。破片を接合したので、鋳型が少々歪んでいる可能性もある。335は小型の碗の外型であろうか。底部に軸孔がある。破片なので正確な値ではないが、口径8.6cm、器高3.5cmの製品ができる。天地逆で、何かの台座となるのかもしれない。336・337は取瓶である。内面に溶けた銅が付着する。336は SK02出土。337は SK240出土。338は炉壁と思われる。下端部の復元径が約50cmの円筒状になるが、正面右端は破損しておらず、一周しないものと考えられる。下端に輪の羽口を挿入するためと思われる径4cmの半円の孔がある。SK08出土。339は中

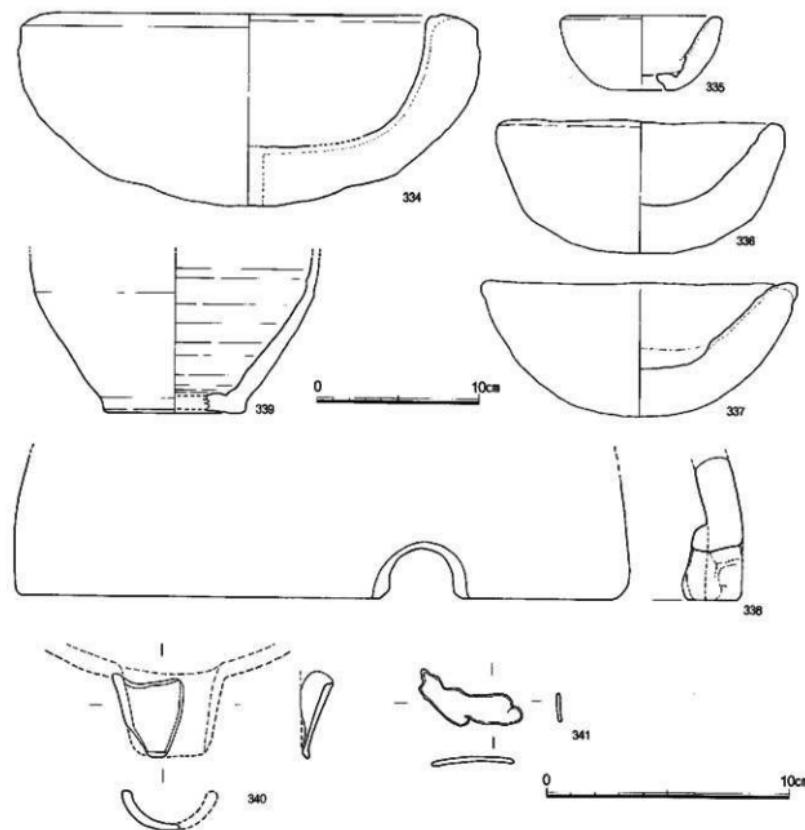


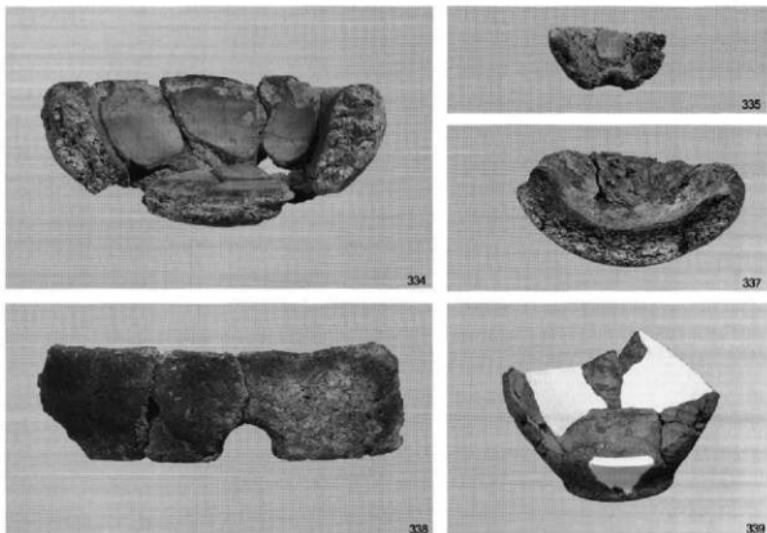
Fig. 83 生産関連遺物 (340・341: 1/2・他: 1/3)

Tab. 2 鋳造関連遺物出土遺構一覧

遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SK01	○	○		
SK02	○	○	○	
SK04	○	○		○
SK05			○	
SK06	○	○	○	○
SK08	○	○		
SK15		○	○	
SK16	○			
SK18	○	○	○	
SK20	○		○	
SD23		○		
SK43				
SK62			○	

遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SK69				○
SK70	○			
SK71		○		
SE73	○			○
SD74			○	
SE77	○		○	
SK83	○			
SE107	○	○		
SE108		○		○
SE109	○	○		○
SK136			○	
SK138			○	
SK170			○	

遺構	鋳型	取瓶	羽口	炉壁
SE239	○	○	○	○
SK240			○	
SK252	○			○
SK253	○	○		
SE260			○	
SP77				○
SP159	○			○
SP178				○
SP229	○	○		
SP232	○			
SP274			○	



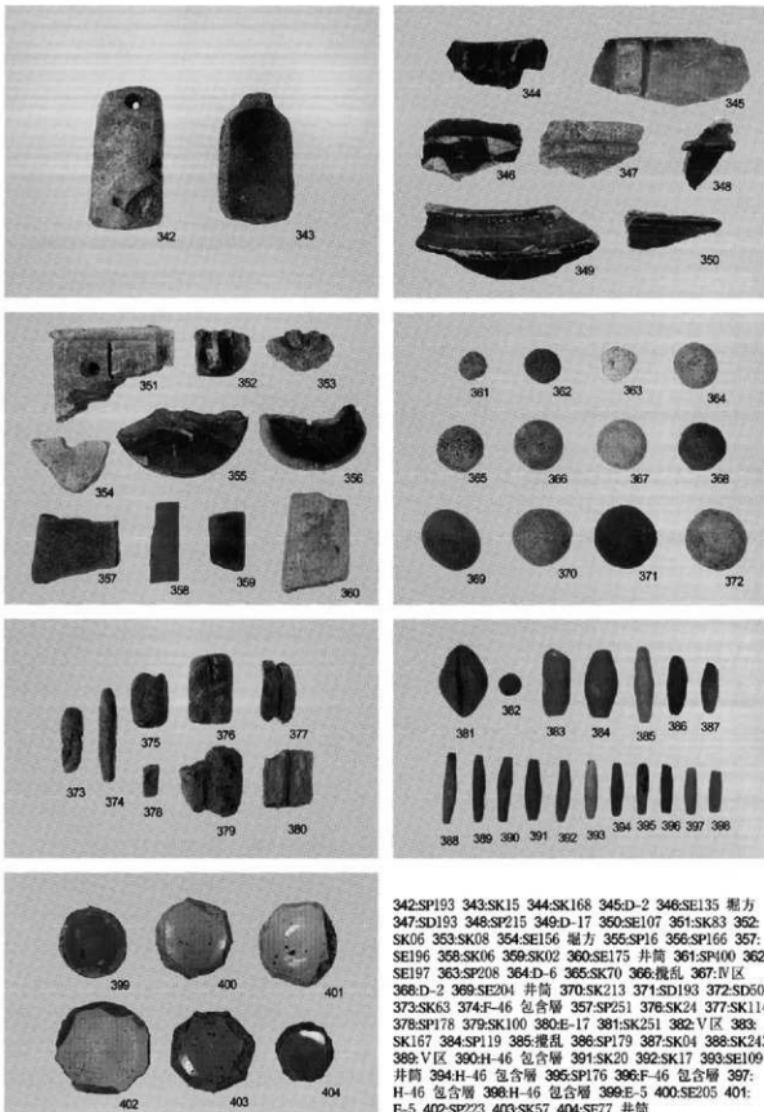
PL. 53 生産関連遺物（約1/4）

国陶器C群の壺であるが、内面に溶けたガラスが付着している。坩堝として使用されたものである。SK255出土。

青銅製品は2点出土した。340は鍋の注口であろう。湯がまわらずに本体にくつつかなかったものか。SE77出土。341は飾り金具か。縁を整形している。かるく湾曲する。SK05出土。

石製品・土製品

342は滑石製の權である。上端部に穿孔がある。一部欠損しており、残存重量は100gである。343も權である。瓦を磨いてつくられている。重量47g。344～350は滑石製の石鍋である。344・345は縦に把手がつく。346～350は口縁下に鉗が削りだされる。351は用途不明の滑石製品。ブロック状の突起をもち、中央に穿孔する。352・353は滑石製石鍋を転用したコテ状製品。354～356は円盤の中央に穿孔する滑石製品である。スヌが付着しており、石鍋の転用か。357～360は砥石である。361～372は石球である。砂岩製で369を除き、敲いて球状に整形している。361は13g、372は124g。373～380は石錘である。380を除き、滑石製である。375は中央に穿孔し、管状となる。そのほかは、紐を結ぶための溝をもつ。373・374・378は横方向、377・379・380は縦方向、376は縦、横十字に溝をつけている。381～398は土錘である。写真に示した以外にも多数あり、合計104点出土した。381は二面に紐を結ぶための溝がつけられる。重量71g。382は球状の土錘で、中央に孔があく。重量6g。383は太い管状の土錘である。重量24g。384は管状の土錘で紡錘形を呈する。重量30g。385～398は細身の管状の土錘である。写真に示さなかった他の土錘はすべてこのタイプである。重量は385が14g、398が3gである。5g前後のものが多い。399～404は陶磁器の底部を円盤状に打ち欠いて整形したものである。399と404が青磁碗、そのほかが白磁碗の底部である。



PL. 54 石製品・土製品 (342・343: 約1/2・他: 約1/4)

342:SP193 343:SK15 344:SK168 345:D-2 346:SE135 楠方
 347:SD193 348:SP215 349:D-17 350:SE107 351:SK83 352:
 SK06 353:SK08 354:SE156 福方 355:SP16 356:SP166 357:
 SE196 358:SK06 359:SK02 360:SE175 井筒 361:SE100 362:
 SE197 363:SP208 364:D-6 365:SK70 366:攢乱 367:V区
 368:D-2 369:SE204 井筒 370:SK213 371:SD193 372:SD50
 373:SK63 374:F-4 包含層 357:SP251 376:SK24 377:SK114
 378:SP178 379:SK100 380:E-17 381:SK251 382:V区 383:
 SK167 384:SP119 385:攢乱 386:SP179 387:SK04 388:SK243
 389:V区 390:H-46 包含層 391:SK20 392:SK17 393:SE109
 井筒 394:H-46 包含層 395:SP176 396:F-46 包含層 397:
 H-46 包含層 398:H-46 包含層 399:E-5 400:SE203 401:
 E-5 402:SP223 403:SK57 404:SE77 井筒

銭

SD158のF-27グリッドで、溝の南の肩の部分から繩銭が出土した。SK159との重複部分にあたるため、SK159の遺物の可能性もある。埋納された様子はない。縄紐などの痕跡は残っていなかった。銭はそれほどひどくなく、剥離は容易であった。

銭の合計は91枚で、22種類の銭種が確認された。最古銭は開元通寶で、最新銭が永樂通寶である。また、永樂通寶が最多の21枚あり、洪武通寶の流通が多かったといわれる九州では、際だった組成を示す。東から連ねてある順に並べて表に示した（Tab. 3）。向きとは東から見て表か裏かをあらわしている。特に向きや順番に意図があるわけではなさそうである。

その他の出土銭はFig. 89に拓影を、Tab. 5に表を示した。中世の渡来銭が8枚、近世の寛永通寶が6枚、近代の銭が4枚、不明6枚である。折二銭である熙寧重寶が採集されている。

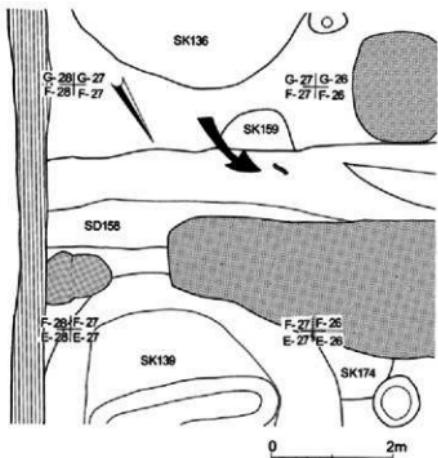


Fig. 84 SD158 繩銭出土位置 (1/40)

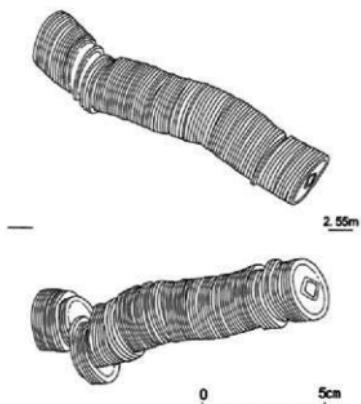
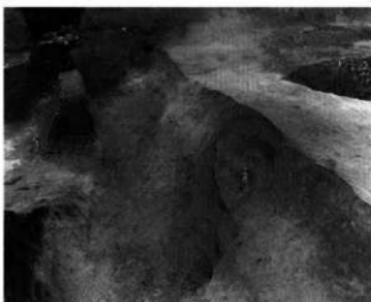


Fig. 85 SD158 繩銭出土状況 (1/2)



PL. 55 SD158 繩銭出土状況 (左: 西から・右: 北から)

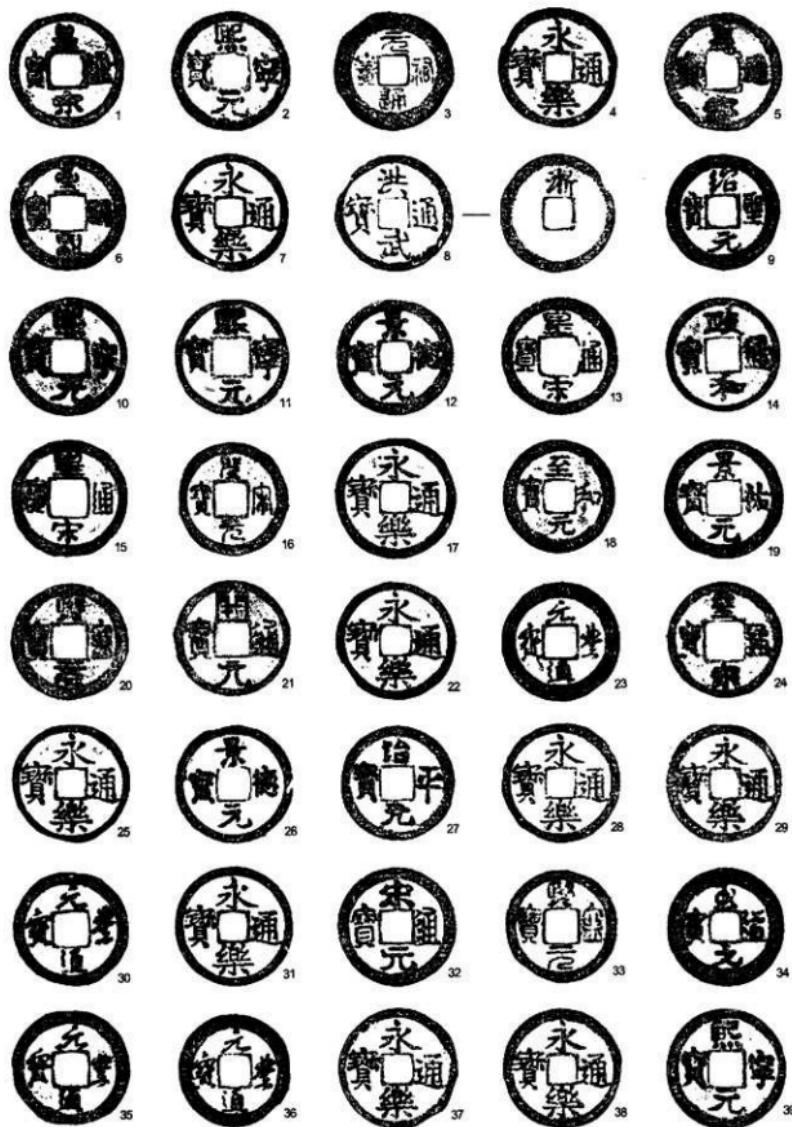


Fig. 86 SD158出土錢拓影 1 (1/1)

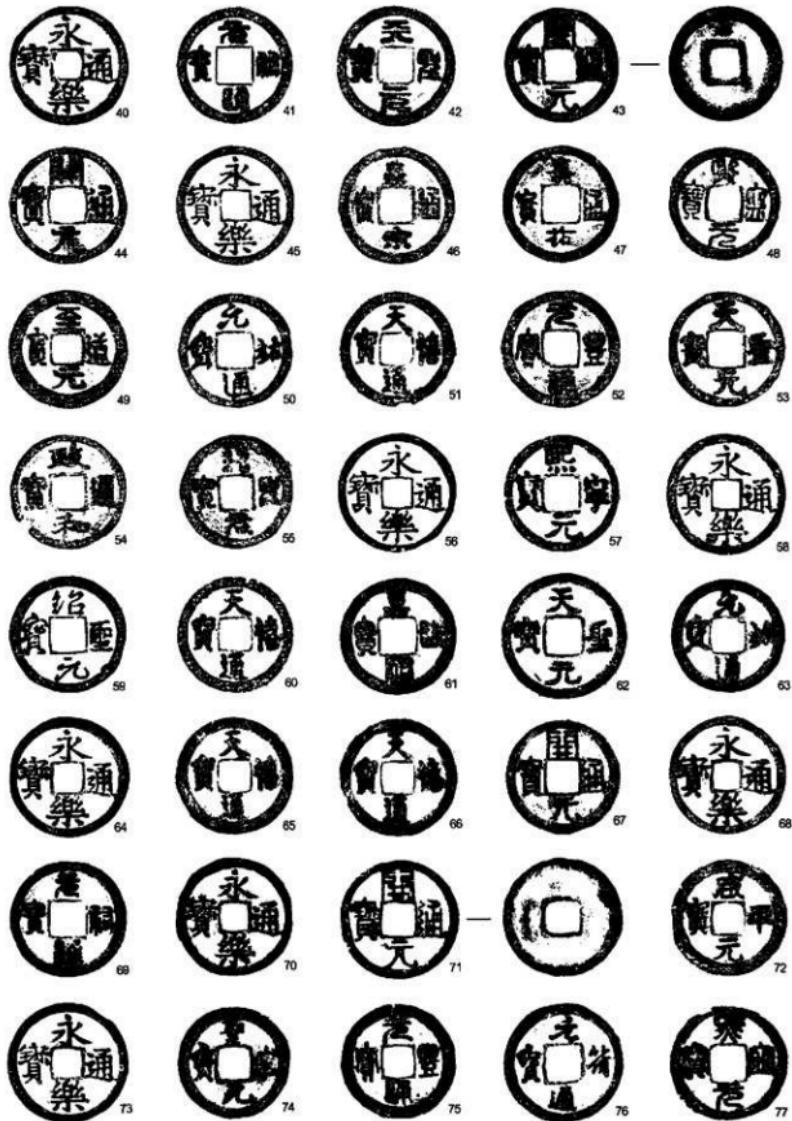


Fig. 87 SD158出土緡錢拓影 2 (1/1)

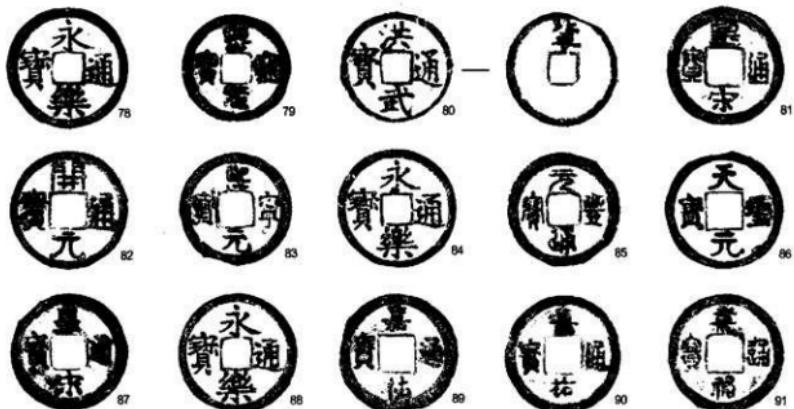


Fig. 88 SD158出土緡錢拓影 3 (1/1)

Tab. 3 SD158出土緡錢一覽

No	向き	錢貨名	書体	備考	No	向き	錢貨名	書体	備考	No	向き	錢貨名	書体	備考
1	裏	皇宋通寶	真書		32	裏	宋通元寶			63	表	元祐通寶	行書	
2	表	熙寧元寶	真書	星形孔	33	表	熙寧元寶	篆書		64	裏	永祐通寶		
3	裏	元祐通寶	篆書		34	表	至道元寶	行書		65	裏	大羅通寶		
4	裏	永樂通寶			35	表	元豐通寶	行書		66	表	天祐通寶		
5	裏	皇宋通寶	真書		36	表	元豐通寶	行書		67	裏	開元通寶		
6	表	至和通寶	篆書		37	裏	永樂通寶			68	表	永樂通寶		
7	表	永樂通寶	篆書		38	表	永樂通寶			69	表	元祐通寶	篆書	
8	裏	洪武通寶		背浙	39	裏	熙寧元寶	真書		70	表	永祐通寶		
9	裏	紹聖元寶	行書		40	裏	水樂通寶			71	裏	開元通寶		背左月
10	表	熙寧元寶	真書		41	裏	元祐通寶	篆書		72	表	咸平元寶		
11	裏	熙寧元寶	真書		42	表	天聖元寶	篆書		73	裏	永樂通寶		
12	表	景德元寶			43	表	開元通寶		背上年	74	表	聖宋元寶	行書	
13	裏	皇宋通寶	真書		44	表	元豐通寶			75	表	元豐通寶	篆書	
14	裏	政和通寶	分楷		45	裏	水樂通寶			76	裏	元符通寶	行書	
15	表	皇宋通寶	真書		46	表	皇宋通寶	真書		77	裏	熙寧元寶	篆書	
16	表	聖宋元寶	篆書		47	裏	嘉祐通寶	真書		78	裏	永樂通寶		
17	裏	永樂通寶			48	表	熙寧元寶	篆書		79	裏	熙寧元寶	篆書	
18	裏	至和元寶	真書		49	裏	至道元寶	真書		80	表	洪武通寶		背北平
19	裏	景祐元寶	真書		50	表	元祐通寶	行書		81	表	皇宋通寶	真書	
20	裏	熙寧元寶	篆書		51	表	天祐通寶			82	表	開元通寶		
21	裏	開元通寶			52	表	元豐通寶	篆書		83	裏	熙寧元寶		
22	裏	永樂通寶			53	表	天聖元寶	真書		84	裏	永樂通寶		
23	表	元豐通寶			54	裏	政和通寶	分楷		85	裏	元豐通寶	篆書	
24	裏	皇宋通寶	真書		55	裏	紹聖元寶	篆書		86	裏	天聖元寶	真書	
25	裏	永樂通寶			56	表	永樂通寶			87	裏	皇宋通寶	真書	
26	裏	景德元寶			57	裏	熙寧元寶	真書		88	裏	永樂通寶		
27	表	治平元寶	真書		58	裏	永樂通寶			89	表	嘉祐通寶	真書	
28	裏	永樂通寶			59	表	紹聖元寶	行書		90	表	嘉祐通寶	真書	
29	表	永樂通寶			60	表	大羅通寶			91	表	嘉祐通寶	篆書	
30	裏	元祐通寶	行書		61	表	嘉祐通寶	篆書		62	裏	天聖元寶	真書	
31	裏	永樂通寶												

Tab. 4 SD158出土錢貨名一覽

錢貨名	國名	初鑄年	枚數	錢貨名	國名	初鑄年	枚數	錢貨名	國名	初鑄年	枚數
開元通寶	唐	621	6	天聖元寶	北宋	1023	4	治平元寶	北宋	1064	1
宋通元寶	北宋	960	1	景祐元寶	北宋	1034	1	熙寧元寶	北宋	1068	11
至道元寶	北宋	995	2	皇宋通寶	北宋	1038	8	元豐通寶	北宋	1078	7
咸平元寶	北宋	998	1	至和元寶	北宋	1054	1	元祐通寶	北宋	1086	5
景德元寶	北宋	1004	2	平和通寶	北宋	1054	1	紹聖元寶	北宋	1094	3
天禧通寶	北宋	1017	4	嘉祐通寶	北宋	1056	5	元符通寶	北宋	1098	1

合計91枚

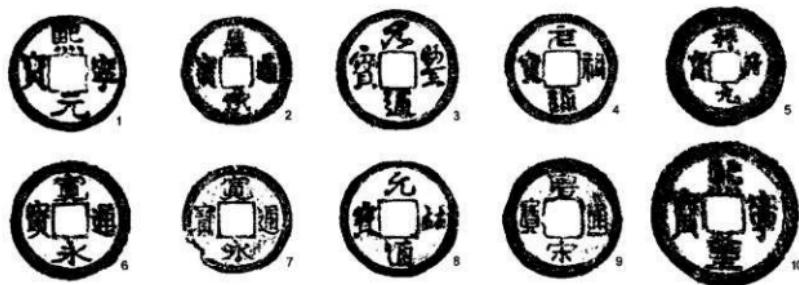


Fig. 89 出土錢拓影 (1/1)

Tab. 5 出土錢一覽

遺構名	錢貨名	書体	國名	初鑄年	備考	拓影
SK08	熙寧元寶		北宋	1068	星形孔	Fig. 89-1
SK34	皇宋通寶		北宋	1038		Fig. 89-2
SK87	元豐通寶	行書	北宋	1078		Fig. 89-3
SE108壠方	元祐通寶	篆書	北宋	1086		Fig. 89-4
SK116	不明					
SK168	祥符元寶		北宋	1009		Fig. 89-5
SK168	寛永通寶		日本	1636	古寛永	Fig. 89-6
SK182	寛永通寶		日本	1697		
SK189	寛永通寶		日本	1697		
SK206	寛永通寶		日本	1697	1/2欠損	
SK223	一錢		日本	1917	大正六年	
SP378	寛永通寶		日本	1697		Fig. 89-7
SP159	不明					
I-5グリッド	元祐通寶	行書	北宋	1086		Fig. 89-8
H-24グリッド	一錢		日本	1875	明治八年	
攢亂	皇宋通寶		北宋	1038		Fig. 89-9
攢亂	寛永通寶		日本	1697		
攢亂	五錢		日本	1876	明治九年	
攢亂	一錢		日本	1919	大正八年	
攢亂	不明					
攢亂	不明					
攢亂	不明					
表採	熙寧重寶		北宋	1071		Fig. 89-10
表採	不明					

III まとめ

今回の10次調査地点は箱崎遺跡群の北部にあたるところで、遺跡群がのる砂丘の東端を確認することができた。

今回の調査でもっとも古い遺物は4世紀末～5世紀初頭頃の古式土師器の甕である。ローリングをあまり受けおらず、周辺に居住域が存在するものと考えられる。8次調査地点では少し先行する時期の竪穴住居2棟を検出しており、この頃箱崎遺跡群では東部に点々と人々の生活が始まったのであろう。東側は多々良川の河口から海が大きく入り込み、ラグーンとなっていたと思われる。

箱崎遺跡群ではこれまで報告されていなかった奈良時代の遺物も発見されたが、近世の井戸の掘方からの出土であり、この時期の様子は明らかでない。

本格的に生活痕跡が現れるのは12世紀からである。12世紀前半、発掘区の西部で小規模な土坑が現れる始める。また、東部では砂丘の落ち際に人骨と馬の骨の出土があった。岸でのたれ死んだのか、うち捨てられたのか、埋葬されずに放置されていたようである。

12世紀後半から遺構は爆發的に増加している。多くの土坑のほかに井戸が掘られはじめている。東端も陸地化していったようである。出土する遺物も博多と同様、青磁・白磁が多い。筥崎宮の貿易によるものであろうか。墨書き陶器も出土し、5点に「誌」と書かれていた。中国人名かと思われる。筥崎宮と関連した中國商人であろうか。

また、鎌型や取瓶といった鋳造関連遺物が出土した。鍋の鎌型が多い。博多遺跡群でも鋳造関連の報告があるが、それより早い時期の遺物である。博多遺跡群の調査はまだほんの一部分であり、箱崎での鋳造が博多より先行しているとは言えないが、箱崎でも古い段階で操業を行なっているのは確實となった。残念ながら鋳造にかかわると考えられる遺構は発見できなかつたが、遺物が両側に集中して出土していることを考えると、発掘区より西側に鋳造工房の存在を想定できる。

この頃の箱崎は貿易港と銅生産工房を持つ、独立した都市としての機能を持っていたと考えても良いであろう。

13世紀にはいると遺構は減少し、14世紀にはみられなくなる。しかし周辺にはこの頃から板碑が立てられはじめる。板碑は遺跡の縁辺に分布しており、10次調査地点周辺の北部もこの頃は生活域から離れた場所になるのであろう。

15・16世紀は区画溝かと思われる溝があり、現在の町割りに沿った方向をとる。また、東部にこの頃の遺物が見つかっているが、量は少ない。溝から織鉄が出土したが、埋納の状況はなさうなので、落とし物であろうか。

近世も後半になって再び遺構が増加し、現在に至っている。

以上、今回の調査の成果を時代を追って簡単にまとめた。ところで、近接する6次調査地点も12世紀後半の遺構が中心であった。北部地域の特徴であり、この時期筥崎宮の周辺で遺構が減少するのと対照的である。1151年（仁平元年）の大宰府官人による箱崎・博多の人追捕に関連した現象であろうか。荒廃した筥崎宮周辺の人々の一時避難の場所だったのではないかと考えるとおもしろい。

箱崎地区では区画整理が予定されており、これから多くの調査が行なわれる。今後、中世都市「箱崎」の姿が徐々に明らかになっていくであろう。

Tab. 6 亂標一覽

種類番号	種類	位置	時期	害蟲の特徴		予防・対策
				成虫	若虫	
SK01	樹木地上部 坑	H-3	12C 後半	成虫1.7m、體幅1.4m、深さ0.8m。SK06、SK10、 SK22を切る。SK02、SK07、SK25、SK05、SK06、SK9より 多く。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、白蜘蛛、白蜘蛛Ⅱ、瓦、瓦、白粘土瓦、中 國陶器A群蟹、C群蟹、附着、陶器、瓦器等要観察、 取扱、土器等落合付付、瓦、土器等环、瓦(糸切り)、 土塊
SK02	樹木地上部 坑	H-1-1-2	12C 後半	成虫2.0m、體幅1.4m、深さ0.9m。SK06、SK67L を切らる。SK07、SK32、SK05、SK06を切る。 より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦等、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、瓦、瓦、瓦、土器等环
SE03	円形土坑 井戸	D-F-3 -5	近代	直筒2.0m、體幅1.4mの直円形の底方に瓦を置けた もの内円に瓦が、瓦の上に内円の外縁を構える。 SK02、SK07、SK37、SK38、SE03を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、内輪瓦、白蜘蛛、瓦、白蜘蛛、白粘土瓦、 瓦器等环、瓦、瓦、瓦、土器等环
SK04	円形土坑	G-H-1-2	後半	成虫1.2m、體幅を受ける。残存部で長軸1.7m、深さ0.7 m。SK02、SK03を切られる。SK10を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、中國陶器A群蟹、 C群蟹、附着、瓦、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)、 瓦器等环
SK05	円形土坑	I-J-1	12C 後半	西側発掘区野外に伸びる。深さ0.8m。SK63Lより 後半。SK07、SK7を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、白粘土瓦等、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、瓦、瓦、瓦、土器等环
SK06	圓形土坑 坑	H-I-2-3	12C 後半	北側上部に被覆を受ける。残存部で長軸1.4m、直軸1.2 m、深さ0.9m。SK07に切られる。SK02、SK6、SK 65を切る。SK07、SK32、SK05、SK09、SK11より新 しく。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、瓦、瓦、附着、 土器等环、瓦、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)、 瓦器等环
SK07	樹木地上部 坑	H-I-1	12C 後半	直筒2.0m、瓦幅1.4m、深さ0.9m。SK02、SK03 を切る。SK07より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、瓦、瓦、土器等环、 瓦器等环、瓦、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK08	円形土坑	F-G-1-2	後半	約1.1m、深さ0.7m。西側発掘区野外に伸びる。SD23 に切られる。SK09を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、瓦、瓦、土器等环、 瓦器等环
SK09	樹木地上部 坑	F-G-1-2	後半	成虫1.1m、深幅0.9m、深さ0.5m。SK08に切られ る。SD23より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、瓦、瓦、土器等环、 瓦器等环
SK10	不整円形 土坑	D-B-3	12C 後半	直筒1.1m、體幅0.9m、深さ0.4m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK11	不整円形 土坑	C-D-2	12C 後半	長軸1.3m、短軸1.1m、深さ0.9m。SK14に切られ る。SK02より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK12	樹木地上部 坑	C-2-3	12C 後半	直筒2.0m、瓦幅0.8mの残存部。瓦有部で、長軸0.8m、 直軸0.7m、深さ0.4m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK13	樹木地上部 坑	C-3	12C 後半	直筒1.1m、深幅0.8m、深さ0.7m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK14	樹木地上部 坑	C-2-3	12C 後半	直筒0.9m、短軸0.6m、深さ0.6m。SK11を切る。		土器等环、瓦(糸切り)
SK15	円形土坑	H-I-1-2	12C	960.7mm。SK02を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、天日碗、中國陶器C群灰陶、陶器、 灰陶
SK16	円形土坑	H-2-3	12C	SK01、SK06に切られる。残存部で長軸0.5m、以降0.4 m、深さ0.3m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK17	樹木地上部 坑	G-3	12C	SD23に切られる。長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.4 m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK18	圓形土坑	F-G-2-3	12C	SD23に切られる。長軸0.8m、深さ0.6m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK19	円形土坑	R-1	12C	約0.7m、深さ0.2m。西側発掘区野外に伸びる。SK07 を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK20	円形土坑	D-E-4-5	12C 後半	約0.5m、深さ0.9m。北側上部懸垂を受ける。SD03 に切られる。SK38を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、南安青黒斑虫Ⅱ、盐湖青斑虫、内輪瓦、 白蜘蛛、V、瓦、白粘土瓦、中國陶器A群蟹、C群蟹、附 着、瓦器等环、土器等环、瓦(糸切り)
SK21	樹木地上部 坑	G-3	12C	SD03に切られる。長軸0.7m、短軸は残存部で0.5 m。SK02より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK22	樹木地上部 坑	H-3	12C	SD01に切られる。長軸0.6m、短軸は残存部で0.4 m。深さ0.3m。		瓦器等环
SD23	東西壁	C1-1-6 H-6-7	12C	東側発掘区野外に伸びる。残存部で長軸1.2m、深 さ0.5m、瓦幅0.2m。瓦を受ける。SK04、SK08、 SK7、SK21、SK25、NK27、SK46、SK19、SK42を 切る。SK75より切り合ひ不可。		同安青黒斑虫Ⅰ、同安青黒斑虫Ⅱ、白蜘蛛、白 蜘蛛幼虫、V、瓦、瓦、白粘土瓦、中國陶器C群灰 陶、灰陶系灰陶、附着、瓦器等环、土器等环、瓦(糸 切り)
SK24	円形土坑	D-6	12C	約1.0m、深幅0.2m。北側発掘区野外に伸びる。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK25	円形土坑	G-2	12C	直筒1.0m、深幅0.5m。SD23に切られる。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK26	椭円形土 坑	G-4-5	12C	東側発掘区野外に伸びる。長軸1.5m以上、短軸0.8m、深 さ0.3m。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK27	椭円形土 坑	G-H-4-5	12C	長軸1.0m、短軸0.8m、深幅0.6m。SD23に切られ る。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK28	椭円形土 坑	D-2	12C	長軸0.8m、短軸0.5m、深幅0.4m。SK11より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK29	椭円形土 坑	D-1	12C	西側発掘区野外に伸びる。以軸0.7m、短軸0.3m以上、 深幅0.2m。SK30、SK32を切る。SK31より古く。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK30	椭円形土 坑	D-1-2	12C	約0.7m、深幅0.3m。西側発掘区野外に伸びる。SK29 に切られる。SK31を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK31	椭円形土 坑	D-1-2	12C	約0.7m、短軸0.6m、深幅0.4m。SK30に切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK32	椭円形土 坑	D-E-1-2	12C	直筒1.0m、深幅0.5m。SK29に切れる。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)
SK33	椭円形土 坑	E-1	12C	西側発掘区野外に伸びる。長軸0.6m以上、短軸0.5m、 深幅0.2m。SK34を切る。		同安青黒斑虫Ⅰ、瓦、瓦、土器等环、瓦(糸切り)

地盤番号	地盤	位置	時期	高さの範囲		出土・遺物
				西側発掘区分に伸びる東側乱れを受ける。反転1.5m以上、延長1.4m、深さ0.9m。SK33、NK39、SK40に切られる。SK27を切る。	地盤表面	
SK34	横円形土坑	E-F-1-2	12C	長軸0.6m、短軸0.4m、深さ2cm。SK06に切られる。	地盤表面破壊Ⅰ、同安青磁製、青磁皿、白磁碗、白磁碗IV-V、白器、白磁皿、陶器、土器、土器部品、瓦（赤切り）、鉢	
SK35	横円形土坑	G-S-6	12C	長軸0.6m、短軸0.4m、深さ2cm。SK06に切られる。	地盤表面IV-V、白器皿、白磁碗、白磁平底皿組、残刀	
SK36	横円形土坑	H-F-3	12C	SD03に下限を切られる。反転0.8m以上、延長0.6m、残存高さ0.2m。SK03、SK42、SK47、SD06、SK09より上。	白磁碗IV、白器皿、白磁平底皿組、残刀	
SK37	横円形土坑	F-4	12C	長軸0.7m以上、短軸0.8m以上、深さ0.4m。SD03、SK03に切られる。SK42、SK47、SD06、SK09より上。	白磁碗、瓦器皿、土器部品（赤切り）	
SK38	円形土坑	G-S-5	12C	SD03、SK03に切れる。残存高さ0.9m、深さ0.2m。	瓦器皿、土器、土器部品、瓦（赤切り）	
SK39	円形土坑	H-F-2	12C	長軸0.6m以上、短軸0.5m。SK30に切られる。SK34、SK35に切る。	土器部品（赤切り）	
SK40	横円形土坑	B-F-1-2	12C	長軸0.6m以上、短軸0.5m。SK30に切られる。SK34、SK35に切る。	内磁碗、土器部品、瓦（赤切り）、土器	
SK41	小量円形土坑	F-2-3	12C	長軸0.7m、深さ0.4m。	瓦器皿	
SK42	横円形土坑	F-3-4	12C	長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.2m。SD03を切る。	瓦器皿	
SK43	横丸形土坑	G-I-3	12C	長軸0.9m、短軸0.4m、深さ0.3m。	白磁皿、取瓶	
SK44	横円形土坑	I-3-4	12C	長軸1.2m、短軸0.3m、深さ0.1m。	白磁皿Ⅱ、陶器	
SK45	横丸方形土坑	I-4	12C	地盤乱れを受ける。長軸1.3m以上、短軸0.3m、深さ0.2m。	同安青磁碗Ⅰ、青磁皿、内磁碗V、陶器、平瓦、土器、土器部品、瓦（赤切り）	
SK46	横丸形土坑	G-H-1	12C	長軸1.4m、短軸1.2m、深さ0.4m。西側発掘区分に伸びる。	同安青磁碗Ⅵ、白磁碗、白磁碗、白磁皿、同安青磁碗Ⅳ-V、白器皿、土器部品、瓦（赤切り）	
SK47	円形土坑	F-G-6-7	12C	長軸0.5m、深さ0.6m。SK03を切る。	同安青磁碗、白磁碗、瓦、瓦器皿、土器部品（赤切り）	
SK48	横円形土坑	G-6-7	12C	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.7m。	白磁碗、白磁碗Ⅳ-V、瓦、瓦器皿、土器部品、瓦（赤切り）、土器	
SK49	円形土坑	G-H-3	12C	長軸0.9m、深さ0.3m。東側乱れを受ける。SD23に切られる。	同安青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁碗Ⅳ-V、白器皿、陶器、土器部品、瓦（赤切り）	
SD50	東西溝	B-E-3	16C	長軸0.5-1.7m、深さ0.2m。一部乱れを受ける。	同安青磁碗Ⅰ-V、同安青磁碗Ⅱ、青磁皿、同安青磁碗Ⅳ-V、白器皿、陶器、土器部品、瓦（赤切り）	
		~12		東側発掘区分に伸び、SD42で接する。SD31に切られる。	同安青磁碗Ⅰ-V、同安青磁碗Ⅱ、青磁皿、同安青磁碗Ⅳ-V、白器皿、陶器、土器部品、瓦（赤切り）	
				SD51、SK251、SK254、SK256を切る。SK36、SK37、SK58、SK65、SK216、SK247、NK50、SK252、SK253、SK255、SK257、NK252より上。	同安青磁碗、白磁碗、瓦、瓦器皿、土器部品（ヘクタリ）、瓦器皿、瓦、瓦器皿、土器、土器部品（ヘクタリ）、瓦（赤切り）、瓦、土器、土器	
SB51	独立柱状物	F-G-2	12C	1×2メートル程度。ND23に切られる。		
		~4				
SK52	横円形土坑	H-2	12C	長軸0.6m以上、短軸0.8m、深さ0.7m。SK02、SK15に切られる。		
SK53	東西溝	F-3-7	13C	長軸1.6-2.5m、深さ0.3m。SK03、SK42、SK47、SD06、SK05に切られる。SK36、SK37、NK58、SK05を切る。	青磁碗、同安青磁碗、青磁皿、白磁碗、白磁皿、陶器、瓦、瓦器皿、土器部品（赤切り）	
SK54	不規円形土坑	C-1-2	12C	長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2m。	同安青磁碗Ⅰ-V、土器部品合瓦台-4、瓦（赤切り）	
SK55	横円形土坑	H-C-1-2	12C	長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.1m。西側発掘区分に伸びる。	瓦器皿	
SK56	横円形土坑	H-L-3	12C	長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.3m。SK06に切られる。	白磁碗、土器部品（赤切り）	
SK57	円形土坑	F-L-1	12C	西側発掘区分外に伸び、北側は他の地層に切られ形態不明。深さ0.3m。NK19、SK34、SK39、SK40に切られる。	内磁碗、瓦器皿、土器部品（赤切り）	
SK58	横円形土坑	E-6	12C	長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.6m。SD03に切られる。	白磁碗、白磁碗、白磁碗底皿、中国陶器人形置、瓦器皿、土器部品（赤切り）	
SK59	横円形土坑	F-5-6	12C	東側ノゾムは地盤でさなかった。長軸1.2m、深軸1.0m、深さ0.3m。SD33、SK44、SK05に切る。	青白磁合子蓋、瓦	
SK60	小量円形土坑	E-5	12C	長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.2m。	中国南部C群埋灰、土器部品、瓦（赤切り）	
SK61	横円形土坑	H-I-6-7	12C	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.7m。	青磁碗、白磁碗瓦、K、高麗青磁碗、陶器、平瓦、瓦器皿、土器部品、瓦（赤切り）	
NK62	不規円形土坑	G-H-5-6	12C	乱れを受け、形態不明。延長1.9m、深さ0.3m。SD03に切られる。	中國南部C群埋灰、伊賀、土器部品、瓦（赤切り）	
SK63	円形土坑	I-J-1-2	12C	上部乱れを受け、形態不明。延長0.9m、深さ0.5m。南側斜張渠外に伸びる。SK05、SK71を切る。SK07より上。	瓦器皿、土器部品（赤切り）、石塊	
SK64	円形土坑	F-G-5-6	12C	長軸0.6m、深さ0.5m。SK05に切られる。SK35を切る。	同安青磁碗Ⅰ、同安青磁碗、白磁碗白磁碗Ⅳ-V、白磁碗、中国陶器C群埋灰、瓦器皿	
SK65	横円形土坑	F-6	12C	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.7m。	白磁碗、土器部品、瓦（赤切り）	
SK66	横円形土坑	F-6	12C	長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.7m。	同安青磁碗、白磁碗瓦、K、高麗青磁碗、陶器、平瓦、瓦器皿、土器部品、瓦（赤切り）	
SK67	横円形土坑	I-2	12C	長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.4m。SK02、SK08を切る。	白磁碗、土器部品（赤切り）	
NK68	円形土坑	I-1	12C	長軸0.6m、深さ0.3m。SK02に切られる。	白磁碗Ⅳ-V、土器部品（赤切り）	
SK69	円形土坑	I-2-3	12C	長軸1.1m、深さ0.2m。SK02に切られる。	同安青磁碗Ⅳ-V、同安青磁碗Ⅴ、同安青磁碗、白磁碗、白磁碗Ⅳ-V、陶器、瓦器皿、瓦、瓦器皿、土器、土器部品、瓦（赤切り）	
SK70	不整円形土坑	I-J-2-3	12C	長軸1.6m、短軸1.0m以上、深さ0.6m。南側発掘区分外に伸びる。	同安青磁碗Ⅱ、同安青磁碗Ⅲ、白磁碗、白磁碗、瓦、瓦器皿、瓦器皿、取瓶、瓦器皿、土器部品、瓦（赤切り）、石塊	
SK71	横円形土坑	I-1-2	12C	長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.4m。SK05、SK07、SK09に切られる。	白磁碗、瓦器皿、取瓶、土器部品（赤切り）	
SK72	円形土坑	H-I-5	12C	長軸0.7m、深さ0.3m。東側乱れを受ける。	土器部品（赤切り）	

土壤番号	種類	位置	時期	直 播 の 種 類	出 土 遺 物
SK109	内耕種地 片付	G-H-8-9 後半	12C 後半	J53.0~5.6mの場所に50.7mの木橋を掘る。SD74、SK78、SK107、SK108、SK239に切られる。	井筒 壁を青銅鏡Ⅰ、西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、V、X、陶器、灰瓦、灰瓦器、纺器、錫器、土師器、紅(系切り)、土器、鐵鏡、方鏡、西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、V、VI、土器器皿、棋盤器皿、束縛系鉄錆、酒器瓶、瓦器鏡、鑄型、瓦瓶、土師器环、瓦(系切り)、土器
SK110	内耕十坑	D-16 後半	12C 後半	利1.1m、深さ0.5m。北側地盤を受ける。SK854に切られる。	紹興青銅鏡、西安青銅鏡、青白磁、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、V、X、白銀鏡、陶器、中間陶器刀刃残、瓦器鏡、土師器环、瓦(系切り)、土器
SK111	内耕十坑 土坡	D-E-17 後半	12C 後半	利0.6m、深さ39.5m。SK97、SK98を切る。	井筒 壁を青銅鏡Ⅰ、西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、V、X、白銀鏡、土師器环(系切り)
SK112	内耕十坑 土坡	F-18 後半	12C 後半	利0.6m以上、利幅0.7m、深さ0.2m。SD64、SD70に切られる。SK121を切る。	土師器环、土師器环(系切り)
SK113	内耕十坑 土坡	E-F-19 後半	12C 後半	利0.6m、深さ0.3m。	西安青銅鏡、西安青銅鏡、白銀鏡、土師器环(系切り)、土器
SK114	内耕? 上 坡	F-G-19 後半	12C 後半	利1.8m、深さ0.8m。南側地盤を受ける。	西安青銅鏡、瓦、瓦器鏡、土師器环、瓦(系切り)、石錆
SK115	欠番				
SK116	内耕形土 坡	H-I-18 後半	12C 後半	利2.3m、深幅1.7m、深さ0.7m。SK120に切られる。	西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、瓦、軒平瓦、土師器环、瓦(系切り)、瓦
SK117	内耕形土 坡	I-J-19 後半	12C 後半	利1.8m、深さ0.4m。SK78に切られる。	西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、V、白銀鏡、陶器、須彌輪、土師器环(系切り)、土器
SK118	内耕形土 坡	H-I-19 後半	12C 後半	利0.7m。利幅0.7m、深さ0.3m。	土師器环(系切り)
SK119	内耕形土 坡	I-J-21 後半	12C 後半	利0.7m、深幅1.5m、深さ0.9m以上。	青銅鏡、白銀鏡、内圓輪形一文字圓輪形A斜鏡、陶器、瓦器鏡、土師器环(系切り)
SK120	内耕形土 坡	H-I-18 後半	12C 後半	利0.6m、深さ0.4m。SK116、SK26を切る。SK127に切る。	瓦器鏡、土師器环(系切り)
SK121	内耕形土 坡	H-I-19 後半	12C 後半	利0.7m、深幅0.6m、深さ0.5m。NK126を切る。	白銀鏡、土師器环(系切り)
SK122	内耕?	F-19-20 後半	12C 後半	利1.0m以上、深さ0.4m。SK114、SK150に切られる。	白銀、瓦片、瓦片、土師器环(系切り)
SK123	内耕? 土 坡	I-J-17 後半	12C 後半	利1.0m、深さ0.5m。所持範囲外に伸びる。	西安青銅鏡、青白合子鏡、白銀鏡、須彌輪、土師器环、瓦(系切り)、土器
SK124	内耕? 土 坡	C-D-17 後半	12C 後半	利1.0m、深さ0.7m。北側地盤以外に伸びる。SK85に切られる。	須彌輪、土師器环(系切り)
SK125	内耕形土 土坡	H-I-9 後半	12C 後半	利0.8m、深さ0.3mの所持。SK77、SK100に切られる。	瓦器鏡
SK126	内耕形土 土坡	H-I-18 後半	12C 後半	利0.1m、利幅0.6m以上、深さ0.1m。SK116、SK120、SK121に切られる。	
SK127	内耕形土 土坡	I-J-18 後半	12C 後半	利0.7m、瓦器鏡、6m、深さ0.3m。SK105、SK116に切られる。SK120より下。	
SK128	内耕十坑	H-I-14 後半	12C 後半	利1.0m、深さ0.3m。SK80に切られる。	
SK129	内耕? 土 坡	H-I-14 後半	12C 後半	利0.9m、深さ0.1m。SK80、SD62に切られる。SK99に切る。	
SK130	内耕? 土 坡	E-J-17 後半	12C 後半	利0.7m、深さ0.1m。SK96に切られる。	
SK131	不整内耕 上坡	F-18 後半	12C 後半	長幅1.3m、短幅1.1m、深さ0.9m。SD64、SK92に切られる。	瓦器鏡、土師器环(系切り)
SK132	欠番				
SK133	不整内耕 土坡	C-D-26 後半	12C 後半	長幅1.5m、短幅1.2m、深さ0.3m。東側地盤を受ける。	西安青銅鏡Ⅱ、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、白銀鏡、瓦器鏡、土師器环、瓦(系切り)、土器
SK134	内耕? 土 坡	H-C-24 後半	12C 後半	北側地盤以外に伸びる。利2.5m以降、深さ0.6m。	北京青銅鏡Ⅰ、西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、十鏡、土師器环、瓦(系切り)
SK135	内耕瓦崩 井戸	C-D-22 後半	12C 後半	利4.5mの所持に利幅0.8mの間に伸びる。北側地盤以外に伸びる。SK143、SK156を切る。	南方、埃及青銅鏡Ⅰ-E、河畔青銅鏡、青白水鏡、白銀鏡、青白水鏡、青白水鏡、瓦器上器、火器、土、土師器环付灰、瓦(系切り)、石錆
SK136	内耕上坑	G-H-27 後半	12C 後半	利2.3m、深さ0.5m。西側地盤を受ける。南側地盤を受ける。	西安青銅鏡Ⅱ、青銀鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、青白水鏡、白銀鏡付灰、青白水鏡、瓦器鏡、瓦、青白水鏡、白銀鏡付灰、青白水鏡、瓦器鏡、瓦、瓦器鏡、瓦、土師器环、瓦(系切り)
SK137	内耕? 土 坡	B-D-26 後半	12C 後半	利1.9m、深さ0.4m。南側地盤を受ける。	白銀鏡、白銀鏡、明鏡付、瓦、瓦口
SK138	内耕形土 土坡	C-D-27 後半	12C 後半	利3.4m、深さ0.4m。利幅0.7m。東側地盤以外に伸びる。SK173、SK74を切る。	白銀鏡、白銀鏡、明鏡付、瓦、瓦口
SK139	内耕形土 土坡	D-F-20 後半	12C 後半	利3.4m、深さ0.4m。利幅0.7m。東側地盤以外に伸びる。SK173、SK74を切る。	白銀鏡、白銀鏡、明鏡付、瓦、瓦口
SK140	内耕形土	F-G-20 後半	12C 後半	利2.2m、瓦器鏡、6m、深さ0.7m。東側地盤を受ける。SK141、SD158を切る。	白銀鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、白銀鏡、土、土師器环、瓦、瓦器鏡、瓦、土師器环(系切り)
SK141	内耕形土 土坡	E-F-22 後半	12C 後半	利1.0m以降、利幅1.1m。SK140に切られる。	青白水鏡、白銀鏡、土師器环、瓦(系切り)
SK142	内耕形土 土坡	E-F-22 後半	12C 後半	長幅1.0m、深幅0.9m、深さ0.6m。	土師器环、瓦(系切り)
SK143	内耕形土 土坡	C-D-23 後半	12C 後半	利幅1.7m以上、利幅1.2m、深さ0.9m。SE354に切られる。SK156を切る。	青白水鏡、白銀鏡、肥前青釉、瓦器鏡、土師器环(系切り)
SK144	不整内耕 土坡	C-22 後半	12C 後半	利0.6m、深さ0.2m。	瓦(系切り)
SK145	長耕内耕 土坡	C-21 後半	13C 後半	利幅1.1m、深幅0.4m、深さ0.3m。南側地盤を受ける。	青白水鏡Ⅱ、白銀鏡、瓦、土師器环(系切り)
SK146	内耕形土	D-E-21 後半	12C 後半	利幅1.1m、瓦器鏡、0.6m、深さ0.2m。南側地盤を受ける。	七瓣器环(系切り)
SK147	内耕形土	E-F-21 後半	12C 後半	利幅1.3m、瓦器鏡、0.9m、深さ0.4m。SK148を切る。	中空器皿A群鏡、天白鏡、瓦器鏡、土師器环(系切り)
SK148	内耕形土	B-21 後半	12C 後半	利幅1.0m以上、利幅0.9m、深さ0.3m。SK147、N-21を切る。	土師器环(系切り)
SK149	内耕形土 土坡	B-F-20 後半	12C 後半	利幅1.1m、利幅1.6m、深さ0.4m。SK150に切られる。SK148を切る。	西安青銅鏡Ⅱ、白銀鏡、土師器环(系切り)
SK150	内耕形土 土坡	F-G-20 後半	12C 後半	利幅1.6m、瓦器鏡、1.0m、深さ0.8m。SK122、SK149、SK151に切れる。SK170、SK171を切る。	西安青銅鏡、白銀鏡、白銀鏡Ⅳ、陶器、土師器环、瓦(系切り)
SK151	内耕形土 土坡	F-G-20 後半	12C 後半	利幅1.4m、瓦器鏡、1.0m、深さ0.5m。SK150に切られる。SK170、SK171を切る。	青白水鏡、陶器、瓦器鏡、瓦、土、土師器环(系切り)
SK152	不整内耕 土坡	F-G-22 後半	12C 後半	利幅1.4m、瓦器鏡、1.1m、深さ0.3m。SD34を切る。	瓦器鏡、瓦、土、土師器环(系切り)

遺跡番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SK-53	楕円形土坑	G-24	近世	長軸1.1m、幅軸0.5m、深さ0.2m。	瓦器部、土器部高台付环、瓦(未切り)
SK154	円形土坑	G-26	近世	長軸0.8m、深さ0.3m。東側、西側擾乱を受ける。壁	白磁碗、白磁瓶、陶器、土器部底盤(未切り)
SK155	楕丸形土坑	D- E-22	近世	長軸1.2m、幅軸1.1m、深さ0.3m。SK157を切る。	白磁碗、白磁瓶、瓦、土器、土器部底盤(未切り)
SEI156	円形横坑 井戸	C - D-22 -24	12C 後半	SK135に切られる。幅方幅0.3m。(後0.7m)の水槽を 井戸に掘る。	白磁碗、白磁瓶、瓦、土器、土器部底盤(未切り)、馬 鹿角貝殻罐1、白磁碗、瓦、青白磁合子、瓦器部、 土器部底盤付环、瓦、瓦(未切り)
SK157	円形土坑	D - E-22 -23	後半	長軸1.5m、深さ0.3m。SK156に切られる。SK165を 切る。	土器部底盤(未切り)
SD158	東西講	F-23 ~ 28	16C	東側発掘区分外に伸びる。壁±10m強離。幅1.0m、 深さ0.3m。	鍍金青磁罐1、白磁碗、白磁瓶N、陶器、瓦質柱棒、 火薬、土器、瓦、土器部底盤、瓦(未切り)、鏡
SK-59	円形土坑	F-27	近世	長軸0.6m。SD158に切られる。	土器部底盤(未切り)
SK160	椭円形土坑	F - G-25 -26	近世	長軸0.8m以上、幅軸0.6m。SD158に切られる。	土器部底盤(未切り)
SK161	椭円形土坑	H - J-27 -28	12C	北側発掘区分外に伸びる。長軸2.1m、幅軸1.3m以上。 壁±1.5m、深さ0.3m。瓦器部に切られる。	鍍金青磁罐1、中空容器A型盤、瓦瓦、平瓦、土器部 底盤(未切り)
SK162	椭円形土坑	I-26	近世	西側擾乱を受ける。長軸0.8m以上。壁±0.7m、深 さ0.3m。SK168を切る。	土器部底盤(未切り)
SK163	椭円形土坑	H - I-24 -25	12C	北側発掘区分外に伸びる。長軸1.1m、幅軸0.6m強。 壁±0.7m、深さ0.3m。	鍍金青磁罐1、白磁碗、瓦、瓦質柱棒(未切り)
SK164	椭円形土坑	E - 22	近世	長軸0.7m、深さ0.6m、深さ0.4m。西側擾乱を受 ける。SK165を切る。	人頭碗、瓦、瓦質碗、土器容器(未切り)
SK-65	椭円形土坑	E-22 - 23	12C	長軸0.9m、瓦軸0.7m、深さ0.5m。SK157、SK164 に切られる。	白磁碗、瓦、瓦、土器部底盤(未切り)
SK166	椭円形土坑	I-22	近世	長軸0.8m、幅軸0.6m、深さ0.4m。西側擾乱を受 ける。SK167を切る。	奇器、土器部底盤、瓦(未切り)
SK167	椭円形土坑	I-22	近世	長軸0.8m、幅軸0.7m、深さ0.5m。西側擾乱を受 ける。SK166に切れる。	少磁碗、白磁碗下、中国陶器A型盤、C型盤2個、日本 白磁碗、瓦器部、土器部底盤、瓦(未切り)、土器
SK168	椭円形土坑	I-26 - 27	近世	南側発掘区分外に伸びる。長軸3.6m、瓦軸4.0m以上、 深さ1.0m。SK162に切れる。SK161を切る。	鍍金青磁罐1 - B、白磁碗、白磁瓶N、白瓦白碗、瓦 質柱棒、土器部、土器部底盤、瓦(未切り)、石器、 鏡
NK169	方形状土坑	I-25 - 26	近世	南側発掘区分外に伸びる。長軸1.6m、可動軸0.9m以上、 深さ0.7m。上部に擾乱を受ける。底盤に石軸がある 。	少磁碗、白磁碗下、中國陶器A型盤、C型盤2個、日本 白磁碗、瓦器部、土器部底盤、瓦(未切り)、土器
SK170	椭円形土坑	G-20 - 21 -25	12C	長軸1.4m、幅軸0.8m以上、深さ0.5m。SK84、SK 151に切られる。SK171を切る。	瓦器部、瓦、羽口、土器部底盤、瓦(未切り)
SK171	椭円形土坑	F - G-21	12C	長軸1.2m、瓦軸0.7m、深さ0.8m。SD86、SK151 に切られる。SK170より遅く。	白磁碗、内格、瓦、土器部底盤(未切り)
SK172	椭円形土坑	F-27	近世	上部擾乱を受ける。SK138に切られる。残存底で長 軸0.9m、瓦軸0.4m。	瓦器部、瓦、土器部底盤(未切り)
SK173	椭円形土坑	E - F-27	近世	上部擾乱を受ける。SK138、SD158に切られる。残 存底で長軸0.5m、瓦軸0.1m、深さ0.4m。	瓦器部、瓦、土器部底盤(未切り)、土器
SK174	椭円形土坑	F-27	近世	市道擾乱を受ける。SK138に切られる。残存底で長 軸0.7m、瓦軸2.0m。	土器部底盤(未切り)
SEI175	椭円形土井戸	B - C-42	近代	長軸0.7m、深軸0.4mの椭円形の井戸に瓦を飛0.8m の内側に埋む。SK176、SK177、SE187、SK195、SE 202、SE203を切る。	瓦器部、瓦、砾石、泥炭方、扇状青磁碗、白磁碗下、 青磁碗、青磁瓶、白磁瓶、白磁皿、周環、復元器物、土 器部底盤、瓦器部、土器部底盤(未切り)、イイゴコロ
SEI176	椭円形土井戸	B - C-41	近代	長軸0.7m、深軸0.4mの椭円形の井戸に瓦を飛0.7mの 内側に埋む。瓦井戸2.1m残存。SE175に切られる。 SK177、SE187、SK196、SE202、SE203を切る。	瓦器部、瓦、土器部底盤(未切り)、坂方 白磁碗下、 V、中國陶器C型盤2個、肥足系舟、圓底陶曲鉢、火薬 瓶、人頭碗、瓦(未切り)
SK-77	椭円形七角	B-41	近代	長軸0.7m、深軸0.4m。SK175に切られる。	瓦器部、瓦、土器部底盤(未切り)
SK-78	椭円形七角	C-43	近世	北側発掘区分外に伸びる。壁±1.4m以上、深さ0.3m。 SK179に切られる。SK179を切る。	青磁
SK179	椭円形七角	C-13 - 44	近世	北側発掘区分外に伸びる。壁±1.5m以上、深さ0.7m。 SK178に切られる。SK175より遅く。	青磁碗、青磁罐、白磁碗、白磁瓶、瓦器部、肥足付、土 器部底盤(未切り)
SEI180	椭円形土井戸	C - D-43	12C	長軸1.6m、深軸0.9m。SK267に切られる。SK181 に切る。	瓦器部、青磁碗、白磁碗、白磁瓶、土器部底盤、瓦 器部底盤付环、土器部底盤、瓦(未切り)
SK181	椭円形土井戸	D-11	近代	長軸0.7m、深軸0.4m。SK182、SK196、SE202、SE20 に切る。	土器部底盤、瓦器部、丸瓦
SK182	椭円形土井戸	D - E-41	近代	長軸1.7m、深軸0.8m。瓦器部トレンチ。SK181に切 る。SD193を切る。	同安青磁罐1、瓦、瓦器部、瓦器部底盤、瓦、瓦、七 字、土器部底盤、瓦(未切り)、瓦
SK183	椭円形土井戸	E-41	近世	長軸0.6m、深軸0.4m。SD193を切る。	瓦器部、瓦、土器部底盤(未切り)
SK184	椭円形土井戸	C - D-43	近世	北側発掘区分外に伸びる。残存底約2.5m。東側擾乱 を受けた。SK186、SK267に切られる。SK201を切 る。	青磁碗、青磁罐、白磁碗、白磁瓶、瓦器部、肥足付、 土器部底盤(未切り)、瓦、同安青磁罐、白磁碗、土器部 底盤、瓦器部、火薬、瓦、瓦、土器部底盤、瓦(未切り)
SK-85	椭円形土井戸	D - E-46 -43	23C	長軸1.6m、深軸1.4m、深さ0.3m。SK194、SK267 に切られる。	青磁碗、瓦、同安青磁碗、陶器、小亞陶器C型盤2個、瓦 器部底盤(未切り)、瓦、瓦器部底盤、瓦(未切り)
NK185	楕丸形土坑	D - E-45	近世	長軸1.6m、深軸0.9m。SK267に切られる。SK184 を切る。SK201より遅く。	白磁碗、青磁碗、白磁瓶、瓦器部、土器部底盤、瓦 (未切り)
SEI187	椭円形土井戸	C - D-41	近世	長軸0.7m、深軸0.4m。SK182、SK196、SE202、SE203 に切る。	瓦器部底盤、瓦器部、瓦、瓦器部底盤(未切り)
SK188	椭円形土井戸	D - E-46 -43	近世	長軸1.6m、深軸1.4m、深さ0.3m。SK194、SK267 に切られる。	青磁碗、瓦、同安青磁碗、陶器、小亞陶器C型盤2個、瓦 器部底盤(未切り)、瓦、瓦器部底盤、瓦(未切り)
SK189	椭円形土井戸	F-41	近世	長軸0.6m、瓦軸0.3m、深さ0.3m。SD195を切る。	イイゴコロ、土器部底盤、瓦(未切り)
SK190	椭円形土井戸	F-43 - 44	近世	瓦軸0.7m、深軸2.4mの楕円形の井戸に瓦0.6mの 内側に埋む。瓦の抜け取りか。SK175、SE176、SE178 に切られる。SK177、SE196、SE202、SE203を切る。	瓦器部、瓦、瓦器部底盤、瓦、瓦
SK191	椭円形土井戸	G-43	近世	長軸0.8m、幅軸0.6m、深さ0.3m。SK192、SK199 に切る。	瓦器部、瓦、火薬、土器、土器部底盤、瓦(未切り)
NK192	椭円形土井戸	F - G-42 -43	近世	長軸1.0m、深軸0.6m、深さ0.5m。SK191に切ら れ。SK199を切る。	瓦器部、土器部底盤

地名	種類	位置	状態	周囲の構造	出土遺物
SD193	東西溝	D・H-33 -41	16C 22m程度。東側壁乱を受ける。SD194に接する。幅1.5~2.3m、深さ0.3~0.4m。SK182、SK183、SD221、SK229、SK230、SK231に切られる。SE197、SK204、SK205に切られる。	東側壁乱上に、河内青磁碗口、青磁皿、白磁瓶、三重輪付青瓷碗、陶器、中国唐物A群罐、須恵器等、瓦質標柱、筒瓦標柱、丸瓦、瓦足、土器、イイド山、上蓋標杯、瓦(手切り)、石鍋、石臼。	
SD194	東西溝	D・E-49 -47	16C 長さ2.3m、深さ0.3m。底0.1m。	上蓋標杯(手切り)	
SK195	円形桶状井戸	C・D-12 井戸	12C 北側壁97.75、SE176、SK187に切られる。幅方長軸4.2m以上、底幅3.0m残存。径0.5mの木桶をSE202、SE203とともに埋める。	井口、土器、五輪瓶、三重輪付青瓷碗口、白磁碗、白磁瓶、白磁碗V、白磁瓶II、白磁碗III、同安青磁碗口、上蓋、瓦器等、須恵器、上蓋標杯、丸瓦(手切り)、瓦足、瓦器等、瓦片、瓦器等、須恵器、瓦。	
SE197	円形桶状井戸	D・E-13 -44	12C SE196に切られる。幅方長軸3.3m、底0.7mの木桶をSK204とともに埋める。	井口、土器、五輪瓶、三重輪付青瓷碗口、同安青磁碗口、上蓋、瓦器等、三重輪付、瓦(手切り)、腰方青磁碗口、同安青磁碗口I、白磁碗IV、V、VI、周盤、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)、石甕。	
SE198	円形桶状井戸	G・H-42 -43	13C SK188に切られる。SE205を切る。幅2.8mの幅方に0.6mの木桶を埋める。	井口、青磁碗口、白磁碗IV、口先白地、陶器等、上蓋、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK199	円形桶状井戸	F・G-43	12C 長軸3m、幅方長軸7.0m、底0.3m。SK190、SK191、SK192に切られる。	藍麻青磁頭、西安青磁碗、土器等高古村环、瓦器等	
SK200	遺物桶状井戸	F・H-46 -48	12C 底高0.8m、1.2mの2.3×2.6mに広がる木骨の窓の東半部。	白磁碗V、中庭陶器皿背、瓦器等	
SK201	不規則形土坑	C・D-45 井戸	近代 北側壁露外に伸びる。幅軸1.2m以上、底幅1.1m、深さ0.5m。SK191に切られる。SK186、SK202より上。	▲標記、鐘形、火器、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK202	円形桶状井戸	C・D-45 井戸	12C SE197、SE176、SE187に切られる。幅方長軸4.2m以上、底幅3.0m残存。径0.6mの木桶をSK196、SK203とともに埋める。	井口、白磁碗、白磁碗IV、白磁碗V、腰方、瓦、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK203	円形桶状井戸	C・D-45 井戸	12C SE197、SE176、SE187に切られる。幅方長軸4.2m以上、底幅3.0m残存。径0.6mの木桶をSK196、SK202とともに埋める。	井口、白磁碗、白磁碗IV、腰方、瓦、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SE204	円形桶状井戸	D・E-42 井戸	12C 北側壁露外を受ける。幅方長軸3.3m、底0.6mの木桶を埋める。SE197とともに埋める。	井口、白磁碗、白磁碗IV、腰方、瓦、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SE205	円形桶状井戸	G・H-41 井戸	12C SK188に切られる。幅方長軸3.3m、底0.6mの木桶を埋める。	井口、白磁碗、白磁碗IV、腰方、瓦、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK206	桶形土坑	H・I-39 井戸	近代 長軸2.0m、幅軸1.0m、深さ0.6m。SK207、SK210に切れる。SK237より上。	前縁附付、圓弧高足器、瓦器、土器入器、瓦、瓦器等	
NK207	桶形土坑	I-39、40	近代 長軸1.8m、深さ1.3m、底0.5m。東側と西側の側面に板材を立てて、SK206に切られる。	前縁附付、圓弧高足器、瓦器、土器入器、瓦、瓦器等	
SK208	桶形土坑	G・H-39 井戸	12C 長軸1.3m、幅軸0.8m、深さ0.5m。SK210、SK237に切れる。	井口、白磁碗、白磁碗IV、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK209	桶形土坑	G-40	12C 長軸0.9m、幅軸0.8m、深さ0.2m。SK210を切る。	七頭、土器標杯(手切り)	
SK210	桶形土坑	G・H-39 井戸	12C 長軸2.5m、幅軸0.5m、深さ0.3m。SK206、SK208、SK237に切れる。SK237より上。	藍麻青磁頭I、同安青磁頭II、白磁碗、土器標杯、瓦器等	
NK211	桶形土坑	H-1-38	近代 長軸1.0m、幅軸0.8m、深さ0.2m。	前縁附付、白磁碗、白磁碗IV、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK212	円形桶状井戸	D・E-38 井戸	12C 長軸1.6m、列軸1.5m、深さ0.3m。	藍麻青磁頭I、同安青磁頭II、白磁碗、瓦、土器標杯、瓦、土器標杯付竹枕、杯、盘(手切り)	
SK213	円形土坑	D・E-39 井戸	近代 長軸1.4m、深さ0.7m。	瓦器等付、瓦器等標杯、火盆、籠、瓦、土器標杯、瓦砾	
NK214	円形土坑	D-33	近代 長軸0.7m、深さ0.2m。SK215を切る。	瓦	
SK215	円形土坑	D-38-39 井戸	近代 北側壁露外に伸びる。幅1.8m以上、深さ1.6m。瓦器等を受ける。SK214に切られる。	白磁碗IV、火器、瓦、土器	
SK216	土坑	D・E-37	近代 北側壁露外に伸びる。瓦器等を受ける。SK214に切られる。	瓦器等、土器標杯(手切り)	
NK217	円形土坑	E-37	近代 長軸0.9m、深さ0.4m。西側壁露を受ける。SK238に切れる。SK216と同じ。	瓦器等付、瓦器等標杯、瓦	
SK218	方形土坑	E-36	近代 南側壁露を受ける。残存高さ0.8m、深さ0.2m。	土器器	
SK219	椭円形土坑	D-34-35 井戸	近代 北側壁露外に伸びる。東側壁乱を受ける。長軸1.2m以上、短軸0.3m以上。深さ0.5m。SK220を切る。	青磁、肥前南付、附器、瓦足	
SD220	南北溝	D・E-32 井戸	12C 北側壁露外に伸びる。瓦器等を受ける。長軸1.5m以上、深さ1.3m。SK238に切られる。	青磁碗、白磁碗、土器標杯(手切り)	
SD221	南北溝	D・J-32 井戸	近代 南側壁露外に伸びる。瓦器等を受ける。長軸1.5m以上、深さ1.3m。SK238に切られる。	藍麻青磁頭I、同安青磁頭II、同安青磁頭III、白磁碗II、N、M、P、Q、中庭陶器、天日柄、須恵器等、瓦器等、土器標杯、瓦(手切り)	
SK222	桶形土坑	F・G-33 井戸	13C 長軸3.0m、幅軸1.6m、底幅0.9m。SD193に切れる。	瓦器等付、丸瓦、土器等高古村付、L、P、瓦(ハラギリ・水切り)	
SK223	桶形土坑	G-36	近代 南側壁露を受ける。長軸1.3m、短軸0.7m残存、深さ2.0m。		
SK224	桶形土坑	H-36	近世 南側壁露を受ける。長軸0.8m、底幅0.7m、深さ0.4m。SK232を切る。	瓦	
SK225	円形土坑	I-37、38	近世 南側壁露外に伸びる。東側壁露を受ける。残存部、瓦		
SK226	円形土坑	I-37	近世 長軸1.0m、深さ0.8m、深さ0.4m。	瓦	
SK227	円形土坑	I-36-37	近世 南側壁露外に伸びる。長軸1.2m、深さ0.5m。	前縁付、腰付高足器、瓦、土器標杯(手切り)	
SK228	円形土坑	I-36	近世 北側壁露外に伸びる。残存部で長軸1.9m、短軸0.8m。SD195、SK230を切る。	青磁碗、陶器、瓦、土器標杯(手切り)	
SK229	桶形土坑	I-37	近世 北側壁露外に伸びる。長軸0.9m残存、短軸1.6m、深さ0.3m。SK229に切られる。	瓦、土器	
SK230	桶形土坑	F-36、37	近世 北側壁露外に伸びる。SD193を切る。		

IV 福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体

鹿児島大学獣医学科解剖学教室

西中川駿・吉野文彦

1. はじめに

わが国のウマやウシがいつ頃渡来したかは明確な結論は出でていないが、おそらく弥生中期以降であろうとされている。また、ウマやウシが最も多く出土する時期は中世で、次いで古墳時代であり、九州でも筆者らの調査でウマ73、ウシ53箇所からの出土をみる。福岡県内では近年、石田、高野、博多33次、博多37次、立花寺B、上唐原稻本屋敷遺跡など数多くの遺跡から出土例が報告され、また、埋葬例も検出されている。

箱崎遺跡群10次調査地点は、福岡市東区箱崎3丁目にあり、箱崎阿恵線道路整備事業のため、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成8年11月から平成9年3月まで発掘調査を行ったものである。時期はSK190が12世紀から13世紀、SX200は12世紀の前半のものと推定されている。今回調査を依頼された動物遺体は大半はウマのものであり、出土状況を確認した後、当教室に搬入されたものである。計測可能な骨や歯について測定を行い、年齢や体高の推定を試みたので、その概要を報告する。

2. 出土状況

ウマの遺体の出土したSK190は、土坑に1頭が埋葬されており、発掘時の写真によると、左側を下にして、頭部を腹方に曲げて、頭を胸につけるようにした形で、前、後肢をそろえて埋葬されている。これらの状態から死後埋葬されたことがうかがえる（図版I-1）。SX200は頭蓋のない2個体で、写真からみると、一応肢骨はつながっているが、位置がばらばらで、丁寧に埋葬したものではなく、投棄されたものか、また、肋骨など胴骨の位置と四肢骨の位置が少し離れていることから、流水により流された可能性も考えられる。また、このSX200にはウシが数点含まれている。ウシはこの他にSK86から1点、攪乱から1点が出土している。また、イヌ（SE107）、シカ（SX200）、クジラ（SD50）、イルカ（SK136）、カメ（スッポン）（SX200）、マグロ（SK136）などが検出されている。SK190の重量は1600.7g、SX200からは4721.2g、その他からは413.6g、総重量6735.5gである。

3. 出土遺体の概要

1) SK190出土の1号ウマ（図版Iの1～20参照）

1号ウマは、前述のように左側を下にして横臥した状態で埋葬され、脊柱骨は頸椎のみで他の椎骨はみられないが、頭部を曲げた状態であり、頭蓋骨片や遊離した左右の上顎臼歯（ $P^1 \sim M^1$ ）、右の下顎臼歯（ $P_3 \sim M_3$ ）も検出されている。左下顎骨は臼歯（ $P_3 \sim M_3$ ）をもつ下顎体からなり、切歯部や筋突起などは欠如している。これら臼歯から筆者らの方法で年齢を推定すると198.16±24.93月齢となり、16.5才と推定される。

前肢骨は表1に示すように肩甲骨、上腕骨、桡骨、中手骨、指骨などが、後肢骨は寛骨、大腿骨、脛骨、足根骨、中足骨、趾骨などが検出されているが、いずれも完形骨はない。これらの骨の計測可能な部位から筆者らの方法で骨長を推定し、林田らの方法で体高を推定すると、114.76±4.16となり、この推定値は現生のトカラ馬（115cm）とほぼ同じ高さで、小型馬に属する。

2) SX200出土の2号、3号ウマ（図版IIの1～19参照）

2号、3号ウマは骨の大きさにより区別したが、2号が小さく、3号が大きい。両者共頭蓋ではなく、表Iに示すように頸椎、胸椎、肋骨など少ないが検出されている。前後肢骨は2号ウマは左右がそろっているが、3号ウマは多くの骨で右側が出土していない。しかし、四肢骨はほぼ完全な形で出土しており、桡骨、中手骨、基節骨、中節骨、脛骨、距骨、中足骨、趾骨などの計測値を用いて、体高を推定すると、2号ウマは $117.64 \pm 2.65\text{cm}$ で、1号ウマより少し大きく、3号ウマは $125.13 \pm 3.72\text{cm}$ と2号ウマよりさらに大きく、御崎馬（130cm）より小さいが中型馬に属する。なお、2号、3号ウマ共に歯の出土がないので年齢の推定はできないが、長骨の骨端線の閉鎖などから成獣であることがわかる。

3) ウシ（図版IIの20～23参照）

SX200から右側の尺側手根骨と第四手根骨、中節骨（右、趾）、右側の下顎骨（M₃を含む）が検出され、また、SK86からは左側中手骨が出土している。下顎骨の第三後臼歯から年齢を推定すると11才であり、また、歯冠長（36.8mm）から筆者らの方法で体高を推定すると122cmとなり、これは雄のものと推定される。中手骨中央幅や径（30.9×21.4mm）から体高を求める117.86cmであり、これは雌のものと推測される。

4) イヌ（図版IIの25、26参照）

イヌはSE107から左右の上顎骨、下顎骨が出土しており、不完全な骨のために計測値を示すことはできないが、現生の柴イヌとほぼ同じ大きさの小型犬である。

5) その他の動物遺体（図版IIの24、27～29参照）

シカ（SX200）の右上腕骨、クジラ（SD50）の椎骨、イルカ（SK136）の椎骨、カメ（スッポン）（SX200）の腹甲、マグロ（SK136）の椎骨などが検出されている。

4. 考 察

中世の遺跡からのウマ、ウシの出土例は、全国各地から報告され、特に神奈川県の千葉地東遺跡や藤原敷遺跡では大量に出土している。九州では北九州および熊本県を中心にその出土例が数多く報告され、福岡市でも近年博多33次、37次や立花寺B遺跡などからウマの遺体が検出されている。立花寺B遺跡からは2体が重なるようにして出土しており、明らかな埋葬例であった。本遺跡の1号ウマは、頭部を曲げて頭を胸につけるような形で埋葬されており、土坑が狭いためにこのように折り曲げた形で埋葬されたのであろう。2、3号ウマは、四肢骨の出土地点と肋骨などの出土地点が少し離れていることから流水により移動し、集積したかのようになっている（図版IIの1）。これらのウマは投棄されたのか、埋葬されたのかよくわからない。しかし、刀痕などみられないことから食料としたものではないと思われる。

一般に中世のウマは体高128cm位であるが、本遺跡のものは1号ウマが114.7cm、2号が117.6cm、3号が125.13cmと低く、1号ウマは16.5才と老齢である。1、2号ウマのような小型馬は中世の遺跡でもしばしばみられるが、博多37次では $128.26 \pm 1.98\text{cm}$ 、立花寺B 130cm、北九州市の高野遺跡のものは128.5cmと推定されており、いずれも現生の御崎馬とほぼ同じ体高を有している。

これらのウマの祖先が、いつ頃、どこから渡来してきたかは明確でないが、民族の移動により持ち込まれたと考えられ、今のところ C¹⁴測定を行っている福江市の大浜遺跡の弥生中期が最も古いとされ、この時期に朝鮮半島経由で北部九州に入ったとされている。

一方、本遺跡からのウシの出土は極めて少なく、下顎骨、中手骨などであり、出土地点が異なるの

で少なくとも3個体のものと推定される。体高117.8cm(雌)、122.0cm(雄)のものとがあり、現生の口之島野生化牛とほぼ同じ大きさである。イヌは中世の遺跡からウシ、ウマと共によく出土する動物で、縄文時代の小型犬から中世には中型犬が移入して来るといわれている。本遺跡のイヌは小型犬であり、体高40cm以下であると推定される。

その他の動物であるシカ、クジラ、イルカ類がみられ、また、魚類も少量検出されているが、これらは食料とされたのであろう。

箱崎遺跡を造した人々は、小型、中型のウマやウシを飼育し、交通、運搬、農耕用として使役していたのであろう。他の遺物は食料として利用していたのであろう。

5.まとめ

福岡市箱崎遺跡群10次調査地点出土の動物遺体について調査した。

- 出土した動物遺体はウマが大半であるが、少量のウシ、イヌ、シカ、クジラ、カメ(スッポン)、マグロなどで、総重量6735.5gである。
- ウマはSK190から埋葬例で1個体(1号)、SX200から投棄されたような2個体(2、3号)が検出され、1号ウマは体高114.7cm、年齢16.5才、2号は117.6cm、3号は125.1cmと推定されたが、頭蓋や歯の出土がないために年齢不詳である。いずれも小～中型馬である。
- ウシは、SX200などからわずか4点の出土であるが、下顎第三後臼歯や中手骨の計測値から11才、体高117.8cmと推定された。イヌは小型犬に属する。

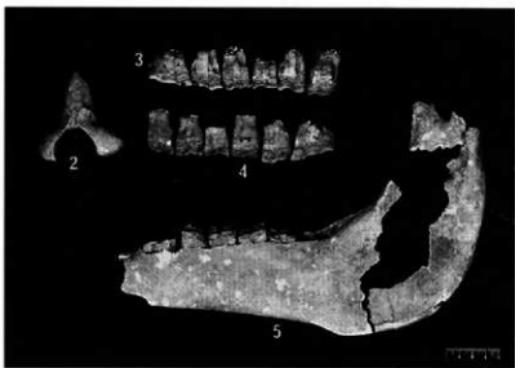
表1 箱崎遺跡群10次調査地点のウマの出土骨片数

骨名	部位	頭骨			四肢骨			尾骨			上顎骨			下顎骨			出土 骨片数		
		前 下 頸 骨 部 位	頭 骨 部 位	四肢 骨 部 位	尾 骨 部 位	上 顎 骨 部 位	四肢 骨 部 位												
トレンチ SK190 1号馬	L	6	2	7				1	2	2	4	1	1	1	2	4	1	2	
	R	5	5	9	4			1	1	1	2	1	3	1	1	3	1	3	78
SX200 2号馬 3号馬	L				12	1	1	2	2	7	7	5	3	2	3	9	1	4	
	R				17	1	1	3	1	4	4	3	1	1	2	5	3	3	124
骨種別 以上骨片数		34		50		59						59			59			202	
		(15.8%)		(24.8%)		(22.7%)						(25.2%)							
		上顎骨、下顎骨		頭骨		頭骨													

[参考文献]

- 林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究 p109～120、日本中央競馬会、東京(1978)
- 福岡県教育委員会：上庄原塙本屋敷跡 p103～105 (1997)
- 福岡市教育委員会：立花寺B遺跡 p75～77 (1997)
- 福岡市教育委員会：博多11 p35～38 (1988)
- 福岡市教育委員会：博多16 p173～174 (1991)
- 北九州市教育文化事業団：高野遺跡 p129～132 (1997)
- 金子浩昌：中世道路における動物遺体—鎌倉市内の遺跡例を中心として—鎌木義昌先生古希記念論文集 p107～135 (1988)
- 西中川駿輔：古代道路山土骨からみたわが国の牛、馬の従来時期とその経路に関する研究、文部省科学研究成果報告書 p1～95 (1991)

図版 I



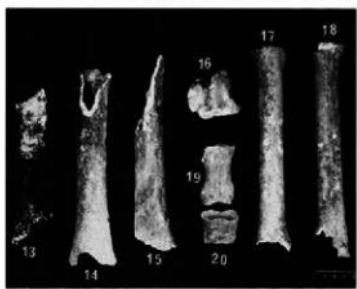
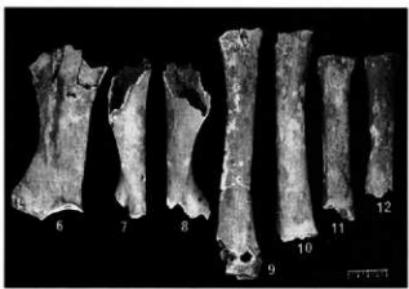
1 : ウマ遺体出土状況 (SK190、
1号ウマ) 下方に脊柱がある。

2～20：1号ウマ (SK190)

L: 左側 R: 右側

2. 後頸骨 3. 上顎第二臼歯～第三臼歯 (R、左から) 4. 上顎第二臼歯～第三臼歯 (L、右から) 5. 下顎骨 (L) 6. 肩甲骨 (L) 7、8. 上腕骨 (R、L) 9、10. 桡骨 (R、L)

11、12. 中手骨 (R、L) 13. 大膝骨 (R) 14、15. 軽骨 (L、R) 16. 距骨 (R) 17、18. 中足骨 (L、R) 19. 基節骨 (趾、L) 20. 中節骨 (趾、L)



図版II



- 1：ウマ遺体出土状況(SX200) 3
号ウマ）右上方に肋骨などがある。
2～19：ウマ(SX200) 20：ウシ
(搅乱) 21：ウシ(SK86) 22、23
：ウシ(SX200) 24：シカ(SX200)
25、26：イヌ(SE107) 27：カメ(ス
ッポン)(SX200) 28、29：イルカ、
マグロ(SK136)
2. 肩甲骨(R) 3. 上腕骨(L) 4. 前
腕骨(R) 5. 中手骨(R) 6. 7. 基節
骨(指、L、R) 8. 中節骨(R) 9. 寛
骨(R) 10. 大腿骨(R) 11. 脛骨(L)
12. 13. 種骨(R) 14. 距骨(L) 15. 膝
蓋骨(R) 16. 中足骨(R) 17. 基節骨
(趾、R) 18. 中節骨(趾、R) 19. 跖骨
(趾、L) 20. 下頸(第三後臼歛、L) 21.
中手骨(L) 22. 手根骨(R) 尺側 第四)
23. 第四趾中節骨(R) 24. 上腕骨(R)
25. 頭蓋骨(L、R) 26. 下頸骨(L、R)
27. 腹甲 28. 29. 椎骨

箱崎 6

—箱崎遺跡群第10次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書(第551集)

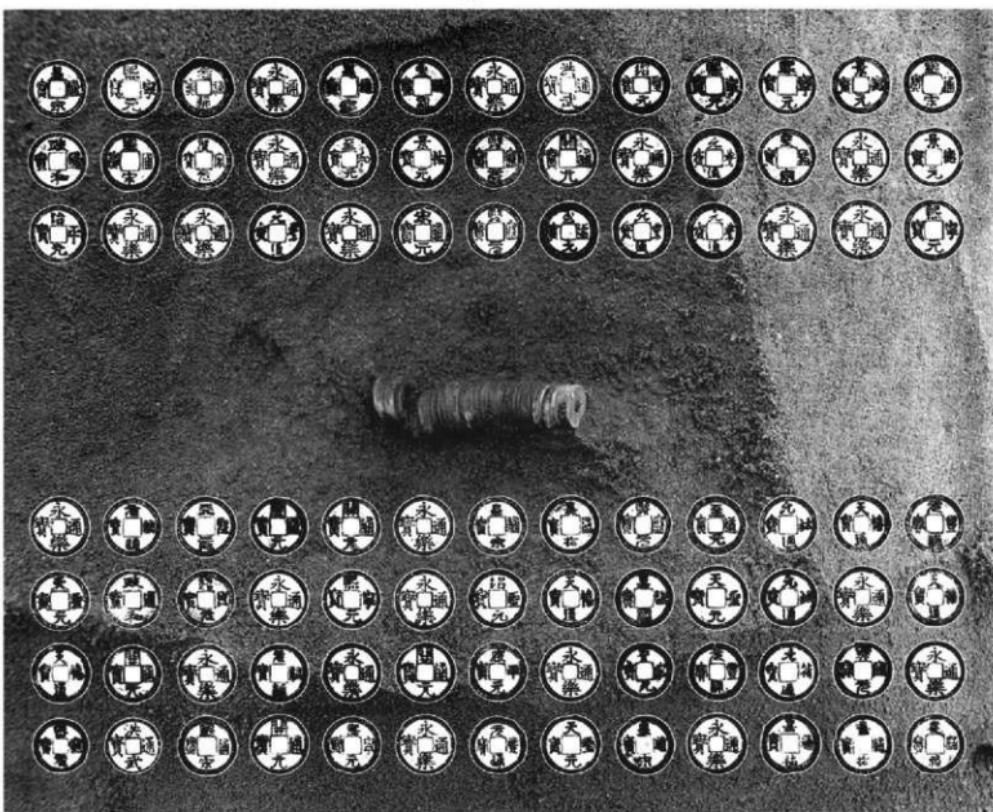
1998年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大神・丁目8-1
☎092-711-4667

印 刷 ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田3丁目9-32
☎092-621-8711

HAKOZAKI 6

—Results of the 10th excavation of the Hakozaki sites—
Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol. 551



1998

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY